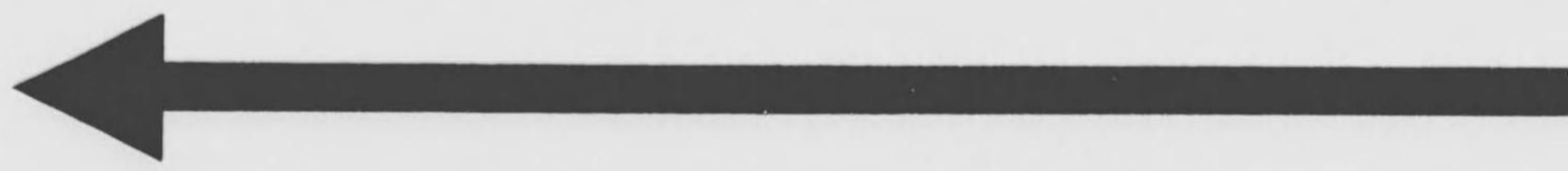


354
27

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24

始

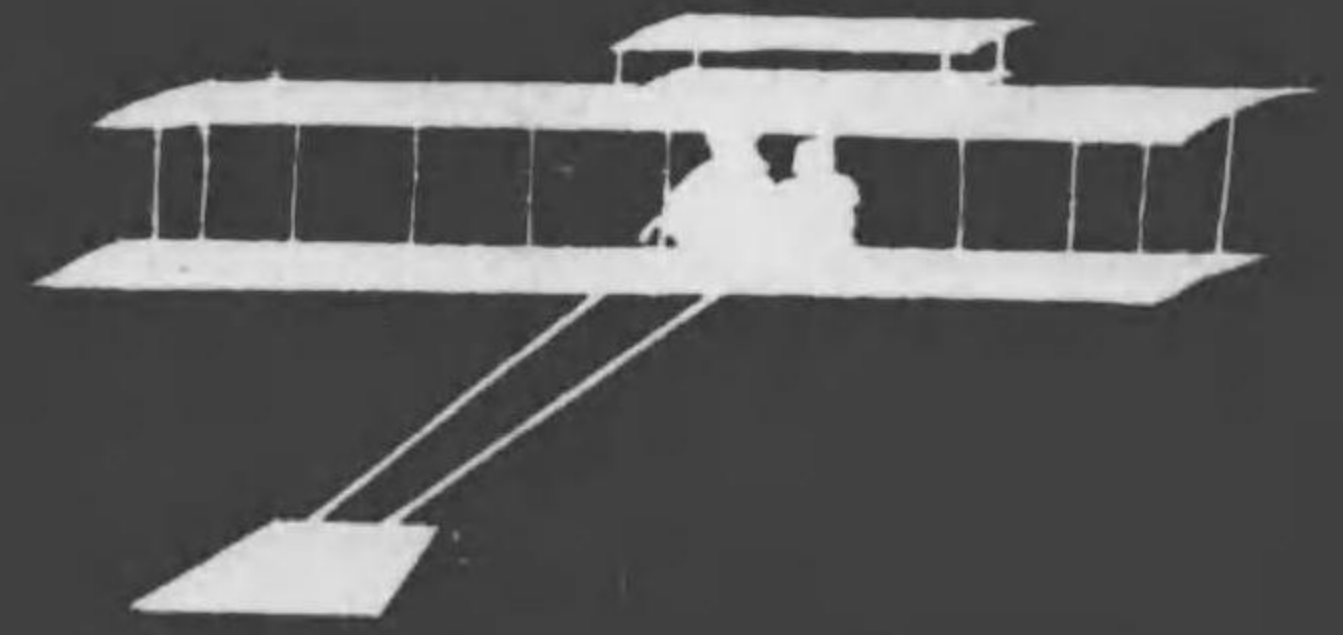


3116

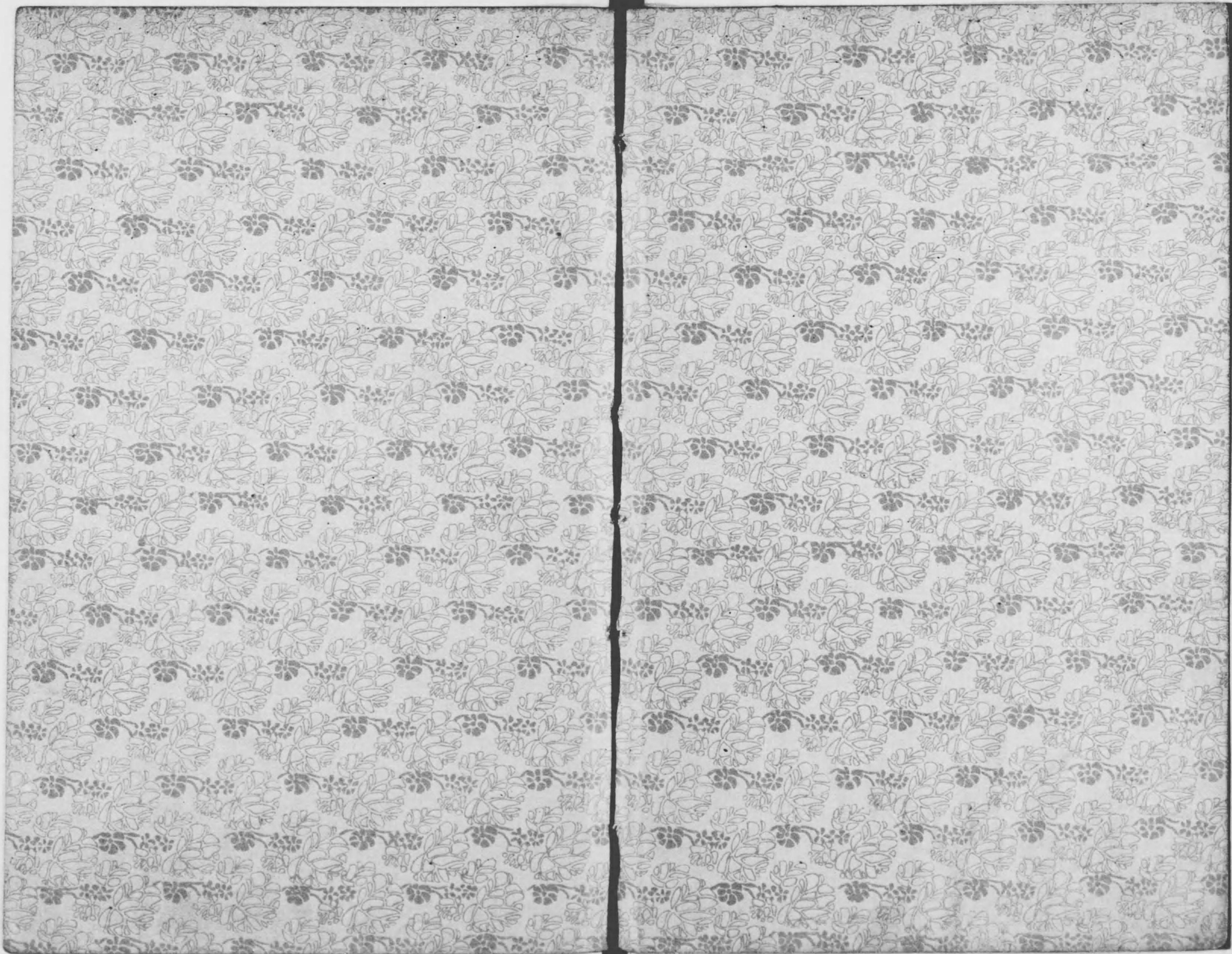
354
27

通 俗 講 話
戰 爭 の 智 識
全

東京日日新聞記者
桑野正夫著



東京
粉山書店發行



桑野正夫著



通俗講話
戰爭の知識

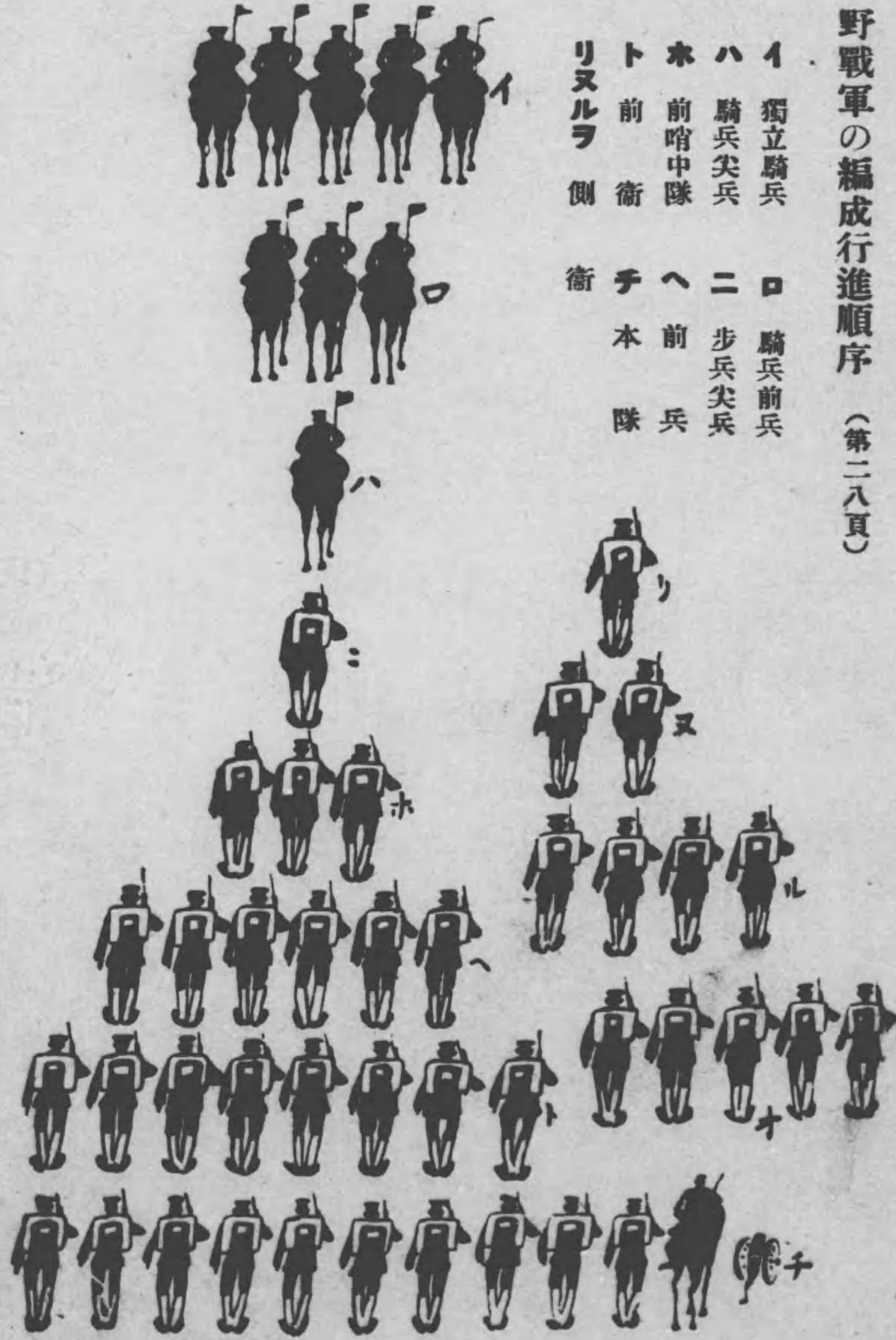
東京 初山書店

全
大正
3. 11. 16
内交

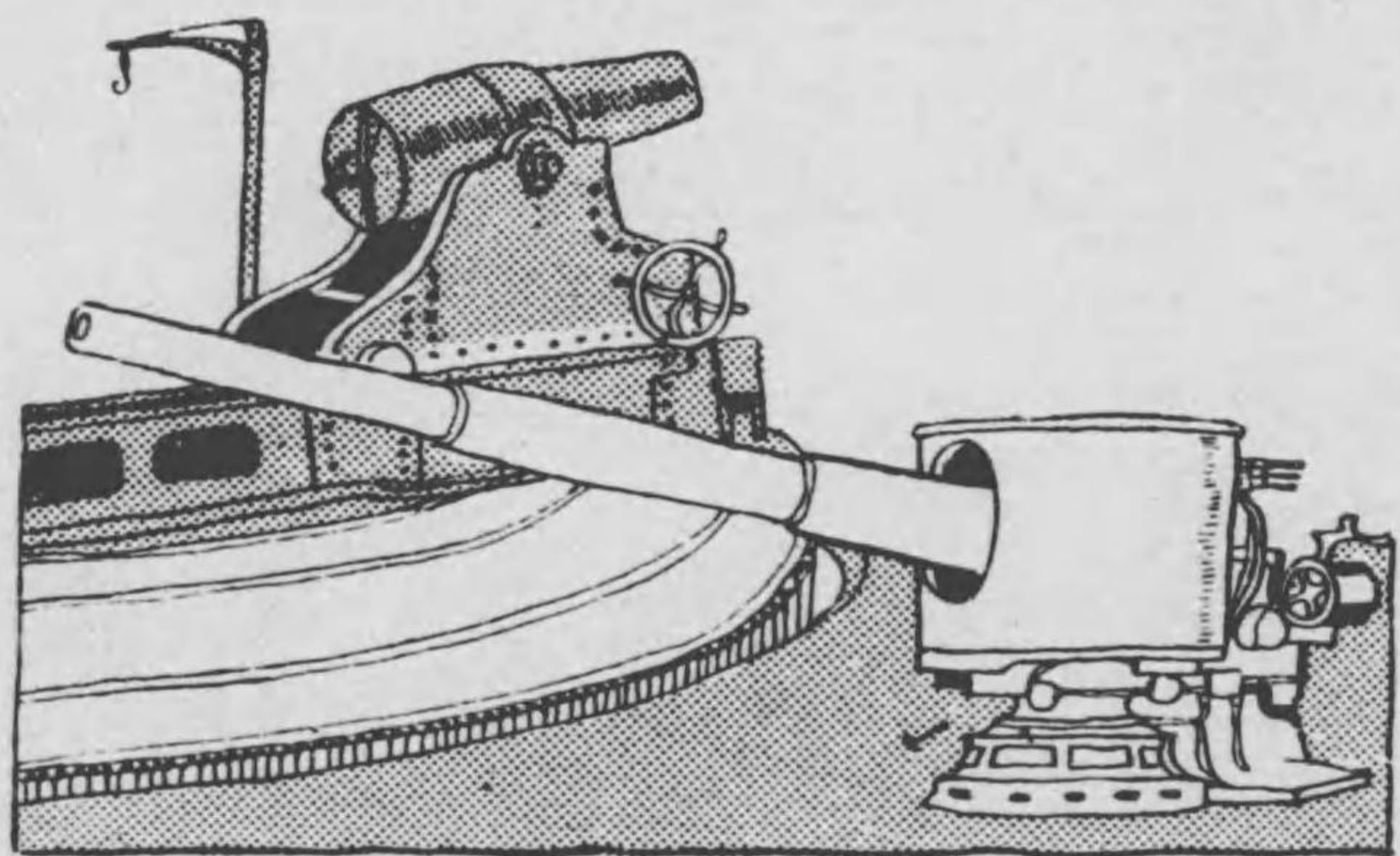
野戦軍の編成行進順序 (第二八頁)

4 獨立騎兵
 ハ 騎兵尖兵
 ホ 前哨中隊
 ト 前衛
 リヌルヲ 側衛

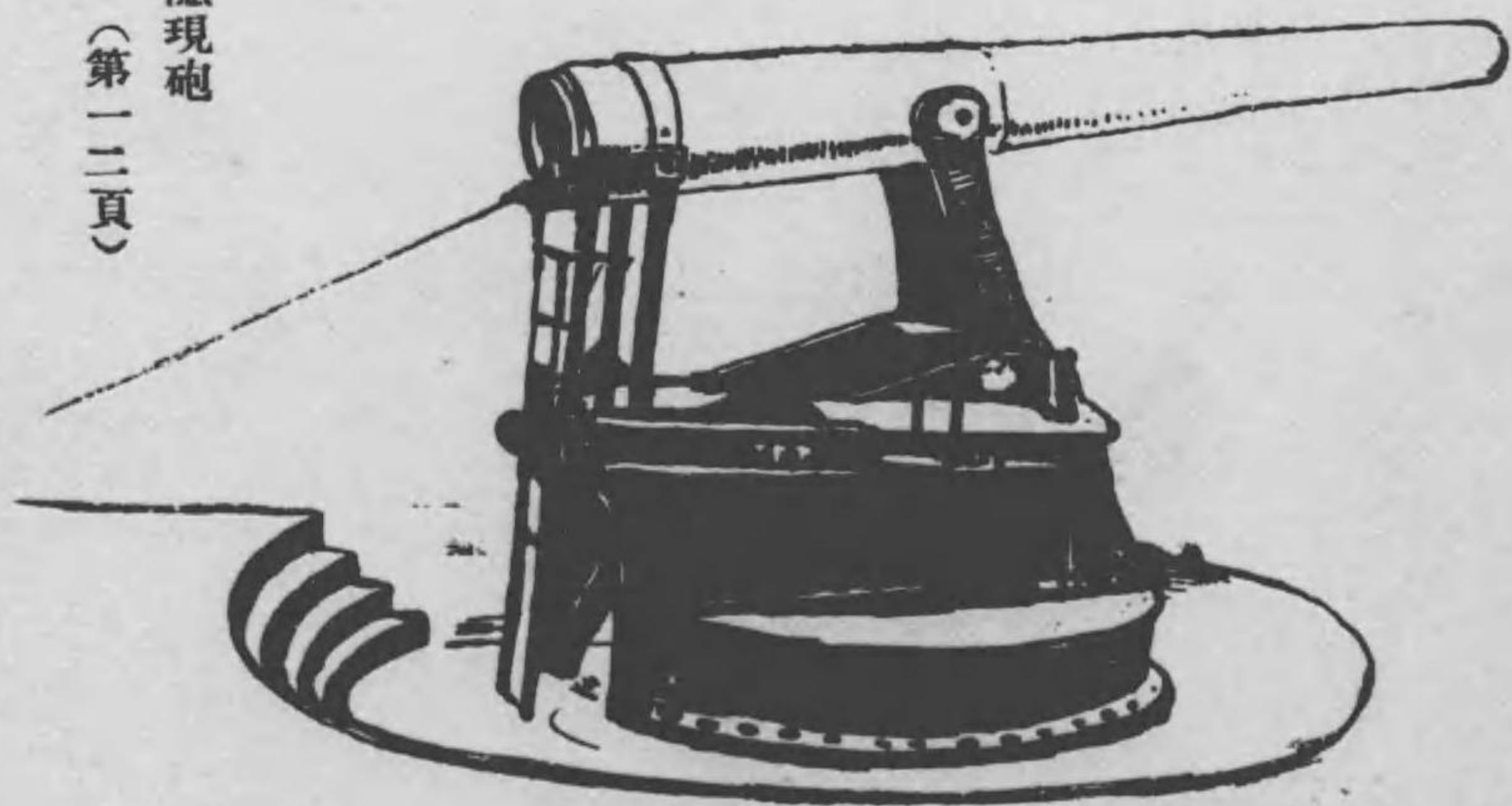
口 騎兵前兵
 ニ 歩兵尖兵
 ヘ 前衛
 チ 本隊
 隊



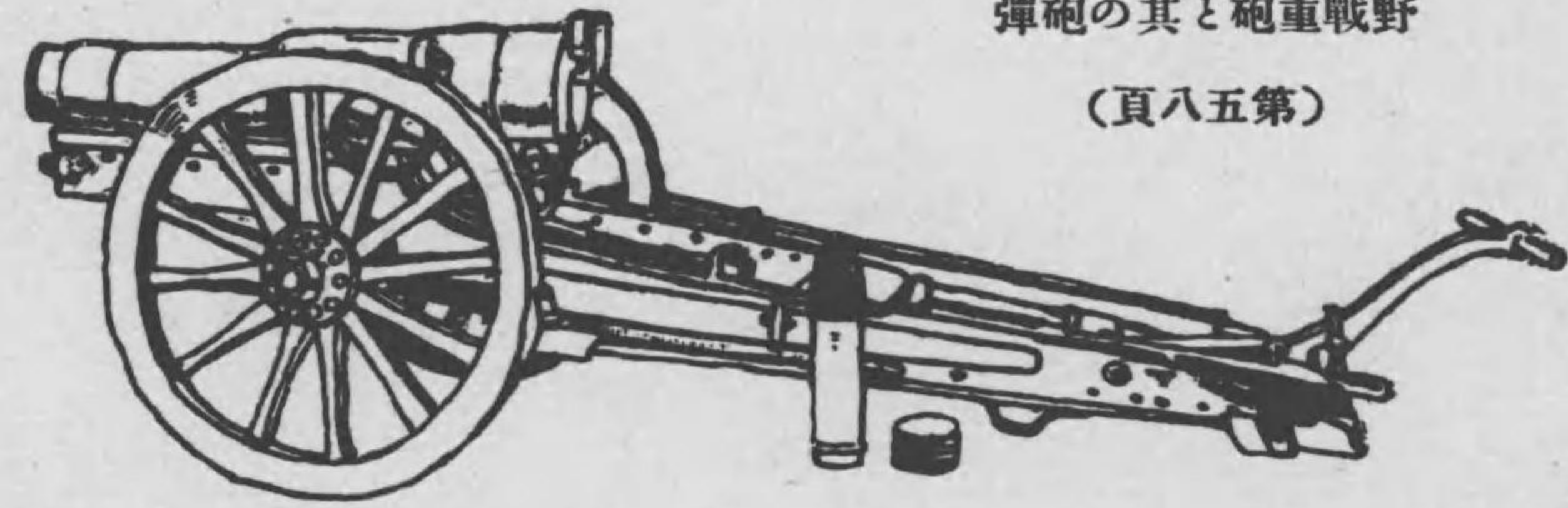
加農砲と臼砲
(第一二頁及第一八一頁)



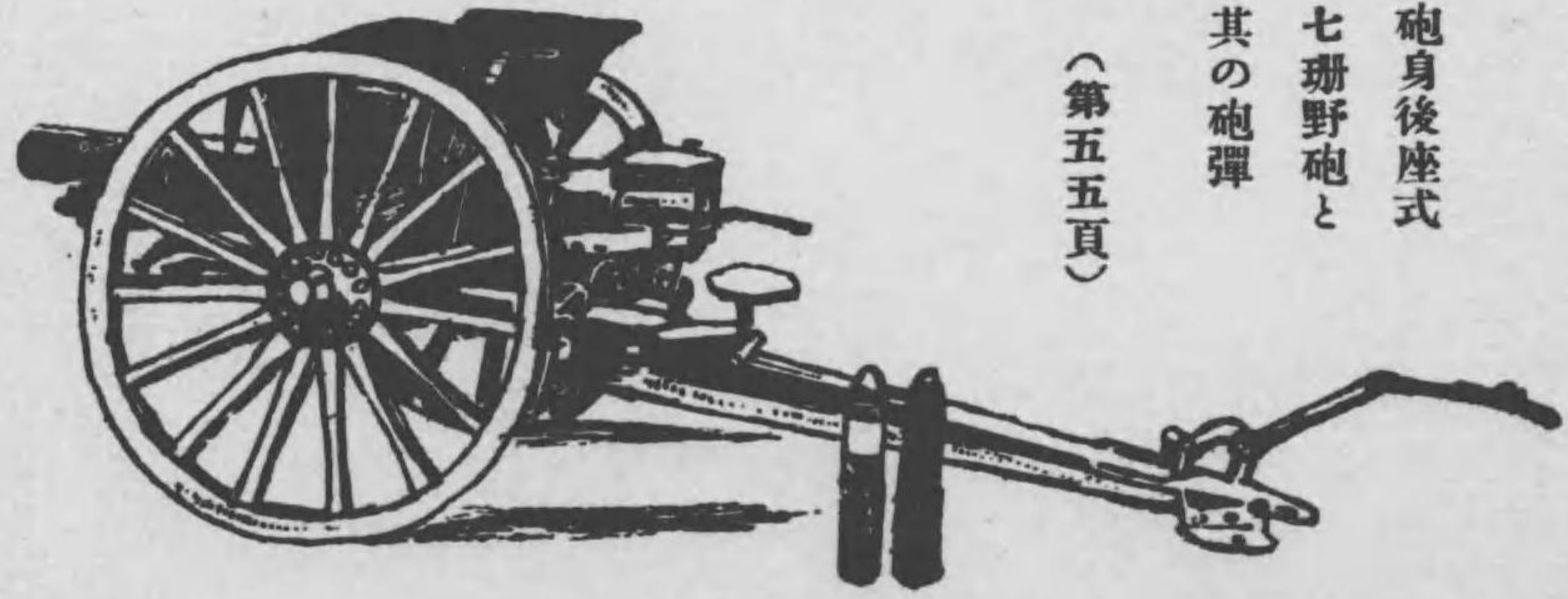
要塞の隠現砲
(第一二頁)



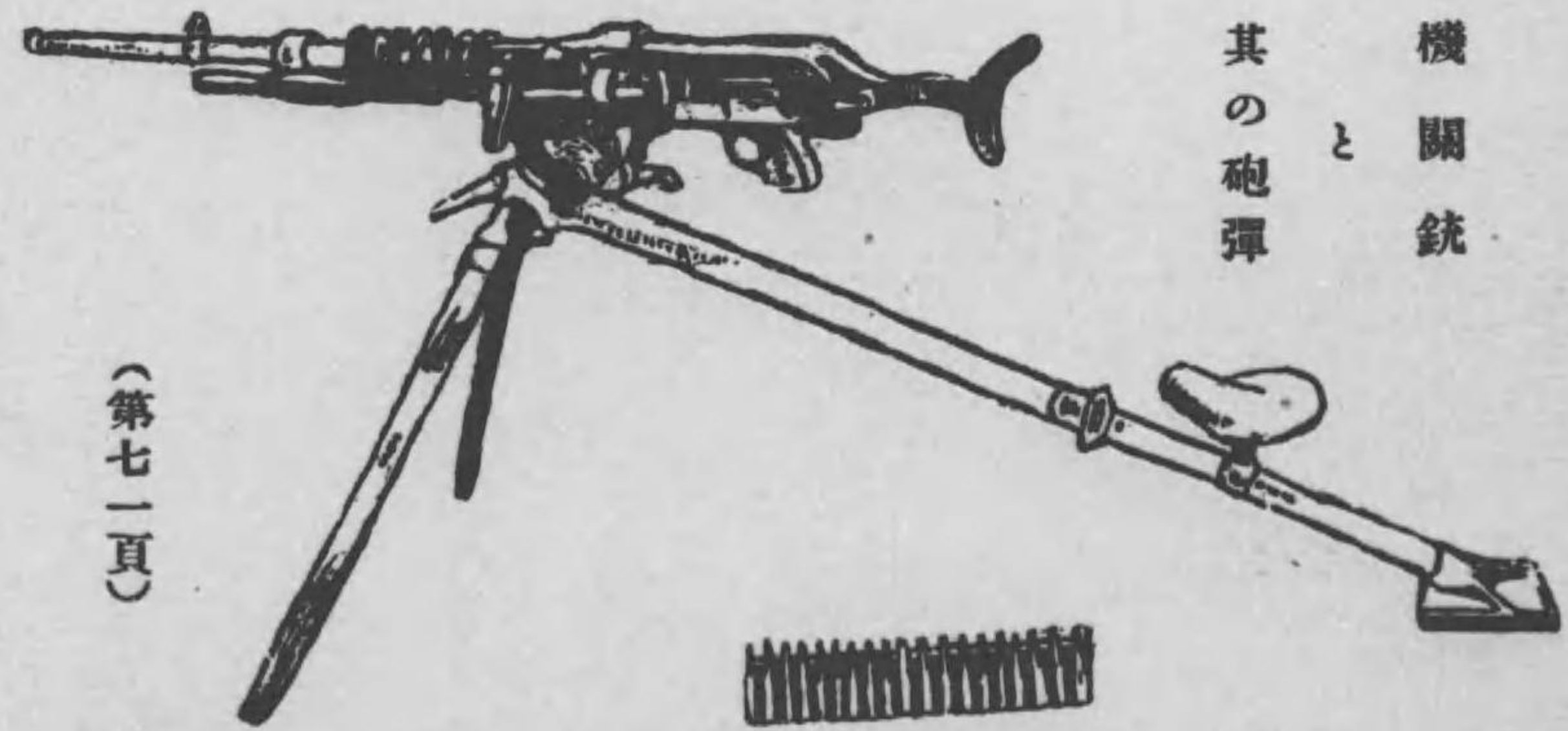
野戰重砲及其砲彈
(第五八頁)



式座後身砲珊七
と砲野珊七
其の砲彈
(第五五頁)



銃關機
と
其の砲彈

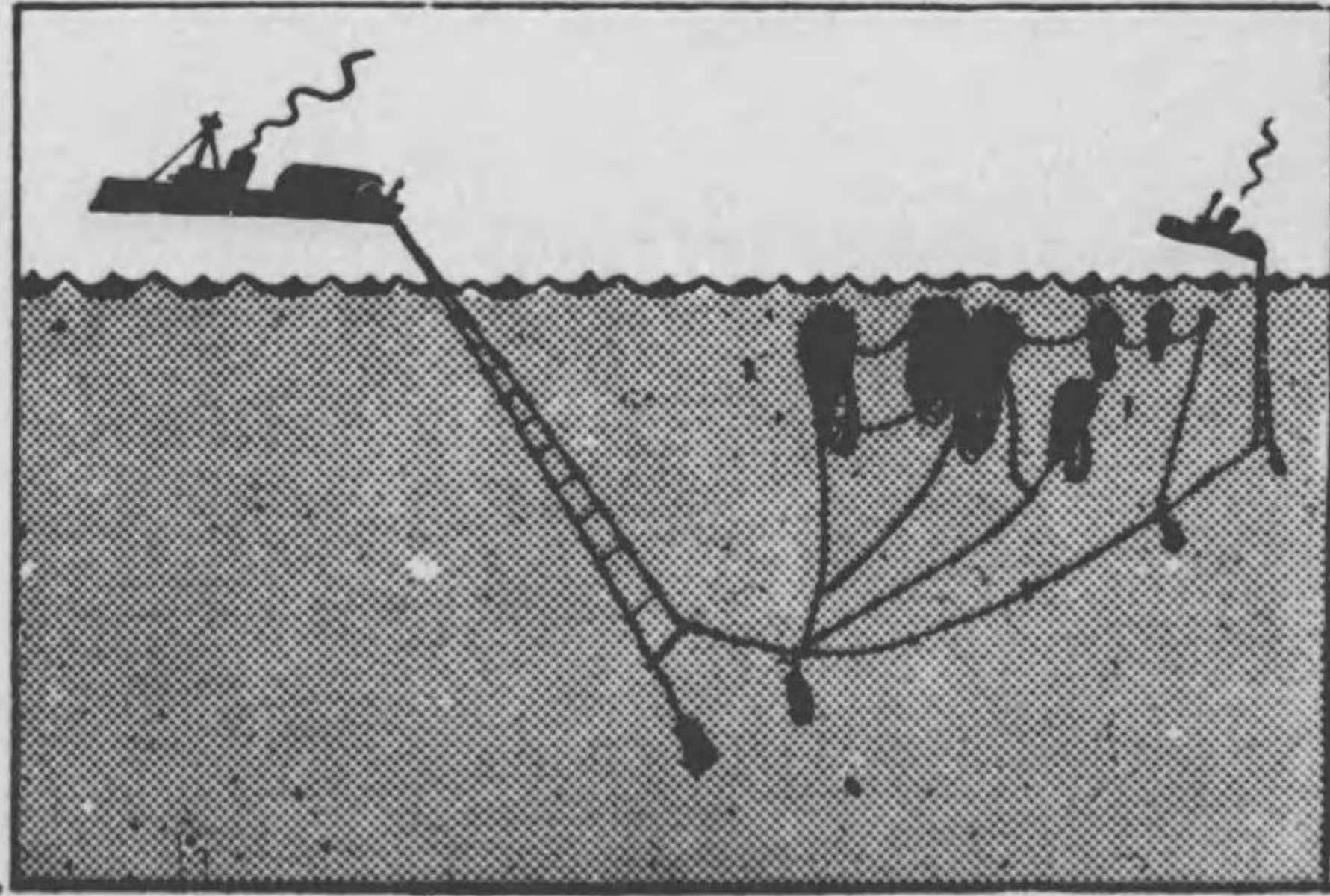
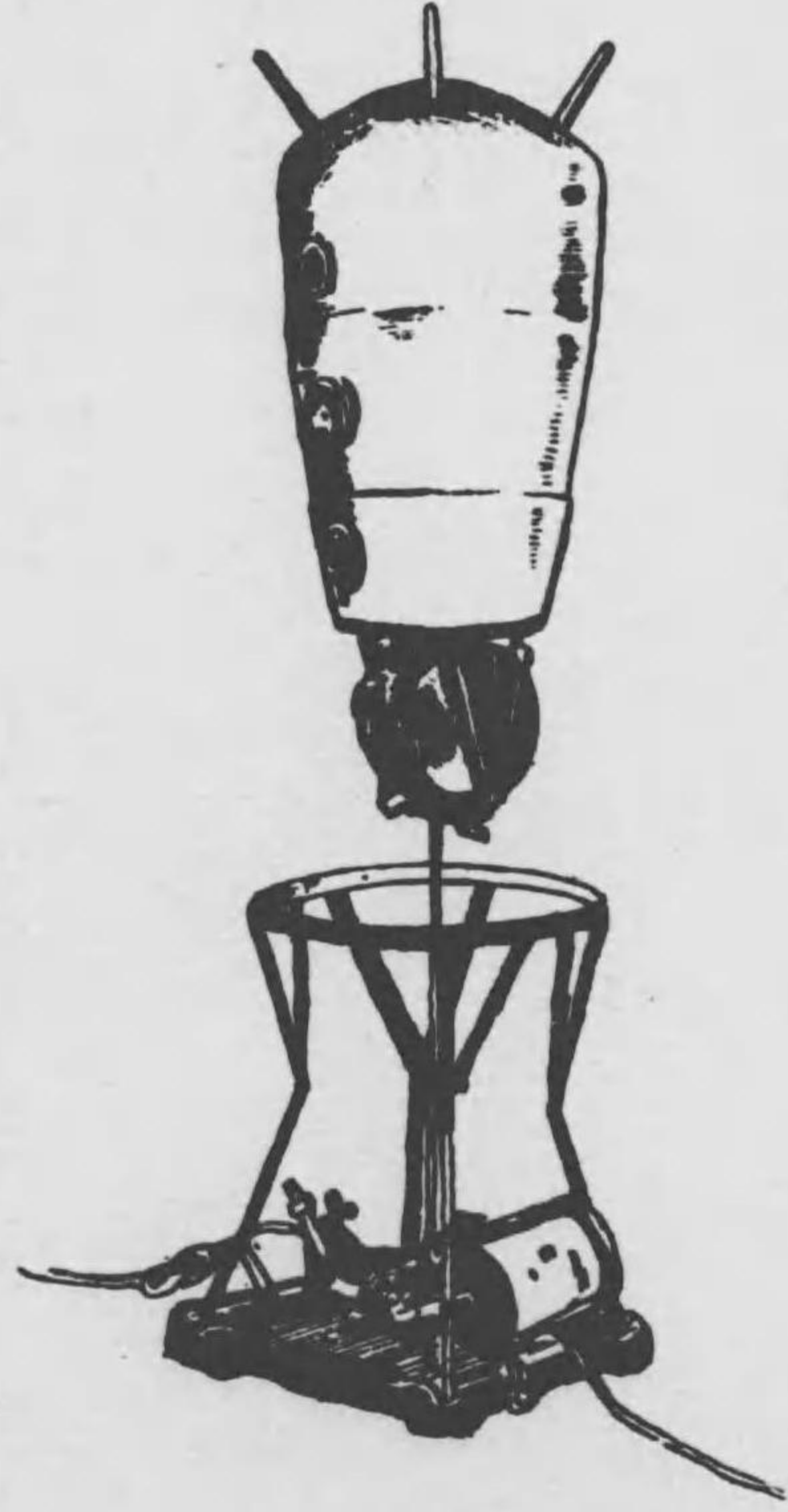


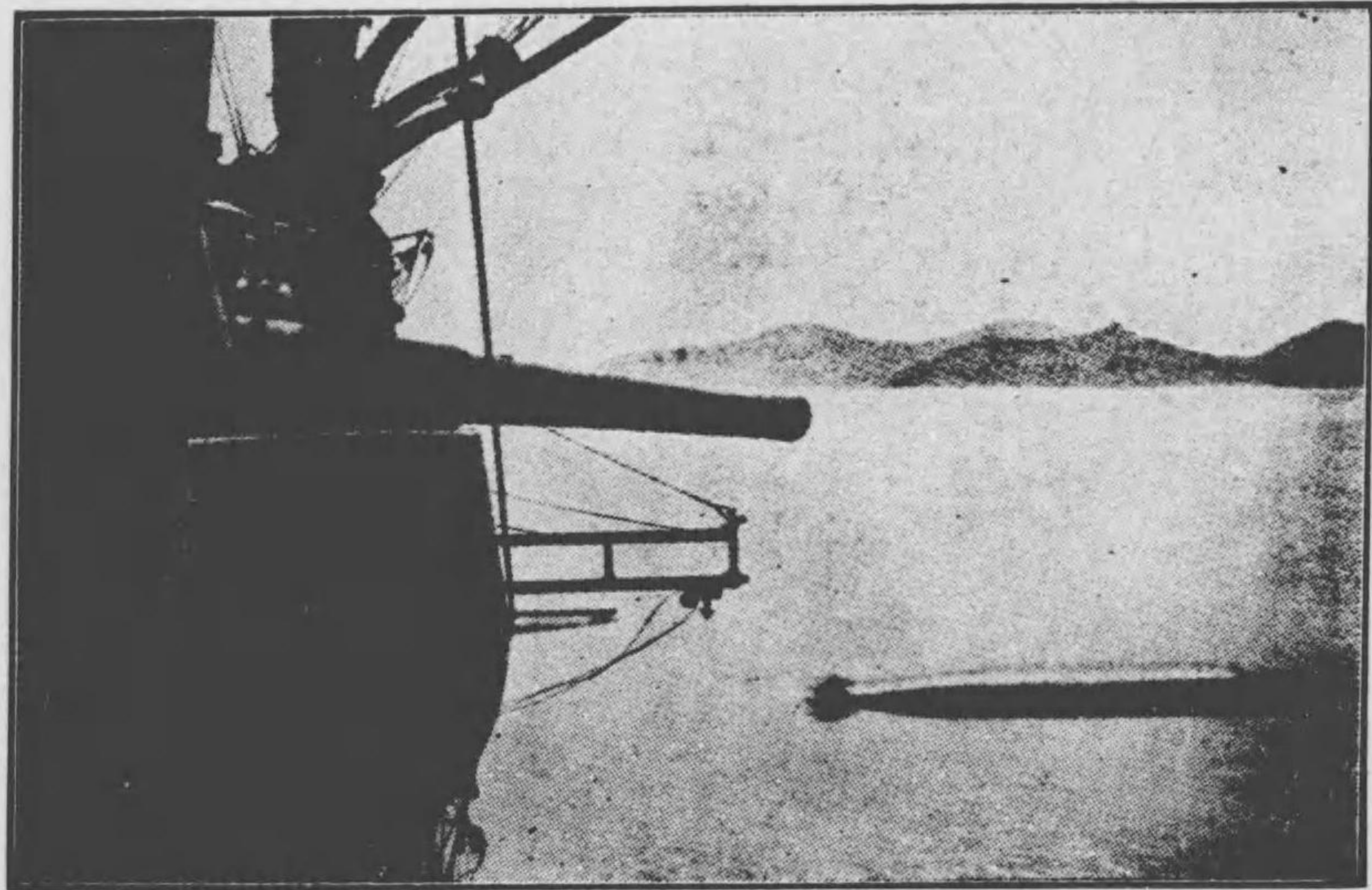
(第七一頁)

機械水雷

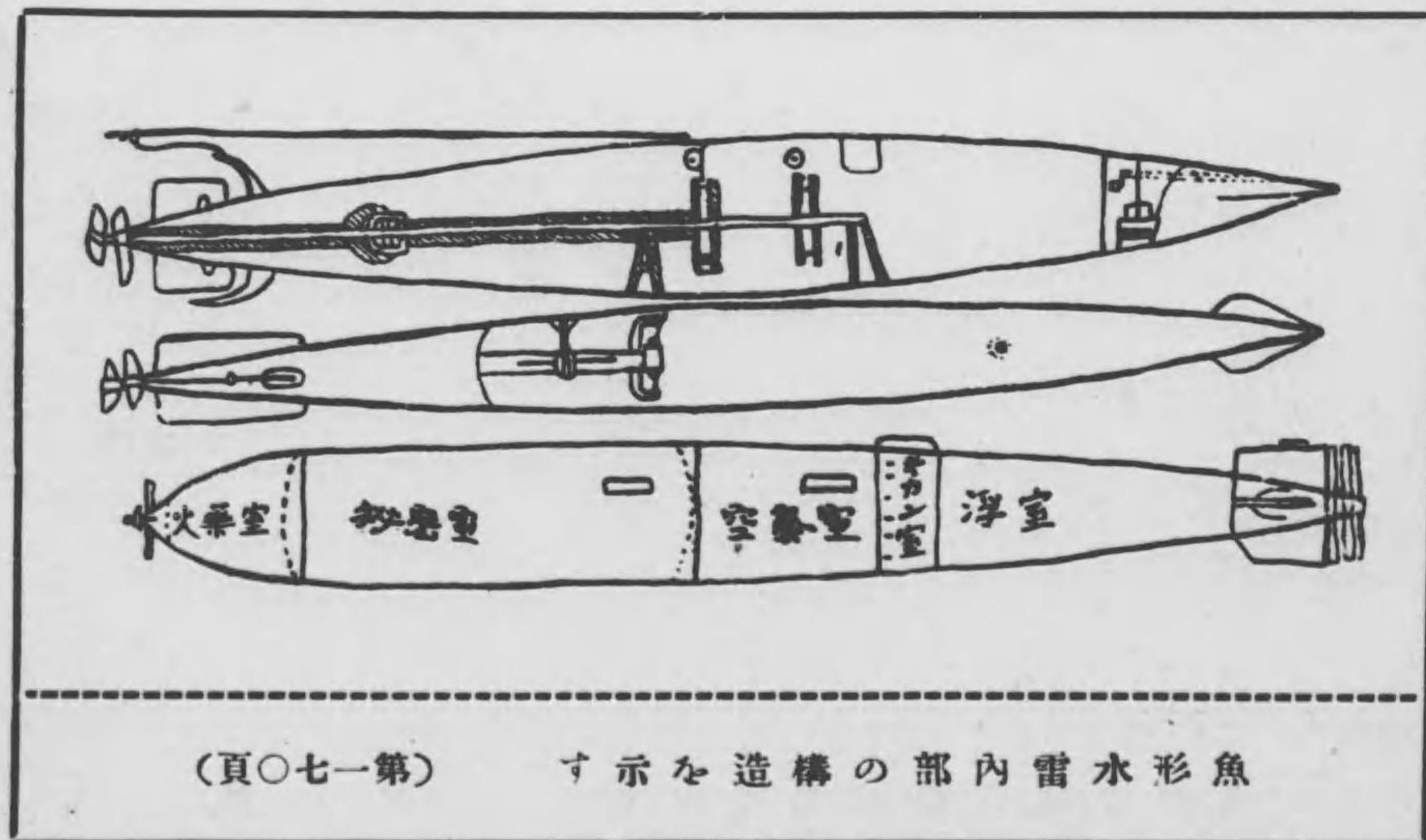
と
掃海作業

(第一七四頁及第一五頁)

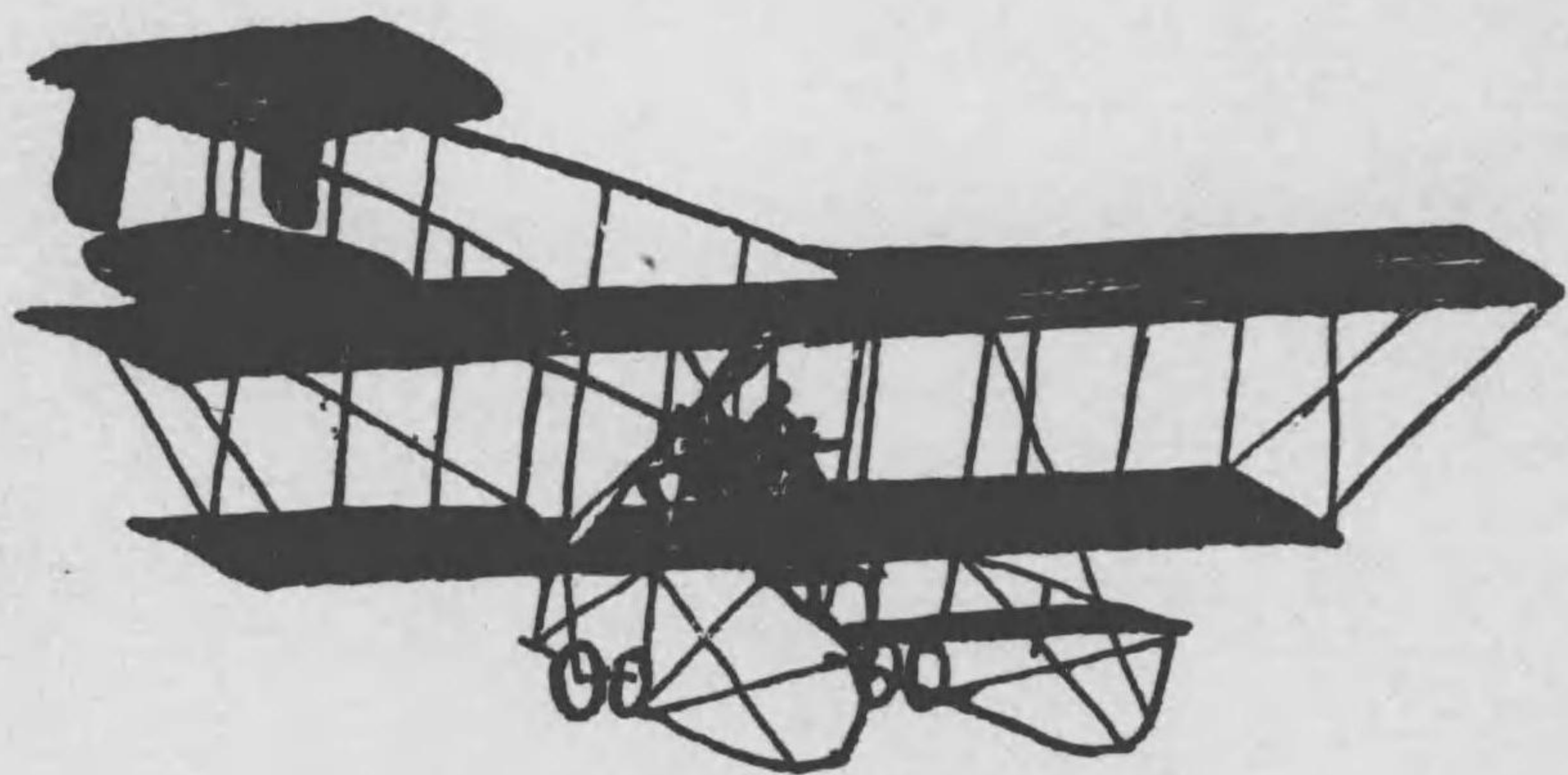




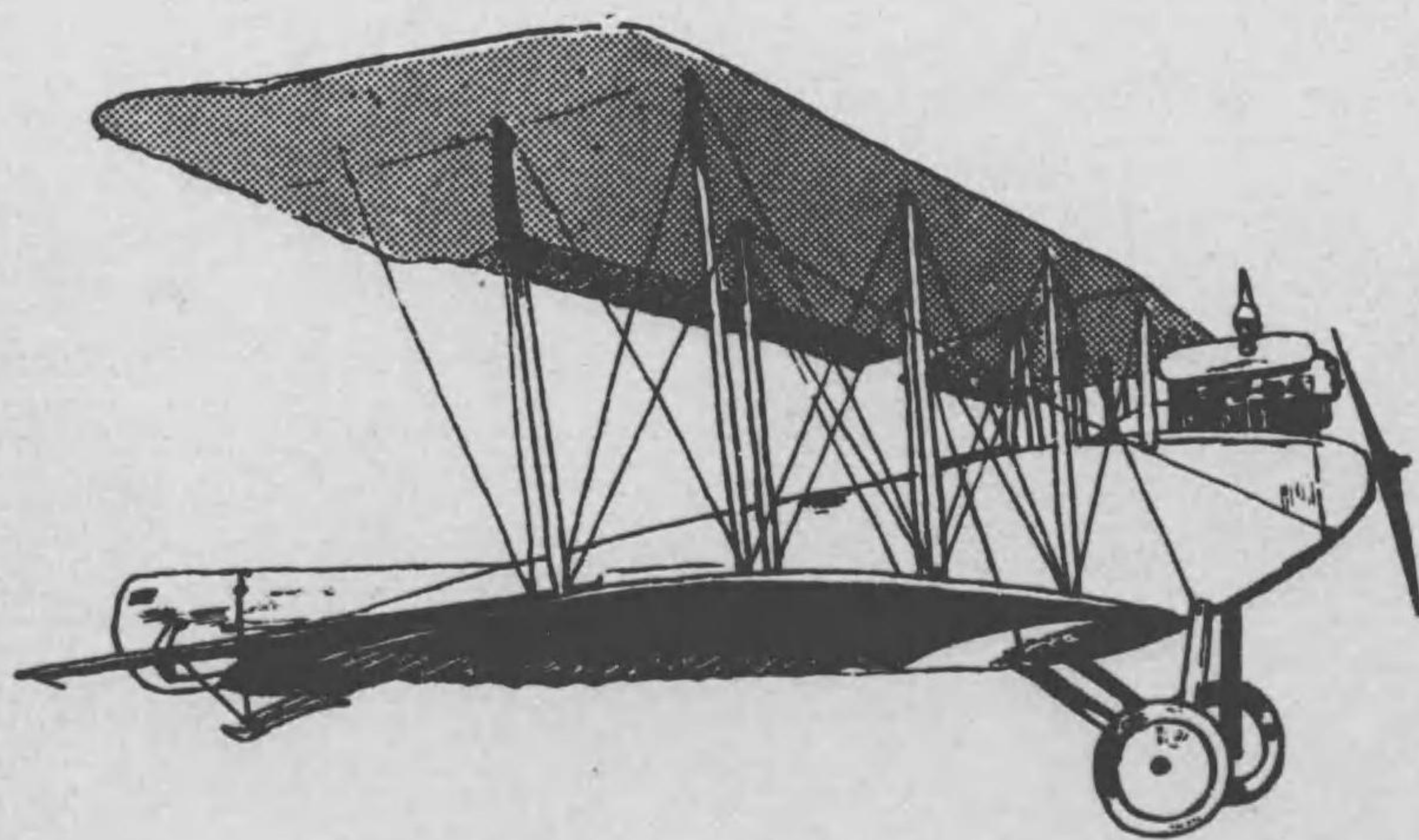
魚形水雷が發射管を離れて水中に入ると利那



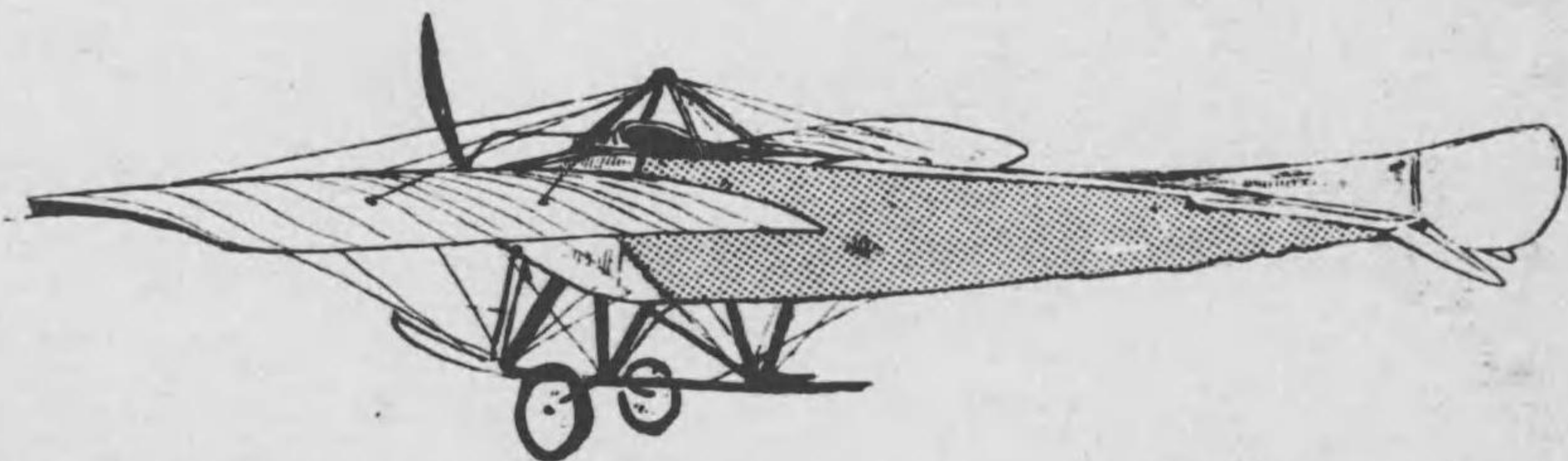
(第一七〇頁) 魚形水雷の構造を示す



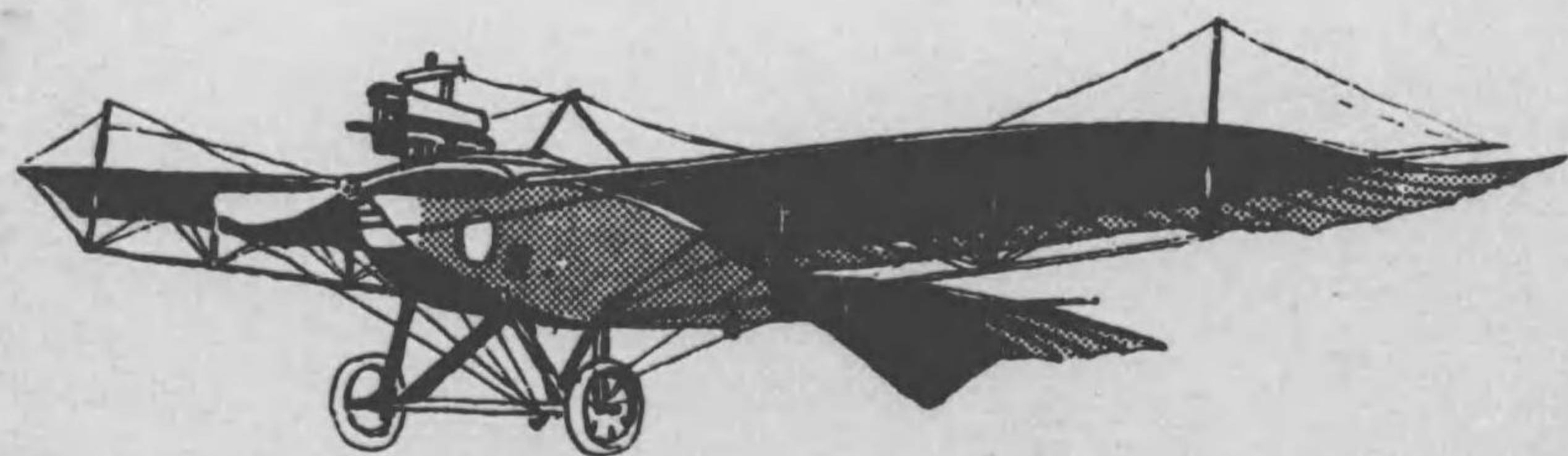
(西蘭佛)葉複式ンマルアフ・スリオモ
(頁二二二第及頁六〇二第)



(逸獨)葉複エゲアァフルエ
(頁二二二第及頁六〇二第)



(西蘭佛)葉單式ルオボウユニ
(頁二二二第及頁六〇二第)



(逸獨)葉單(號鳩)式アラフソル
(頁二二二第及頁六〇二第)

緒言

歐羅巴大陸では今や世界の強國が集まつて大戦争の眞最中であります。我國も亦日英同盟の約束に依りまして、獨逸と戦争をする事になつたのであります。今回の戦争は、大元帥陛下の大詔にもあります通り、我國が領土を擴張しやうとか、又は支那を奪はうとかいふやうな野心は少しもなく、全く東洋永遠の平和を確保したいといふ正義の爲めなのであります。獨逸は二十年の昔、日清戦争の當時、我が忠勇無双なる將士が、貴き血潮の犠牲を拂つて占領しました遼東半島を支那に還附しろと我國に迫つた憎む可き張本人であります。其の當時の日本は、残念ながら兵力も少なく、武器も幼稚でありました上に、戦術も進まず、國力が疲弊してゐましたから、口惜涙を吞んでこの干渉に従ひ、遂ひに遼東半島を還附したのであります。而かも其の時のカイゼルの態度は實に此の

上もない無禮なものでありました。『日本が遼東半島を持つてゐるのは東洋の平和を紊すものであるから、是非支那に還附しなければ不可ない、若し言ふ事を諾かぬならば、獨逸と戦争をしよう、獨逸は世界第一の強い國である、日本などは到底叶はないのに決定つてゐる、それだから戦争をしないで、言ふ事を諾いて大人しく遼東半島を還附したら宜からう』といふのでありました。これ程無禮な言草が又たと世の中にあるでせうか、それでも東洋平和の爲めといふので日本はこの無禮な言ひ草を神妙に承知しました。けれども國民は決してこの恨みを忘れるやうな事はありませんでした。其の後間もなく、獨逸は山東半島で自國の宣教師が支那人の爲めに殺されたのを口實に、支那の軍隊では到底獨逸人の生命財産を保護する事は出来ないといつて亂暴にも兵力を以て膠州灣を占領したのです。さうして遂ひにこれを租借地として仕舞つたのであります。曩きに日本が遼東半島を占領するのは東洋の平和を破るものだといつた獨逸は、其の舌の根の乾かぬうちに、斯んな亂暴をしたのであります。獨逸が我日本を踏み

付けた態度は實に憤慨に堪へないのであります。

膠州灣を武力で占領した獨逸は、此處を東洋に於ける策源地として、ゲルマン族特有の侵略的野心を充たさんと企てたのであります。鐵道を敷設し、鑛山を採掘し、砲臺を構へるなど、殆んど自分の屬國のやうに取扱つてゐました。ところが今度の戦争となつたのであります。膠州灣に居ります獨逸の東洋艦隊は近海に現はれて同盟國其他の船舶を荒し始めたのであります。その爲めに同盟國を始め獨逸と戦争して居ります佛蘭西、露西亞等も勢ひこれを見て黙つては居られなくなりました。各國とも軍艦を派遣して獨逸の軍艦と戦争しなければならぬ事となつたのです。けれども、英佛露各國の軍艦が、東洋で戦争を始めるやうになりますと、東洋も亦歐羅巴と同じやうな大動亂の巷とならなければなりません。我が日本はこれを心配して、獨逸に向つて膠州灣を支那に還附する爲めに、東洋平和の神様たる日本に引渡せと要求したのであります。ところが飽くまで無禮なカイゼルは日本の好意を受けやうとはしないで、定め

られた期日までに何等の返事をもしなかつたのであります。此處に於てか、我が國は武力を以つても獨逸兵を膠州灣から追ひ拂ひ、東洋永遠の平和を保たなければならぬと、遂ひに宣戰の大詔は發せられたのであります。

斯くして宣戰布告となつたので、我が國は茲に軍國の状態になつたのであります。さうして一部の師團は動員され、將士は續々として戰場に向ひ、獨逸を膺懲しつゝあるのであります。私はこの軍國に於ける國民が、戰爭に關する智識に乏しく、新聞雜誌に現はれた戰報が、十分に了解されないのを甚だ遺憾に思ふのであります。依つて戰爭に關する一般的の智識を涵養する爲めに、最も通俗的にこれを説明しやうと思ふのであります。

大正三年十一月

著者識

通俗講話 戰爭の知識目次

第壹講 陸軍

- 一 帝國の陸軍……………一
- 二 要塞……………五
- 三 要塞の防備と攻撃法……………一三
- 四 要塞砲兵……………二〇
- 五 要塞に用ふるベトン……………二三
- 六 野戰……………二五
- 七 野戰軍の戰備……………三二

目次

八 野戦軍の攻撃方略……………三七

九 各兵科の性能……………四二

イ 歩兵……………四二

ロ 騎兵……………四七

ハ 野戦砲兵……………五二

ニ 工兵……………五九

ホ 輜重兵……………六二

ヘ 非戦闘員……………六六

十 機關銃……………七二

十一 砲彈及小銃彈……………八三

十二 副防禦物……………八七

十三 陸軍の糧食……………九一

第貳講 海軍

十四 海軍の現在勢力……………九五

十五 軍艦發達の歴史……………一〇〇

十六 初めて出來た装甲軍艦……………一〇七

十七 海軍の戦闘勤務……………一一五

十八 戦艦の構造と任務……………一二三

十九 巡洋戦艦及び巡洋艦……………一四一

二十 海防艦と砲艦……………一五〇

二十一 水雷驅逐艦……………一五四

二十二 水雷艇……………一五
 二十三 潜水艇……………一六
 二十四 攻撃水雷と防禦水雷……………一六
 二十五 砲煩と防材……………一八
 二十六 危険極る掃海作業……………一八
 二十七 海軍陸戦隊……………一九
 二十八 無線電信……………一九

第參講 航空隊

二十九 航空機の發明……………二〇
 三十 飛行機の種類……………二六

三十一 飛行船と氣球……………二〇
 三十二 奮起したツエツペリン伯……………二五
 三十三 日本の氣球研究者……………二九
 三十四 單葉飛行機を複葉飛行機……………三三
 三十五 硬式飛行船と軟式飛行船……………三六
 三十六 世界各國の空中勢力……………三三
 三十七 日本にある飛行機……………三九
 三十八 飛行機と飛行船の長短……………四五
 三十九 戰爭前に期待された航空機……………五一
 四十 實戦に使はれた航空機……………五五
 四十一 飛行機と飛行船の優劣……………六六

四十二 我飛行機の威力……………二九二

四十三 獨立獨歩の我航空隊……………三二一

附 録

交戦列強の陸海軍……………一

通俗戦争の知識目次^終

通俗戦争の知識

桑野正夫 著

第一講 陸軍

一 帝國の陸軍

我國現在の陸軍力は平時に於て十九個師團を有して居ります。さうして朝鮮には内地の師團から選抜編制した一個師團と臨時朝鮮派遣隊歩兵二個聯隊、重砲一個大隊があります。又た臺灣には獨立した臺灣歩兵が二個聯隊と山砲兵二

一 帝國の陸軍

一

個中隊、重砲兵二個大隊があり、南滿洲には朝鮮と同様の臨時編成師團が一個と獨立守備隊六個大隊、重砲兵一個大隊があります。これを地方別に大きく別けますと、北海道に一個師團、四國に一個師團、九州に三個師團、本州に十四個師團といふ事になります。この兵數を兵種別に致しますと、歩兵が三十八個旅團七十六個聯隊と對馬警備隊が一個大隊、臺灣が二個聯隊と二個大隊、合計七十八個聯隊と三個大隊、騎兵が四個旅團と十七個聯隊合計二十七個聯隊、野砲兵が三個旅團と十七個聯隊合計二十五個聯隊、山砲兵が三個大隊と臺灣の二個中隊、重砲兵が二個旅團と二個聯隊及び十個大隊合計六個聯隊と十個大隊、臺灣に騎砲兵が一個大隊、又た工兵は十九個大隊と鐵道聯隊が一、電信隊、氣球隊が各一個、輜重兵は十九個大隊あり、其の他には憲兵隊が三十三、軍樂隊が四、懲治隊が一といふ事になるのであります。さうしてこの常備軍の兵員は大約二百四十萬人で、戦時になりますと其の二倍以上になるのであります。

さて陸軍の戦争は、これを攻城、野戦の二つに大別するのであります。攻城とは即ち城を攻めることで要塞戦をいふのであります。又た野戦とは要塞にあらざるところの戦をいふのであります。野戦と申しましても、必らずしも廣々とした平野で戦ふのではありません。時には川を挟んで對陣する事もあれば、山嶮に據つて闘ふ事もあります。今回の青島攻撃や日露戦争に於ける彼の旅順攻撃は言ふまでもなく要塞戦で、鴨綠江、遼陽、沙河、奉天等の戦闘は野戦でありました。要塞戦と野戦とは、其の防備に相違がありますから、これを攻撃するにも自から其の方法が違ひます。要塞攻撃は武器の優れた事も、兵力の多い事も必要ではありませんけれども、それよりもモット重大なものは戦術の良否にあるのであります。野戦とて戦術の良否は大切なものであります。要塞は防禦の方法が科學的でありますから、これを攻撃するにも相當の智慧を絞らなければなりません。それに引換へ野戦は、兵力の多い事と武器の優れてゐる事

が勝敗の別れる最も重要な問題であります。奉天の會戦でも味方の兵數は敵よりも多かつた爲めに、これを包圍するやうな形になつて、左右兩翼から敵の側面を衝きましたから、敵は遂ひに退却したのであります。又た最近歐羅巴の戰爭で見ましても、獨逸の最右翼軍たるクルック將軍の率ゐる第一軍は、最初は其の兵力が聯合軍より多かつたものですから、聯合軍をドシ／＼追撃して、巴里附近まで追ひ詰め、既に包圍をするばかりになつたのでありましたが、折柄露西亞軍が、後から東普魯西の方を衝いて來ましたので、獨軍はこの方を守らなければならぬ事となつて、一番兵力が多く、而かも敵を壓迫してゐるクルック將軍の部下を割いて此方に備へる事としたのであります。これが爲めにクルック將軍の兵力が減りました上に、聯合軍はこの方面が一番手薄だといふので有名な片腕のポー將軍が助太刀に來ましたので、兵力の多寡が反對になつて、今度はクルック軍が退却に次ぐに退却を以てするといふやうな運命となり、聯

合軍は勝に乗つて獨軍を追撃する事となりました。さうして今では一番優勢であつたクルック將軍が、聯合軍に降服しなければならぬやうになつたのであります。この一例に依りましても、野戦は兵力の多い事が必要な條件だといふ事が知れるのであります。けれども攻城野戦いづれに致しましても、軍隊の士氣が沮喪しては駄目なのです、何んでも戰爭は兵士の勇氣が旺盛なのが一番大切な事でありませう。

以上は要するに攻城、野戦の大要でありますから、これを詳細に申し述べますには、それ／＼順序を逐ふ必要がありますから、攻城法を説明するに先立つて、要塞の築城法から述べる事としませう。

二 要塞

現今の要塞と言ひますのは、往古の城塞が科學の發達に伴つて進化して來たのであります。希臘、羅馬等が全盛であつた頃から石造建築が行はれてゐる歐羅巴と、木造建築で始終して來た日本とは、城塞築造の上に於てもそれ〴〵異つた歴史を持つて居りますが、日本は元龜天正の信長、秀吉、家康等が盛んに活動してゐました所謂戰國時代に、葡萄牙から新らしい智識が輸入されました爲めに、城塞築造の方法も餘程歐羅巴を模倣たところがあります。歐羅巴はそれから引續いて火砲の發達に隨つて種ヶ島や張拔の大砲を防ぐ城塞では役に立たなくなつて來ましたから、其の築造法も著しく進歩したのであります。けれども、日本は外國とは交りを結ばず、鎖國主義でありましたから、歐羅巴の築城法が何んなであるかといふ事は少しも知らなかつたのであります。さうして依然國內の同士討に備へる爲めの城を構へてゐたのであります。それが明治維新と共に、陸海軍の編成もすべて歐羅巴のそれを取つて學ぶやうになりました

から、軍事が科學的に研究され實施されると共に、茲に始めて東西の築城法が同一な形式になつたのであります。

これは要塞の歴史であります、よく昔から「難攻不落」といふ事を申して居りますが、難攻はありましたが、不落といふ事は決してないのであります。豊臣秀吉が築城しました彼の大阪城でも、兩度の戦ひに遂ひに落城しました。又近世の歐羅巴の要塞戦でも彼のセバストポールやナポレオン戦争のセダン乃至日露戦争の旅順を始め現在歐羅巴大陸に於て行はれつゝあります白耳義のリエージュ、佛蘭西のナミエール、モーブージュ、リール其他や塙地利のレンベルグ、ヤロスロウ、獨逸のリツク、ホイエン等の要塞はいづれも悉く陥落して居ります。これに依つて見ても、要塞は遅いか早いか、一度は攻撃軍の爲めに攻め落されると定つてゐると申しても差支ないのであります。ところで、この必らず攻め落されると定つてゐる要塞を何故世界各國が競つて築造するのかと申しま

すと、それは攻撃の場合には味方の策源地として敵に對する作戰を行ふ事が出來ます上に、防禦の場合には寡ない兵を以て、敵の大軍を支へる事が出來るのであります。それ故一ツの要塞で、敵の前進して來ますのを支へて居る間に、味方の軍が安心して他の方面で活動する事が出來るといふ一舉兩得があるのであります。現に近い例がリエイジの要塞であります。これは僅か二十日餘りで陥落したのですから、要塞としては餘りに脆いやうではありますけれども、獨軍をして二十餘日の日子を此要塞に費さしめたといふ事は實に非常な効果を奏してゐるのであります。詰り、獨逸は白耳義などは一蹴して通過し、遮二無二佛蘭西に侵入して巴里を攻め落し、勝ちに乗つて東に引還して露西亞の侵入を防ぐといふ作戰であつたものが、リエイジあつた爲めに、佛蘭西は英國の援助を受ける事も出來ますれば、露西亞も獨逸が東普魯西の國境に大兵を備へないうちに自國の兵を集中する事が出來たのであります。これ等は全く要塞の大なる

價值ある事を證據立てたものであります。

さて、一口に要塞と申しますが、要塞にも海岸要塞、陸地要塞、海陸兩用要塞の三種類あります。我國の東京灣、藝豫、函館、舞鶴、下の關、長崎等の各要塞は、いづれも純然たる海岸要塞であります。又た旅順や浦鹽や今回の青島乃至獨逸のケーニヒスブルグ等は海陸兩用のものであります。それから歐羅巴大陸にあります、リエイジ、アントワープ、ナミユール、セダン、ヴェルダン、メツツ、クラカウ、トルン、ダンチシヒ等は陸地要塞なのであります。これ等三種の要塞はそれ／＼目的が違つて居りますから、随つて備へてある大砲の如きも多少の相違があります。即ち海岸要塞でありますれば、軍艦を對手にするのでありますから、これを撃破し得るだけの大口徑火砲を主なるものとし、甲板上に居りますところの將士の掃蕩する爲めの速射砲は從となるのであります。而して陸地要塞に在りましては、人馬を損傷させる事が目的の第一であります

から、小口径の機關砲を備へ、同時に敵の野砲、攻城砲を沈黙させるに足る可き重砲を備へなければならぬのであります。これ等はホンの一例であります。が、其他にも少なからぬ相違があるのであります。

要塞と申します以上は、いづれの種類に屬しますものでも、天嶮を利用して築城されるのが普通であります。大要塞になりますと、澤山な分派堡、次等堡壘を前後左右に有してゐるのであります。詰り、中央に本城があつて、出丸や砦が其の周圍にあるのであります。青島の如きも、モルトケ、ピスマーク、イルチス等の大砲臺が主となつてゐて、其の左右には幾多の小堡壘が半永久的に築かれてあるのであります。ところで要塞築城の第一義としては山とか水とかいふ所謂天與の嶮を利用する事は前にも述べた通りであります。而して要塞は鐵材とベトンとを用ひて堅牢に築かれるのでありますから、壘壁の如きは普通大抵な砲撃ではピクともしないやうになつてゐます。然かも主要部は五尺以上

の厚さを有してゐるのであります。堡壘の内外部は其の地勢に據つて一定してはゐませんけれども、大抵其の内部に砲塔、隠現砲、露天砲を配置し、掘り下げた地下室に火藥庫を設け、各部を指揮するのに最も適當な場所に司令部を首めとして各本部を置くのであります。司令部には掩蓋といつて厚き堅牢な屋根の蓋がしてあるものです。さうして此處からは他の堡壘又は野戰司令部との間に無線電信を装置しておくものもあれば、飛行機等を準備しておく事もあるものであります。

堡壘の外部は厚いベトンの壁を繞らすのであります。これは外廓壘壁と申します。それから外廓の壘壁下には必らず深き幅共に六米突以上の壕を掘るのであります。さうしてベトンを以て堅固に築くのであります。これは敵が突貫して來たやうな場合に、直ぐに壘壁に迫る事が出來ないのと、モウ一つは敵が壘壁に攀ち登るとしても、地上からでなく掘り下げた下から登るのでありますか

ら、高さが普通の倍もあつて、非常に困難を感ずるのであります。早く言へば、この外濠は日本のお城の周圍にある濠と同様であります、けれども外濠は水がないから、敵が此處に飛込んで来て、壘壁にビタリと身體を寄せ、味方の彈丸を避け、機會を窺つて堡壘内に突入する事がないとも限りませんから、これを防ぐ方法として所々に凸角といつて出張つた角を設け、外濠内に飛込んだものや、壘壁にヘタバリ附いてゐる敵を横から射撃するやうな構造がしてゐるのであります。

要塞内に備へてあります火砲は、加農砲、臼砲が重なるものであります——この砲の説明は後に悉しく致します——それから機關銃、速射砲などがある事は前に述べた通りであります。さうして堡壘内部の露天砲と申しますのは、砲身も砲座も悉く砲臺に露はれてゐるもので、何處からでも見へるやうになつてゐるのであります。又た隠見砲臺といひますのは、大砲を發射する時だけ砲身

砲座が砲臺に現はれますが、一發打つて仕舞ふと、其の反動で直ぐに地下に隠蔽するやうな仕掛けになつてゐるのであります。それから又た、砲塔といひますのは、一寸海軍の軍艦上にあるやうなもので、砲身の後半部を堅牢な鋼鐵板で包み、掩蓋まで附いてゐるのであります。而かもこの砲は機械の作用で砲口を自由自在に何の方面にも向ける事が出来るやうになつてゐるのであります。現在の要塞では主として隠見砲臺と砲塔の二つを用ゐ、露天砲臺は餘り用ゐないやうになつて來ました。

三 要塞の防備と攻撃法

要塞は斯く嚴重に防禦工事を施してあるから、敵が攻め寄せた場合には、堡壘内で防禦して居ればいゝかと言へば、決してさうではないのであります。

この堡壘に據つて攻撃軍に對抗するのは最後の時で、其の以前に十分の手段に手段を盡して戦はなければならぬのであります。其の防禦の方法は何うであるかと言へば、先づ四段に別れてゐるのであります。即ち

第一 外防禦線——前進陣地

第三 第二防禦線——二の丸

第二 防禦首線——三の丸

第四 核堡(堡壘)——本丸

であります。外防禦線即ち前進陣地といふのは、攻撃軍が要塞に近づかぬうちに、之を撃退しやうといふ爲めの設備であります。日露戦争の旅順で言へば南山の如きが即ちそれでありませう。次ぎの防禦首線は防禦の本陣地の事で、外防禦線から破れて退却し來る味方を收容し、攻圍軍を喰ひ止めやうとするのですから堅固な堡壘や砲臺を設け、遠方の戦ひ乃至近傍の戦ひに適する爲に數多の大小口徑火砲をも備へ、且つ奇襲強襲に對する防備も出來てゐるのです。今回の青島攻撃で申せば、孤山から巫山に到る線の如きがそれでありませう。防禦首

線と核堡即ち本丸との距離は六千米突以上であります。それは防禦首線にある敵の守城砲は攻撃軍を二千米以内に近づけぬやうにしてあるのであります。而して現在世界各國で採用してゐる攻城砲は八千米突位が有効射距離となつてゐますから、防禦首線で防いでゐるうちは先づ本丸には砲彈が届かないといつてもいゝのです。これが昨今の戦術上から來た要塞築造の原則となつてゐるのであります。乍併それは所謂築造の原則で、地理の如何に依つては必らずしもこの通りにする事は出來ません。現に青島の如きも孤山巫山の線から青島までは僅かに二千米突内外に過ぎないのであります。第二防禦線は、防禦首線の陥落を防ぐ爲めに、これを應援するのと、今一つは防禦首線陥落後に於て更に第二の抵抗線を形作り、運よくば首線を恢復するのに便利なやうに造られてゐるのです。其の位置は首線の後方二千乃至三千米突のところの設けるものであります。けれども、この第二防禦線は大抵戦争が始まつてから設備するのが多く、從

つて火砲の如きも防禦首線から退却の際に搬送したものと、或は豫備のものを用ゐるのであります。青島では先づ海泊河左岸の敵の防禦線が、この第二防禦線に相當するのでありますが、兵力も尠なく武器も少ないのですから、到底十分な設備はない事と信じます。核堡は、奇襲強襲に對つて市街若くは軍港を掩護すると共に、強大なる第三の抵抗をします。此處が落ちれば即ち要塞が全部攻撃軍の手に入つた譯です。夫ですから核堡は前に述べたやうな構造で極めて堅固に造るのです。露國が旅順に數千萬圓を投じたといふのも全くこれが爲めなのであります。けれども、以上の各陣地に於ける防禦は要塞戰には相違ありませんけれども、所謂要塞に肉迫した血河屍山の凄壯な戰は堡壘に迫つた時であります。然らばそれを如何にして攻略するかと申しますと、これには三つの戦法があります。奇襲、強襲、正攻即ちそれでありませぬ。

奇襲とは要塞の防備が十分に出来てゐない場合とか、又は内通者があつたやうな場合に疾風迅雷の勢ひを以て急激な突撃を行つて、これを奪ひ取るのであります。けれどもこれは成功する事は極めて少なく、失敗する方が多いのであります。第二番目の強襲と申しますのは、攻城砲、野砲等がなし得られるだけの威力を盡して、壘壁の一部を破壊し、其處から勇氣に充ちた歩兵が、敵の彈丸が雨霰と降つて來る中を冒して突撃し、俗に言ふ腕づくで何んでもこれを奪ひ取るといふのであります。第三の正攻と申しますのは、日露戰爭の時に、我が乃木軍が旅順を陥れた時の戦法であります。兵力、糧食、彈藥等が十分にありません。大要塞を攻めますのは、是非ともこの戦法に依らなければならぬのであります。其處で、この正攻法に依りますと、先づ前に述べました外防禦地、防禦首線、第二防禦線等で戦が行はれ、攻撃軍が勝を制しますれば、次第に前進し、包圍の範圍は縮められるのであります。さうなると堡壘に近づく爲めに工兵隊の手に依つて坑道が開鑿されるのであります。坑道とは即ち字の如

く坑の道で地面を歩きましたは、敵の目標になりまして、甚だ危険でありますから、敵の目に這入らないやうに坑を掘つて其の中を進んで行くのであります。さうして其の坑は電光形に掘て行くのであります。斯くてこの坑道作業が進みまして、適當な場所に行きますと、今度は横に壕を掘るのであります。これは塹壕といつて歩兵が據る可き攻撃陣地なのであります。斯くする事が二度三度と度重つて段々に前進し、坑道が敵の堡壘の前方二百米突——約十町——位に達しますと、いよいよ最後の突撃陣地を構成して機會の來るのを待つてゐるのであります。この間、敵は屢々堡壘から出て來て逆襲をしたりなどしますから坑道作業もなか／＼容易には捗らず、味方の歩兵はこの場合例の攻撃陣地に據つて敵を撃退するのであります。さうして攻撃軍司令部は電信電話を以て各方面と連絡を取り、包圍區域の廣い時には攻圍陣地に輕便鐵道を敷設する場合もあるのであります。

さて、恁ういふ苦心をして突撃陣地が出來上りますと、工兵は更らに地下作業を繼續して、今度は堡壘に向つて最後の坑道を掘るのであります。これは首尾よく堡壘の下へ出られる事もありますけれども、時には外壕とか壘壁とかのベトンに衝き當る事もあります、孰れにしても坑の一番終極のところには強烈な火薬を装置して電氣の導火線で爆發させるのであります。突撃陣地で手ぐすね引いて待ち構へてゐる歩兵は、この一大爆聲を聞くのを合圖に、勇ましい突撃を行つて其の堡壘を占領するのであります。さうしてこの突撃中は味方の砲兵が後方から、盛んなる援護射撃をして、敵の火砲を沈黙させるのであります。斯くの如くにして一ツの堡壘を占領しますれば、味方は此處を足溜りとして左右にある敵の堡壘に攻撃を加へ、それで陥落すればよし、若し何うしても陥落しない時には、再び正攻法を繰返してこれを攻め落すのであります。恁うなりますと、要塞内に籠城して居ります防禦軍は、攻撃軍が掘つて來る坑道の其

の又た下を掘つて来て、これを爆發させ、攻撃軍の掘つた坑を滅茶々々にして仕舞ひ、さうして進路を塞ぐといふ手段を採るのであります。けれどもこれはホンの一時的で、籠城の防禦軍が如何に勇敢頑強に抵抗しても、味方の野戦軍が背後から攻撃軍を衝くといふやうな手段がなければ、必らず一度は落城の憂き目に遇ふに決定つたものであります。

四 要塞砲兵

要塞砲兵は即ち只今でいふ重砲兵の事でありませぬ——重砲兵のうちにも野戦専門のがあります、これは野戦重砲兵と申す、委しくは野戦の條で申します——要塞砲兵を重砲兵と稱へるやうになりましたのは日露戦争後の事で、詰り重砲を扱ふ兵隊といふ爲めにこう改められたのです。重砲兵には海岸砲兵とい

つて要塞を守備するのを主なる役目としてゐるものと、出て敵の要塞攻撃に従事する所謂攻城砲兵との區別があります。我國の要塞は前にも述べた通り、すべて海岸に面してゐますから、要塞守兵を斯く海岸砲兵と申すのであります。攻城砲兵は野砲兵と同様出て戦闘に従事します。旅順を攻略する時には攻城砲の威力は實に大なるものであります。尤も同じ重砲でも臼砲（一名榴彈砲）と加農砲の區別がありました、臼砲は砲身が短く一寸鐘に似てゐますが、加農砲は砲身が長く、軍艦などでは主としてこれを用ゐてゐます。——海軍砲の條に於て詳細説明します——そこでこの臼砲は要塞内部に据へ付ける事が多く、攻城の場合には持運びが不便であるから使用する事は極め少ないのであります。乍併、日露戦争の時には二十八珊の臼砲を旅順背面に据へ付けた例があります。こういふ時には大砲を据へ付ける場所をベトンで固めて置かなければならぬのであります。それですから、大抵は攻城砲兵は加農砲を持つて居ります。加

農砲であつても、口径の大きいものでありますと、臼砲同様砲架を据付けるところはベトンで固めなければならぬのであります。加農砲にも大小いろいろあつて、大いになりますと、十二吋といつて戦闘艦の主砲と同じ大きさのものもあります。こんな弾丸が一ツ命中しますれば小さな家屋の二ツや三ツを根こぎにして倒壊するのは何んの雑作もない事であります。而して射撃の要領は一定の目標を定めて、敵を射撃する事もありますけれども、間接射撃といつて、譬へば山を越した向ふにゐる敵に向つて砲火を浴せかける事が出来るのであります。これがこの大砲の特徴なのであります。それで目的は敵の堡壘を破壊するとか、敵砲を沈黙させるといふ、言はゞ荒療治を行ふのであります。

五 要塞に用ゆるベトン

要塞の構造、攻撃法、防禦法はこれで大要を盡しましたから、今度は野戦の説明に移りますが、先づ其の前に要塞に最も必要なベトンに就て一言申しませう、ベトンの事は俗にベトンと言ひますがこれはベトンといふのが正しいのです。語は佛蘭西と獨逸とで、英吉利ではベトンといふよりも多くコンクリートと申します。そこで此ベトンは何から造られたものかと言へば、石灰又はセメントと砂とを混ぜて煉合はせたモルタルといふものと、割石、煉化、礫若しくは介殻等の堅い質の材料とを能く搗固めたものであります。石灰を使つたモルタルとセメントを用ゐたモルタルによつて、其の強さに大變な違ひがあります。詰り石灰の方は弱くセメントの方が強いのです。それゆゑ、石灰の方は濕潤つた場所や堅固を必要とする時には使用しないのです。従つて、要塞などに使用するベトンは極く精選したセメントから造られたモルタルでなければなりません。そこでこのセメント、モルタルで造るベトンの成分は、其の割

合を何の位にするかといふと、水分は氣候溫度等の關係、場所の狀況如何によつて多少加減をしなければ成ませんから、これを數字に示す事は一寸困難ですが、乾質材料即ちセメントや、砂や割石やに就て申せば第一が水硬セメント一砂二、割石三乃至四で、第二がポートルランドセメント一、砂二乃至三、割石四乃至七で、第三がポートルランドセメント一、砂二・五、礫三、割石五といふのが普通です。第一は水中などの最も強さの必要な處の工事に用うるもので、要塞などには先づ第一か第二であります。第三は鐵道工事などに用ゐられてゐると大差ありません。斯うして造られたベトンの重量は一立方呎に付十五貫乃至二十貫位あるのです。

ベトンの成分中第一に必要なセメントの事は、既に諸君が知つて居られるから其の良否は多く説明するには及ばぬが、砂は清淨で且つ稜角を有するもの、砂利は豌豆大から蠶豆大位までのもの、割石は一時乃至二時半位までが最も適

當なのであります。さうして、砂利や礫をベトンの原料に用ふる場合には泥土などの附着してゐないやうに綺麗に洗ふのは勿論、塵芥や植物質のものがついてゐると効力に大なる影響がありますからこれ等も除き去らねばならぬのであります。斯くして造られたベトンを、要塞などに使用するにはベトンの中に鐵の棒を入れて固めるのが最も丈夫なのです。鐵筋コンクリートといふのが、即ちそれで旅順要塞にも、この鐵の棒入りのベトンは澤山あつたのでした。

六 野 戰

野戰とは前に述べた、要塞戰にあらざる陸上のすべての戰鬪をいふのであります。野戰に於ける軍の主力は申す迄もなく歩兵でありまして、砲兵は歩兵を援護し、騎兵は斥候偵察の任務を盡し、工兵は歩兵を助けて、道路修築、架橋

又は防禦工事等の作業に従ひ、輜重兵は後方に在つて彈藥糧食の運輸を努めるのであります。従つて各兵科の特有する性能に就て一々説明しますれば、自然野戦の様様を知る事が出来るのでありますけれども、先づそれより先きに、野戦軍の編制を簡単に説明し、然る後に各兵科の性能を説明致しませう。

野戦軍と申しますのは、要塞ならざる戦場にありまするすべての軍の總稱であります。一個乃至二個三個の師團に騎兵旅團、砲兵旅團、電信隊、兵站部、後備隊等を合せたものが軍團で、其の軍團が一ツでも澤山でも野戦軍といふ名稱には代りがありません。日露戦争の時には第一軍から第四軍までありました日清戦争には第一軍と第二軍だけでありました。けれどもいづれも野戦軍であります。

この野戦軍が戦時に於ける動作の大部分は行軍であります。行軍が巧みに行はれると否とは直ちに戦闘に重大な關係を持つのであります。詰り甲の部隊が

満足に到着しても、乙の部隊が來なかつた爲めに戦闘を開始する事が出來ない、其のうちに敵から攻撃された爲めに已むを得ず退却するといふやうな事が起らないとも限りません。平素から規則を嚴守し就中時間是一分でも違へないやうに教育するのは全くこれが爲めであります。さうして行軍の目的は敵に近附いて戦ふのにあるのですから、戦線が擴がれば擴がる程澤山な道路に岐れて進まなければなりません、けれども敵を攻撃する場合には一ツの線に並ぶのであります、これを分進合撃と申すのであります。行軍にもいろ／＼あつて、敵と衝突する虞のない時は成る可く疲れないやうに一日五六里宛進軍して、四日目に一日位宛休養するのであります。これは旅次行軍といひます。又戦備行軍といつて、何時敵と衝突するかも知れない場合には、十分武裝を整へ、出發時間の如きも旅次行軍のやうに朝出發して夕暮れに宿營地に着くといふやうな規則的でなく、敵の狀況に依つて不時に出發するのであります。其の時には一日七八里の急行

軍をする事もあれば、晝夜の別なく前進する強行軍を行ふ事もあります。そこでこの種の行軍に於て最も困難を感じますのは、夏期の日射病、冬期の凍死凍傷であります。其の豫防法は第一が空腹にさせぬ事、第二は飲料を與へる事、第三は濕潤つた衣類を着せぬ事等で、これが完全に行はるればよろしいのですが、それがなか／＼思ふやうに行かぬ事があるのです。戦時には凭うした人知れぬ困難が數々あるのであります。

さてこの行軍の方法は何うであるかと言ひますれば、内地の演習などであれば、側面から敵が襲來するといふのではなし、旅次行軍にしる戦備の強行軍にしる、只疲勞するといふだけでありますが、實戦となれば何時敵が現はれるかも知れないのでありますから、行軍にも十分の警戒を加へなければなりません。其處で一ツの師團なり軍團なりが前進します時には凡そ隊を八組位に別けるのであります。即ち一番先きに進んで行くのが騎兵であります。軍團の場合であ

りますれば、騎兵の旅團がこれに當るのであります。これを獨立騎兵と申しまして、敵状偵察の任に従ふのであります。獨立騎兵から今度は前衛騎兵といふのがあります。これは獨立騎兵だけでは偵察等に就てまだ不安心な點があるからであります。その次が騎兵の尖兵、歩兵の尖兵があつて今度は前兵支部といふものになります。尖兵と前兵支部との間は四百米突位の間隔を置いてあるのであります。其の又次に前兵があつてそれから前衛本隊、本隊といふ順序になるのであります。前兵支部と前兵の間が三百米突乃至四百米突、前兵と前衛本隊との間も殆んどこれに同じですが、前衛と本隊との間は八百米突位離れてゐるのであります。それですから、軍の最先頭たる獨立騎兵から本隊までの間は實に二千米突乃至三千米突位ある譯なのです。尤もこれは本隊の先頭までの距離で、本隊にはいろ／＼の部隊がありますから、軍の最先頭からは本隊の後尾まではそれ／＼非常に長いものとなるのであります。それから又た斯ういふ

組織以外に側衛と申するのが置かれるのであります。それは側面から敵が襲来しても差支ない様にするのと、モウ一ツはこの側衛隊が恰かも主力であるが如くに見せかけて敵を欺く手段にも用ゐられるのであります。さうしてこの側衛隊は、普通歩兵尖兵の位置から、前衛本隊の位置までを、本隊の其の兵數と同じやうに配備されるのであります。

更らにこれを委しく申せば、一軍團が三個師團と假定しますと、獨立騎兵はその軍に附屬した騎兵の旅團——二個聯隊——を以つてこれに充て、一個師團を前衛本隊と致します。前衛となつた師團は其の師團の騎兵を前衛騎兵及び騎兵尖兵に充て、歩兵の一旅團を前兵、前兵支部、側衛の任務に就かせ、他の一個旅團と師團司令部とが前衛本隊となり、各隊には必要な砲兵、工兵等を配置するのであります。さうして残つた他の二個師團が本隊として進むのであります。又た時には、本隊から更らに豫備隊を残す事もあるのであります。それか

ら、戦ひ利あらずして退却する場合には、後衛といふものが組織されるのであります。後衛は殿軍の事で、其の任に當つた隊は、味方を追つて来る敵軍を、一手で喰ひ止め、味方の本隊をして安全に第二の陣地に就かせるやうにするのであります。この後衛といふものはなかく大役であります。

七 野戦軍の戦備

すべて軍が運動を起しますには、凭ういふ風に二重三重に警戒をして行くのであります。それには偵察捜査が完全に行はなければなりません。偵察の報告が誤つてゐた爲めに、備へのない方面から敵の襲来を受けるやうになれば、軍はこれが爲めに大敗を招くのであります。が、それが反對に、味方の搜索隊が敵の備へのなき方面の状況を詳細に偵察し得て、其處から不意に攻撃すれば、

勝を制する事も出来るのであります。而してこの偵察搜索の任務は騎兵の受持であります。騎兵がこの偵察に向つた時には、敵に出會つたならば、其の様子から判断して、この方面の勢力は何れ位あるなといふ事を察しなければなりません。この視察の能力のないものは偵察搜索の任務は出来ないといふ事になるのであります。そうして敵に出會つた時は已むを得ない場合を除くの外は戦闘を避けて引返して来るのが肝要なのです。一時の功名に驅られて敵の一人や二人を殺したとて、自分が戦死すれば敵の状況を報告する事が出来ない譯ですから、騎兵は最ツ先に入り込む事故、勇氣がなければ駄目ですけれども、同時に智慧もなければならぬのであります。

偵察にもいろいろありまして、普通の搜索は騎兵の上等兵位が二三人の兵卒を連れて行く事もあれば、下士官が上等兵以下を連れて出る事があります。それから又た將校が下士以下を従へて行く事もあります。指揮官の階級の高いだ

げ、搜索隊の兵數は多くなるのであります。それで時に依て騎兵將校ばかりでなく參謀將校又は砲兵工兵などの將校が出る事もあり、必要に依ては歩兵の一隊に砲兵までが加はつて敵状偵察を行ふ事があります。これは威力偵察と申しまして、決戦をするが如くに見せかけて、敵に砲火を開かせ、其の勢力がどの位あるかといふ事を知るのであります。この場合には少くとも歩兵の一個大隊に砲兵の一個中隊位はあります。

野戦軍は斯くの如き偵察と、斯くの如き行軍の順序とを以て、前進するのであります。斯くして進軍中に敵と戦を交へるやうになれば、それは遭遇戦と申しまして、味方はそれらの任務に依つて、戦闘を開始しますが、遭遇戦でなく、お互ひに川を挟むとか山に據るとかして防禦陣地を築造し戦機を熟するを待つて戦を開く場合——日露戦争の沙河、奉天の大會戦の如き場合——には又た其れに應じた警戒を行はなければならぬのであります。これは駐軍警戒

と申すのであります。

駐軍警戒はいづれも哨兵を以てこれに充るのであります。一口に哨兵と言つても前哨、小哨其の他の區別があります。前哨の任務は敵の状況を探索し、休止してゐる軍隊を警戒するのが目的であります。詰り行軍中の前衛若しくは前兵と殆んど同じ役目で、而かもそれより一入警戒を嚴重にしなければならぬのであります。例へば行軍ならば明朝直ちに出發するのであるから、其の夜の警戒が出来れば可いが、駐軍中であれば、敵も味方も相互ひに虚を狙つて、戦機の熟するのを待つてゐるのですから、この任務の粗漏から敵の状況を知る事が出来なければ實に一大事であります。けれども既に決戦の時機に迫つてゐるとか、又は戦闘中に夜に入つて戦を休止してゐる時には、全軍が戦闘の準備してゐるから前哨を置かないのであります。而してこの前哨は行軍中に前衛を勤めた部隊が、其の儘の隊形で先頭に停つて居りますから、自然前衛隊から出す

やうになるのであります。それで前哨隊は前哨本隊、前哨中隊、前哨騎兵等に區分されて居ります。そうして前哨中隊は更らに小哨又は獨立下士哨といふものを自分の隊から出して前方を警戒させるのであります。

小哨には小哨長といつて少尉若しくは中尉——戦時には將校が不足する事もありますから特務曹長又は下士が小哨長となる場合もあります——がこれに當ります。其の兵數は大抵一個小隊位であります。其の任務は重要な道路とか、其他の要所々々を警戒するのであります。さうして小哨からは又た歩哨を前方に出して置きます。この歩哨は主に敵の方に通ずる道路に配置するのです。さうして道路と道路との間は巡察又は斥候が警戒の任に當ります。歩哨には下士哨といつて下士若しくは上等兵が長となり兵卒六人を従へたものと、二人の兵卒から成る複哨、それからタツタ一人の單哨もあります。これ等の哨兵は敵に最も接近したところに、斯様に小人數で警戒してゐるのですから、危険も危険、

心細さも亦一入であります。が其の代り、タツタ一人で何んな大手柄も出来るのでありますから、それを思へば男子としてこれ位會心の事はないのであります。又た下士哨の中から最も大切な道路上に位置を占め、出入者を嚴重に監視し昔の關所のやうな任務に従ふ査哨といふものも出るのであります。それから獨立下士哨といふのは、連絡及び側面の警戒を補ふものであります。

斥候は下士若しくは上等兵を斥候長として他に二名の兵卒を連れたのが一番少數なもので、將校斥候は其の兵數が多くなります。さうして斥候は必ず一本の道を二十間毎位に右と左に千鳥に歩くものとなつてゐます。これは左右の敵狀を窺ふに便利な爲めであり、巡察は前哨中隊又は前哨本隊から出まして長が一名と卒が一名で歩哨の勤務の模様を監視すると同時に歩哨の居りませんところを警戒するのであります。前哨騎兵は晝間は軍の最前線に居りまして警戒しますが、夜になれば本隊か乃至中隊の附近まで退いて來るものです。前

哨はこの騎兵と斥候を除くの外は悉く歩兵が務めるのであります。

野戦軍は以上のやうに幾段にも備へを立て、ある譯で軍の一番先頭の敵に接したところは少數の騎兵か一人又は二人位の歩哨で、それから段々下士哨となり、小哨となり、前哨中隊となり、前哨本隊となり、それから本隊となるので後に退る程兵數が多くなるのでありますから、丁度三角のやうな形になつてゐます。

八 野戦軍の攻撃方略

斯うした陣備への野戦隊が、いよく戦鬪を開始すれば何うなるかと申しますと、之れにも正面攻撃、側面攻撃、正面及び一側面の合撃、正面兩側面の合撃等の種類があります。正面攻撃の際には、全軍が真正面から敵と並行して味

方の兵を展開し堂々と戦ふのでありますが、この攻撃法は損害が多く且つ時間を費しますばかりで、孰れかと言へば不利益なのであります。従つてこれは現在の戦術では餘り用ゐない事になつて居ります。次ぎは側面攻撃で、これは敵の備への薄いところに乗じて攻撃するのですから、味方には損害が少なく、而かも敵の退却路を脅かし得るのであります。一朝失敗すれば、自分が非常な危地に陥らなければならぬのでありますから、これも餘程注意しなければならぬのであります。第三の正面及び一側面の攻撃は最も多く見る戦術で、正面と側面から十文字に砲火を浴びせて敵を惱ますのでありますから効力は非常なものであります。今度の歐洲戦争でも最初獨逸の右翼クルック軍が、英佛聯合軍を追ひ詰めたのもこの正面及び一側面の攻撃であると同時に、英佛聯合軍がクルック軍を破つて反對に包圍せんとしてゐるもの此の戦術であります。第四の正面及び兩側面の攻撃は即ち日露戦争の奉天大會戦に用ゐた戦術であります。

これは味方に取つて最も有利な戦術でありますけれども、兵力が敵より餘程超過してゐなければ行はれない事であります。若し敵と同數位の兵力で強めてこれを行はうとすれば、敵は却つて窮鼠却つて猫を噛むの譬へで何んな事をやらぬとも限りません。昔ナポレオンは、何時も戦争の時には敵に包圍させるやうにしておいて、最後の戦に全軍の力を集めて、敵の中央を目標けて猛烈な突貫をやつてこれを撃破し、右と左の連絡を絶つて反對に敵を破つたものです。ナポレオンの中堅突破といふ有名な戦術はこれであります。それ故この包圍を行ふ時は斯うした失敗がないやうに十二分の用意をして置かねばなりません。が先づ多くは第三の正面及び一側面の攻撃と第四の正面及び兩側面の攻撃の二つを用ゐるのであります。それで孰れの戦術を用ゐましても、最後は突貫を行つて、敵の陣地に突き入るのがよろしいものであります。只今では歩兵は小銃で射撃しますよりも、この突貫が最も大切なものとなつてゐます。

以上は主として兩軍滯陣して戦闘を開始した場合であります。遭遇戦の場合には、先づ前衛隊が敵の前進を支へる爲めに猛烈な射撃を行ふのです。本隊は此の間に戦闘の準備を整へ、前衛隊と同一の線に出で奮戦するのですが、これと同時に成る可く早く砲兵を前進させて敵を威嚇し兼ねて味方の士氣を振興させるのが肝要であります。而してこの場合最も勇敢にして敏捷なる活動を要するものは騎兵であります。騎兵は前線で敵の搜索をするのは勿論、敵の警戒部隊を撃退し、或は敵の前進を妨げる爲めに、側面に廻つて敵に疑心を懐かせて兵力をこの方面に割かせるとか、死を塔して敵の砲兵陣地に突撃するとか、あらゆる手段を盡して味方の利益を圖らなければならぬのであります。

野戦軍の戦術、戦法等は略これです。これから進んで各兵科に就て、其の特有の性能を委しく述べることに致しませう。

九 各兵科の性能

陸軍には歩兵、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵の五兵科があります。これは前數項に涉つて述べた通り、各々獨特の働きを持つたものであります。この外に憲兵とか軍樂隊とかいふものもあれば、軍醫、主計等の非戦闘員もあります。これを各兵科毎に一々説明しますれば、以上述べた戦備、戦略等も一入了解し易いと存じます。

イ 歩兵

歩兵は陸軍の主力であります。俗に二年兵役と申しましたが、之れは歩兵だけに限られて、他の騎砲工輜重の各兵はこれを特科隊と申しまして、今日でも

依然三年制なのであります。そこで歩兵が戦闘の際に用ゐます武器はと言へば申すまでもなく小銃と銃剣——劍付き鐵砲——であります。小銃は村田式連發銃で遠く離れた敵と戦ふ場合に用ゐますもので、先づ有効射距離は八百米突位のものであります。現在用ゐてゐますのは日露戦争の實驗に依つて大いに改良を施して七連發となつて居ります。又た銃剣は突貫をする場合とか、一騎打ちをするやうな折に用ゐる事になつてゐるのであります。何しろ歩兵は騎兵のやうに馬がなければ戦が出来ないといふ事もなければ、砲兵のやうに砲車がなければならぬといふのではありませぬ、何んなどころでも、苟しくも人間の歩けるところならば、只一人でも戦闘する事が出来るのでありますから、最も重寶なのであります。そこで歩兵が隊を組んで戦闘をします時分には先づ「散れ!!」といふ號令を合圖に左右にバラ／＼と散開するのであります。其の距離は隣のものから、一步か二歩位離れるのが作法なのであります。さうして散開

しますれば、地物を利用するのであります。詰り穴に這入つて身體を敵に見られないやうにするとか、又は木の影に姿を隠すとかいふやうにする事が最も必要なのであります。この散開は何んの爲めに行ふのかと申しますと、大勢が一ツところに集中てゐますと、敵の目に着き易いのと、彈丸に中り易いからであります。尤も散開します場合には必らず若干の兵隊が散兵線の後方に残つて一個所に集つてゐるものであります。これは味方が前進します場合に、一旦散開したものが集つて來たりなどするのはなか／＼大變でありますから、先づこの残つた豫備隊が前進して敵を追撃するのであります。さうして散開した部隊は一度集合してから前進するのであります。それから又た、敵が頑強に抵抗します場合には、何うしても味方の兵隊が死ぬとか負傷するとかして、不足を告げるものでありますから、斯ういふ時には矢張り豫備隊から補充して行くのであります。

歩兵と歩兵が戦ひをします時は、第一は兵數の多寡、第二は射撃の良否、第三は地の利に據つて勝敗が岐れるものでありますが、兵士の精神作用即ち勇氣の凛々たる者は何うしても勝を制するやうであります。歩兵が騎兵に對します時は、狼狽しないで沈着いて戦ふのが最も必要であります。騎兵は馬に乗つてゐて目標は頗ぶる大きいのでありますから、射撃をしましても實によく命中しますが、騎兵が歩兵を射撃します場合はこれと反對でありますから容易に命中は致しません。それですから、沈着いて馬蹄に蹂躪されるだけの覺悟さへ持つて居れば必ず勝てるのであります。又た砲兵に對しては距離が遠ければ、砲兵の方が有効な射撃が出来るだけ強味がありますけれども、八百米突から一千米突位の歩兵の有効射距離に這入ればさう脆く敗けるやうな事はありません。それから更らに接近すれば、今度は歩兵の方に勝味が附いて來るのであります。二三百米突位に接近しますと、砲兵はモウ砲車を繋駕——後方に隠してある馬

を連れて來て砲車に繋ぐ事——して退却する暇がない位です。この場合には歩兵は砲兵陣地に突貫すれば、屹度大砲を分捕にする事が出来るものであります。そこで歩兵の射撃であります、これは一齊射撃と各個射撃の二種ありまして、一齊射撃は中隊とか大隊とかの全部が、隊長の指揮に依つて一時に同じ距離、同じ目標に向つて行ふのであります。これを行ひます目的は、戦闘の首に於て、着弾距離を試験するとか又は戦闘の酣なる最中、一時に前面の敵を撃ち拂ふとかいふ時に多く用ゐるのであります。而して各個射撃は、兵士が自分自分で目標を定め、照準を正確にして敵を射撃するのであります。然も此各個射撃には侍射撃といつて隣の兵と代り番毎に撃つことや並射撃といつて隣に構はず随意に撃つことや急射撃といつて迅速に射撃するのや連發射撃といつて出來得る限り速く射撃するのやの區別があります。この連發射撃を用ゐます時は多く突貫にかゝる前とか、退却する敵を追射撃するやうな場合に多いのであります。

歩兵の攻撃——營に歩兵ばかりではなくすべて軍の攻撃も同様であるが——には行動中思はぬ敵に出會つた時の所謂遭遇戦と、防備をしてある陣地の掩堡等に據つてするものとの二種があるのです。遭遇戦の場合には最も迅速に散開してこれを攻撃するのが必要ですし、防備の出来た陣地に據る攻撃は、味方に防備があれば敵にも亦防備があるのでありますから、一寸骨が折れます。日露戦争の沙河、奉天等の戦は敵の防備をしてあるところに攻め寄せたのでしたから、味方には随分損害が多かつたのであります。それですからこの場合には成る可く夜襲を行ふのが一番利益であります。さうして敵の陣地に近づいたならば味方は敵よりも多くの射撃をしてウンと敵を苦しめなければならぬのであります。それが爲めに敵が動揺して來ればモウベたものです。日本特有の最も勇敢な突貫に天地を震撼させるやうな勢で敵の陣地を奪ひ取るのであります。露西亞などでも突貫の場合には鼓手に太鼓を叩かせ、ウラー／＼の喊聲を揚げて

襲撃したやうですか、何んでも勇氣を鼓舞してやらねばならぬのであります。それから防禦は、要塞のやうに堅固な陣地がある譯ではなく、殊に退却の場合には士氣も沮喪してゐますゆゑ、殆んど隊形を亂すやうに散亂して仕舞ふものでありますから、其の場合には有利な地形を選んで其處に據り、敵の攻撃を堪へて成る可く兵の散亂を防ぎ、機を見て攻勢に轉するが一番必要な事であり

□ 騎兵

騎兵の任務は海軍の巡洋艦と同じく、偵察斥候、傳令等が重なるものであります。騎兵の特長は馬に乗つて居りますから、速力が疾く衝突力の強い點であります。イザ戦闘となりますと、長劍を揮つて敵の中央に飛び込み、それはそれは凄まじい働きをするのであります。けれども馬の足掻が悪い山とか溝とか

乃至崖とか泥田のやうなところでは十分の活動は出来ないであります、従つて騎兵が戦闘するのは廣々とした野原で、馬が自由自在に使へるところでなければならぬのであります。

騎兵が歩兵を相手にして戦ふのは、十分機会を待たなければなりません。其の機会と言ふのは何ういふ時であるかと言へば、歩兵は前にも記した通り、戦闘の始めには十分の豫備隊を有つてゐますから、正面は申すに及ばず、側面もなか／＼堅固でありますけれども、少し戦闘が激しくなつて來ますと、死傷者が續々出まして、これ等の豫備隊はドシ／＼補充として正面に廻されますから何うしても側面は手薄になるのであります。騎兵は其の時を逸さず馬を躍らして歩兵の陣地に突き入るのであります。それから又た行軍最中に不意に出遇つた折には、横から攻撃しますと、直ちに前後から包圍されて、手も足も出ないやうになりますが、前面又は後から突撃すれば、歩兵は嫌でも應でも狼狽して潰

亂するものであります。詰り歩兵は騎兵に對しては、狼狽せず沈着してゐる事が肝心であると同時に、騎兵は飽くまでも歩兵を狼狽させるやうに仕掛けなければならぬのであります。騎兵と騎兵とが衝突した時には、動作が敏捷で早く攻勢を取つた方が勝となるのであります、兩方共馬と言ふ速力の疾いものを持つてゐるのでありますから、勝敗は忽ち決するのです、それだから一層攻撃を敏捷にして、先手に出るのが必要です。先手に出さへすれば、長劍もあれば六十發の彈丸と騎銃を持つてゐるのですから、敵が彈丸を籠めるうちには此方は射撃する事が出來ますし、又た敵が長劍に手を掛ける間にこれを斬り下す事が出來るのであります。それだから、獨逸などでは、騎兵の劍は腰に佩びずに、馬の鞍壺に挿して置き、イザと言へば直ちにこれを引抜くやうにしてゐる位であります。日本でも日露戦争後騎銃に就てはいろ／＼改良を施しまして、今では突撃の場合にも非常な便利を得る爲めに銃に銃劍が附いてゐて、射撃の

時にはこれを伏せておき、突撃の時には起して用ゐるやうになりました。斯く武器も優れて來ましたから、他の兵科に對しては益々其威力を發揮する事が出來すけれども、同じ兵種の騎兵では兵力が同數なら兎に角相手の兵數が多い時には、叶はぬ場合もあるのであります。それから砲兵に對つた時には何うなるかと言へば、砲兵が砲火が開いてゐる間は一定の陣地に停止してゐるのであるから、騎兵が突撃しやうと思へば、歩兵よりも疾いだけそれだけ容易なのであります。また砲兵が進軍中ですと、敵を見附けたからと言つて、急に放列を布いて戦闘を開始する事も出來せんから、斯ういふ時に襲撃するのは極めて雜作がないのであります。けれども砲兵はサウ騎兵の註文通りにボンヤリしては居ないのであります。操典の上に於ても騎兵の襲撃に對する防禦手段として常に若干の歩兵の掩護を附する事になつてゐるのでありますから、これとてもさう容易には行はれません。従つて騎兵が砲兵を襲撃する場合には、掩護の歩

兵も諸共に撃破するだけの準備と度胸がなければなりません。さうして砲兵並びに掩護の歩兵には後から撃つか然もなければ横合から出る所以であります。砲兵も歩兵も、後とか又は横合から突然に騎兵に出られれば少なからず面喰ふのです。其の時に突撃するのです。騎兵は何時も敵に對つては、先づ度膽を抜いて狼狽させ、さうして戦闘を始めるのです。

總じて騎兵の戦闘は馬上の姿勇ましく、砂煙を蹴立て、進撃する有様は、實に華々しいものであります。が、騎兵とても必らず騎馬ばかり戦闘をしようと限つたものではありません。時には徒歩となつて戦ふ事もあるのです。騎兵本來の任務は、主力となつて戦ふのではなく、敵狀を偵察するとか、大部隊の前進を妨害する小數の敵を驅逐するにあるのでありますから、斯うした時に森林乃至人家を小楯に取る必要が起ります故、其の時には乗馬では工合が悪う御座いますから、何うしても徒歩とならなければなりません。そこで徒歩の時は歩

兵同様散開して射撃もしますし、時には突撃を行ふ事もあるのです。

ハ 野戦砲兵

砲兵には要塞砲兵と野戦砲兵との二種あります。要塞砲兵の事は要塞の條に於て委しく説明しましたから此の處には略します。野戦砲兵にも野砲兵と山砲兵との別があるのであります。野戦砲兵は野砲山砲いづれを問はず、輕砲の部に屬する速射砲を持つてゐるものであります。さうして野砲兵は六頭の馬匹で挽いて行くもので砲車と砲身とが固着してゐますが、山砲はバラ／＼に取壊され、車輛、砲身、砲架とが別々になつて駄馬につけて持運ぶのであります。それ故野砲は放列を布きますには六頭の馬が通行出来る道路のある地點でなければなりません、山砲は一頭の馬が歩ければいゝのでありますから、何んな險阻な山路でも登攀する事が出来るのであります。日清戦争以前は、我國では野砲本

位でありましたが、日清戦争の經驗に依つて今度は山砲も可なり用ゐる事になつたのです。けれども日露戦争に依つて、又も野砲の方が山砲よりも用ゐる場合が多いといふので野砲本位に歸り、各師團に野砲は一個聯隊——砲三十六門——宛を置く事になり、山砲は別に三個大隊を設け仙臺、岡山、久留米の各師團に配屬されたのであります。野砲も近衛師團には一個旅團三個聯隊、第一師團には二個旅團五個聯隊が特別に配置されてあります。昔は山砲は野砲に比し射撃距離も短かつたのでありますが、今日では砲身も野砲と同じ長さになり、射距離も同様となつて居ります。

野砲兵——山砲兵も含む——が戦闘間の任務と申しますれば、いふまでもなく射撃を以て敵の兵器の効力を滅殺するのにあるのです。従つて野戦、要塞戦を問はず、斥候とか但し又た前哨前衛の小衝突でなく、兩軍の主力が相對して戦闘を交へる時には必らず先づ砲兵が火蓋を切るものであります。砲兵と砲兵

とが遠距離から互ひに火戦を交へて、一方の砲兵が射撃の効果が鈍く沈黙させられるやうになると、砲兵の優勢な方の歩兵は直ちに前進を開始して、敵の歩兵に向つて戦鬪を仕掛けるのであります。こうなると砲兵はお互ひに、味方の歩兵に對して、敵の砲兵が砲火を浴せかける餘裕を與へない爲めに、猛烈な砲戦が初まるのであります。これを援護射撃と言ひ、歩兵はこの砲兵の援護射撃がなければ、心淋しくつて前進が出来ないと申す位に貴いものであります。乍併、砲兵の恐れるのは暗夜とか濃霧の場合で、こんな時には迂濶に前進すれば何時敵の歩騎兵に襲撃されるかも知らず、又た敵を射撃したくも目標が判明せぬ爲めに照準を定める事が出来ないであります。それでも夜間射撃は、同一の陣地に一日も二日もゐて、敵砲兵の所在を知つてゐる場合には差支へないものであります。其の代り、砲兵は一旦放列を布いた以上は、兵數が半分にならうとも射撃を繼續する事が出来ますから、其の點は他の兵種が到底企て及ばぬところでありませぬ。

砲兵が其の威力を發揮するには何うしても陣地を選ばなければなりません、それですから敵前に適當な陣地を定め、これに侵入する時の苦心は一通りではありません。而して先づ理想的の陣地と言へば、射界が廣く、土地が高くつて敵を瞰制する事が出来て、然かも地幅のある地面の平な、進退に都合の宜いところでないならぬのです。只今では砲身後座式と申しまして、射撃をします度毎に反動で砲車がガラ／＼と四五尺後に下るのを改良して、砲車には何等の影響なく、砲身だけが下がるやうになつて居りますから、以前ほど平地を多く要しませんが、夫れでも廣いのに越した事はないのであります。以上の條件中最も大切なのは高地に據る事でありませぬ、平地で歩兵の頭上を越へて射撃するのは幾多危険でもあり又た効果が少ないものであります。

砲弾は如何なるものを使用するかと言へば、着發彈、曳火彈、霰彈でありませぬ。

す——砲彈の事は後章に海軍砲と共に委しく説明を致します——着發彈は落ちたところであるものに當つて爆發するもので、主に射撃の始めに於て距離を測定する場合に用ひ、曳火彈は空中で炸裂して落下するもの、これが砲兵戦の主要な彈丸であります。霰彈とは近距離の射撃に適するもので、歩兵とか騎兵とか陣地に突撃して來たやうな時に使用するものであります。霰彈一發は優に小銃彈五百發位に向ふ効力を有してゐるのであります。射撃の方法は、彈丸の種類、目標、地形等に依つてそれ／＼相違がありますが、先づ隊長が距離を測定して何米突と號令をかけますと、砲手は之れに従つて照準を定め、彈丸を籠めて「打て！」の命令を待つて發射します、隊長は絶えず双眼鏡で敵陣を見詰めて居りますから、今打つた彈丸が何處に落ちたかは直ぐに知れます。さうして距離の測定が誤つてゐれば、更らに令を下して距離を改めさせ、命中するのを待つて各砲車に射撃命令を傳へるのであります。斯くして射撃を開始すれば歩兵

同様、各個射撃もやれば一齊射撃もやります。又目標が異動した場合、即ち敵が退却したとか、他の目標に向つて射撃するとかいふ時には、再び以前と同様な手段を繰返して、距離の遠近を測定するのであります。これは先づ砲兵が射撃をする一般的のものであります。

以上は主として砲兵が攻勢を取つた場合、就中一定の陣地を占有してゐる時の場合であります、同じ攻勢に出づるにしても、遭遇戦の時には其の動作を餘程敏捷にしなければなりません。さうして何んでも敵より先きに射撃を開始して敵が陣地を定め射撃を開始せしむる間にこれを退却せしむか、然らざるも十分に敵を惱し得るやうにしなければならぬのであります。さうして味方が勝利となれば逸早く敵を追撃し、敵をして再び其の附近に陣地を占めさせぬやうにしなければなりません。若し又た不幸にして敗北となつた時には、一入勇敢に戦闘して、味方の歩兵が退却して來るのを満足に收容する事が肝要で

あります。要するに戦闘の主力は歩兵でありますけれども、其の歩兵をして進退懸引を思ひの儘にさせるのが砲兵の任務で、歩兵が一ツの機械であれば、砲兵は發動機といふやうな関係になるのであります。

前に要塞砲兵の條で一寸記しました、野戦重砲兵は多くは要塞のある地方に置かれてゐます。野砲の七珊に對しこれは九珊の彈丸を打つのであります。僅かに二珊の相違でありますけれども、其の砲聲は殷々として天地に轟き實に物凄いなものであります。これを牽引しますのは野砲と同じやうで、馬が八頭になります。今度の青島攻撃でも、この野戦重砲兵の第三聯隊の第六中隊は我軍の右翼に在て、敵の艦艇數隻から打ち出す猛火を僅かに一個中隊の微弱な兵力で受け止め、盛んに敵を威嚇し、剩さへ驅逐艇一隻に大損傷を與へて、遂ひにこれを沈没させたといふ大手柄を現はした。重砲が如何に効力があるかは、この一事でも知る事が出来ます。

二 工兵

工兵にはいろいろの任務があります。鐵道隊、電信隊、氣球隊等はいづれも工兵科に屬して居ります。尤もこの鐵道、電信、氣球の各兵隊はこれを交通兵と稱し、工兵隊の外に別に交通兵旅團といふものが出來て居りますが、矢張り工兵には相違ありません。而して交通兵が斯様に獨立したのは日露戦争以後の事でありませぬ。

工兵は其の名の如く、軍隊に於ける總ての技術的の仕事を引受けて居ます。道路を修築しますとか、橋を架けるとかいふ事は無論であります。就中要塞戦には前にも述べた通り坑道開鑿、鐵條網破壊等の大役があります。昔と違ひまして、科學が進歩しますのに従つて、要塞ばかりでなく、野戦でも防禦工事はなかく堅固なものでありますから、これを破壊するには相當の苦心をしなければ

ければなりません。例令ば、鐵條網では、昔は一々工兵が彈丸の雨と降る中で、鉄でチヨキン／＼と切斷してゐたものが、今では爆彈を投じて一舉に破壊するといふ風になりました。一寸開けば鉄でチヨキン／＼切るより爆彈を投げる方が樂なやうですが、鉄で切る時代はそれだけ武器も進んでゐなかつたから斯ういふ呑氣な眞似が出来たのです、それか爆彈を投じるやうになれば、砲や銃も亦これに連れて進歩し爆彈を投げに来るものを片ツ端から打ち殺す位の覺悟は敵の方にもありますから、却て危険が身に迫る譯であります。又た道路修築の如きは、一寸聞きますと何んでもありませんけれども、戰略の都合から、急に道のない山路を通過しなければならぬといふ場合には、歩兵よりも先きに進んで、其道を造らなければなりません。其の時には前哨や歩哨の任務に就く事もないとは限りません。それから又た一夜にして砲兵が通過するやうな立派な大道路を造らなければならぬ事もあります。さうかと思へば、逆巻く激浪の

中に飛込んで架橋工事を行ふ事もあるのです。其の働き振りは要塞は別として野戦の際には表面に於てこそ比較的花々しいものがありますが、實際は非常な苦心を要するものであります。

この工兵は、斯様な質實な事が任務で、戦闘には直接従はぬのでありますが、敵前で任務に服します時には、無論戦闘は免れないのであります。

工兵科のうちで交通兵に屬する鐵道隊は、其の名の如く鐵道敷設が任務であります。日露戦争の時も今度の青島でも、敵國の經營になる鐵道がある以上、味方はこれを我手に收めて敵の交通を絶つと同時に、敵の利器を味方に應用するは最も必要な事なのです。これ等も亦鐵道隊の任務の一つであります。電信隊は主として電信の架設であります。これは後方の我軍の占領した地點にある各隊との通信機關を司るのですが、要塞戦には可なり危険を冒して電信架設をする事があります。氣球隊は、最近戰術上の花形たる航空機を扱ふところであり

ます。即ち飛行機、飛行船、自由氣球、繫留氣球等はいづれも氣球隊の所屬であります。自由氣球、繫留氣球の如きは可なり古くから用ゐられてゐますが、飛行機、飛行船が實戦に用ゐられたのは、古くは一昨年の伊土戦争、近くは現在の歐洲大戦争と青島の日獨戦争であります。従つて實戦に参加してゐるとは申せ、未だ試験時代と申すのが適當でありませう、けれども其の成績は頗る良好で、これが今一層進歩しますれば、地上の戦争などは實に滑稽に感じられる事と信じます。飛行機、飛行船の實際の價值、効力及び兩者の長短、優劣は別に航空隊なる講を設けて詳述したいと思ひます。

ホ 輜重兵

輜重兵と申すと、如何にも下らない、兵隊の糟のやうに考へてゐる人が非常に多いやうであります。輜重兵の任務は戦争に於ては實に重大なるもので、

輜重兵なくんば、如何に歩騎砲工の各兵が勇氣があつても戦ふ事が出来ません。何故かと申せば、兵糧彈藥を一手に扱ふからであります。封建時代に於ける小荷駄方は即ち今日の輜重兵であります。輜重兵の重要な事は、昔の武士が小荷駄方に名將智者を用ゐた例に依つても知れます。就中輜重輸卒の勞苦は一通りではありません。「輜重輸卒が兵隊ならば蝶々蜻蛉も鳥のうち」などといふ俗謡がありますが、これ等は實に侮辱の甚だしいもので、輜重輸卒の貴さ有難さを知らぬもの、嚙言であります。

輜重兵のうちで輸卒は無論戦線には立ませぬ、又た輜重兵は主として輸卒の指揮者となるものであります。輸卒には小行李、大行李、縦列等の區別があります。小行李といふのは歩兵隊に配屬されますもので、非戦闘員とは申せ、戦闘員も同様であります。それは戦線にある歩兵に彈藥の補充をする役目だからであります。一日半日の戦には、小銃彈を打ち盡す事もないかも知れませんが、

三日も四日も一つ陣地で互ひに一步も退かずに戦つてゐます時には、何うしても小行李の手で彈丸を補充して貰はねばなりません。日露戦争の時でありました。近衛師團の歩兵第三聯隊が、唐家屯といふ處の石山の中腹に陣を取つて敵と對抗した事がありました。この山の頂上には敵がゐるのであります。それを勇敢なる我軍が強襲的に前進して兎も角も中腹まで登つたのですが、それから先きは何うしても進めなかつたのであります。それ故山の中腹に塹壕を設けて對陣してゐましたが、四日や五日なら兎も角も一週間以上の長い間ですから兵糧もなくなれば、彈丸も盡きたのです。味方ではこれを補ひたくも敵前の而かも何等の隠れ場所もないところを通らなければ其處まで行かれないのです。敵は我軍が糧食彈藥を補充の目的で其處まで進みますと、待ち構へて猛烈に砲銃火を浴ひせかけるのです。それ故我軍も非常に困難を感じましたが、勇敢なる決死の輸卒隊は何等戦闘力なき身であるにも不拘この危険を冒して完全に糧食

彈藥補充の役目を仕遂げました。これはホンの一例であります。小行李の輸卒隊は屢々斯かる危険に遭遇する事があるのであります。これを聞けば輸卒を蝶々蜻蛉と嘲つた人達は將に愧死すべきでありませう。それから大行李と申しますと、各戦闘部隊——中隊毎に一個——に配屬されるもので、この方は其隊の糧秣を運ぶのが役目でありますから、従つて小行李程危険はありません。縦列は更らに危険が少ないもので、すが彈藥縦列は時に大行李以上の危険に出會ふ事があります。それは小行李まで彈藥を渡す事があるからであります——砲兵隊に在つては中隊毎に段列といふのがあつて、之が歩兵の小行李のやうな役目を勤め、段列から彈丸の補充を受けるのであります——けれども小行李ほどの事は無論ないのであります。糧食縦列となると、ズツト後方になります。これ等は殆んど戦線から三里五里、或は十里も離れてゐて、砲銃彈の凄じい音などば聞いた事のないものもある位であります。けれども敵が側面とか後背に廻

るやうな場合には戦闘の力がなただけ危険は非常です。そんな事は先づ滅多にはありませんが、日露戦争には一兩度敵に脅かされかゝつた事がありました。こふいふ部隊を襲撃するのは先づ騎兵が多いのであります。

輜重輸卒のうちにも別に補助輸卒といふのがあります。名の通り輜重輸卒の仕事は補助するのですが、この補助輸卒は多く補充兵の輸卒で軍隊教育を受けた事のないものがあるのです。これは戦時でなければ召集する事がなく、日露戦争の時から始めて用ゐられたのであります。其の任務は主として糧食を運搬するので、普通市中で用ゐて居ります荷車に、白米及び馬糧の麥を入れた吠を十俵位宛積みまして、三人若しくは五人位で運ぶのであります。まだ一度も軍隊の教育を受けないものが、嚴重な軍規の下に、而かも運搬の勞働に服するのでありますから、其の苦勞は一方ならず、實に同情に堪へないのであります。それで補助輸卒は戦時には尤も早く敵地に上陸し、我軍の主力が前進しま

す先々にチャンと糧秣を運んで置き、イザ戦争となれば後方の彈丸の聞へないところにゐるのですか、考へれば氣の毒であります。

日清戦争の時には、日本も僅かに六個師團で其の兵力は極めて微々たるものであります。従つて補充兵なども極めて少なく、補助輸卒などは召集した事もなかつたのであります。それ故に軍夫を募集してこうした仕事をやらせたのであります。ところが彼等は生命を無きものにして戦地に行く位のものであります。先づ破落漢と見て差支へありません。酒は呑む、賭博は遣る、掠奪はやる軍紀風紀を紊る事一通りでなく、軍法會議で處刑されたものもなか／＼多かつたのであります。そこで日露戦争には一切軍夫を用ゐず、補助輸卒を以てこれに充てたのであります。而して其の成績は極めて良好であつたのです。これは全く忠勇なる我が臣民が大君の爲め皇國の爲め所謂盡忠報國の誠を致したからであります。今後も戦争の度毎に補助輸卒は益々必要を増す事と信じます。

へ 非戦闘員

非戦闘員とは直接戦闘を行はないものであります。輜重兵や輜重輸卒も広い意味から申せば非戦闘員でありますけれども、これは兎も角も本科の兵で相當官ではありません。此處で申す非戦闘員は相當官で軍醫官、藥劑官、主計官、軍樂隊等を申すのであります。

軍樂隊は皆様御承知の如きものであります。軍樂隊でも戦地に向ふ事がありません。それは滞營中の士氣を慰めるといふ意味もありますが、戦闘中戦線に出て、軍歌を奏し、味方の士氣を振り興させるといふ事が、本來の目的となつて居ります。日露戦争でも、我軍でこそ行ひませんでした。露軍は突貫をする時には屢々軍樂隊を先頭に立て、士氣を鼓舞した實例があります。

軍醫官は即ち衛生隊であります。萬國赤十字規約があつて、この赤十字の旗

を樹てたものには一切戦を交へない事になつて居ります。その代り軍醫は「醫は仁術なり」といふ趣意から敵も味方もすべて戦場に傷けるもの、病めるものを救護するのであります。野戦衛生隊が勤務に服します順序を申しますと、各戦闘部隊には看護卒の外に、本科兵のうちから補助擔架といふものが出ます。これは豫め擔架を取扱ひます修練が積んでありますものです。で戦闘が始まりますと、自分の隊に出來た負傷者に假絆帶を施します。これは兵士一人毎に必らず絆帶包と申して三角巾、昇汞カーゼ其の他一時の手當をするだけの衛生具を持つて居りますから、これを取出して手當を致すのであります。さうして彼方の絆帶所といふところまで擔架で運ぶのであります。絆帶所には一二名の軍醫が看護長及び看護卒を従へて傷者の手當に従事し、戦線から送つて來る傷者の絆帶を取換へたり、其他の應急手當を施しこれを更らに後方の野戦病院に送るのであります。野戦病院では絆帶所より更らに設備が完成してゐますか

ら、此處で又た手當を加へ、短時日の療養で再び戦線に送れるものは此處に停め、さうでないものは内地に送還するのであります。病院船はこゝにいふ傷者又は病者を内地に運ぶのが務めであります。主計官は陸軍の會計事務を取扱ひますもので、糧食其の他の事は主計官の手に依つて、整理され按排されるのであります。この外にまだ工卒と申しまして、軍隊内の靴の修理等を取扱ふ靴工、裁縫を司る縫工、鍛冶を受持つ鍛工、馬の蹄鐵を仕かへる蹄鐵工といふやうなものがあつて、それは各兵科の中隊若しくは大隊毎に配屬されてゐます。さうして戦闘の時には他の兵と共にこれに服し、滯營中他の兵が練兵等に従ふ時には、各自が特有の技能に従つて、修理修覆の仕事に従事するのであります。これは非戦闘員ではありませんが、前に書き残しましたから、序を以て此處に加へて置くのであります。尤もこのうちで蹄鐵工は徒歩隊には必要なく騎兵、砲兵、輜重兵等の乗馬隊に限られて居ます。尙ほこの外に憲兵といふもの

があります。これは軍隊内の風紀其他を取締るので、軍隊内の警察官であります。

十 機關銃

攻城及び野戦に於ける、軍の編成、攻撃防禦等の一般戦術は既にこれを述べましたから、今度は武器について少しく記さうと思ひます。

陸軍の武器の中では小銃及び速射砲、重砲については、各兵科の説明の中で略これを盡しましたが、其の中に洩れた機關銃の説明を致しませう。機關銃の恐ろしい事は日露戦争——就中旅順——に於て實驗されたところでありませう。機關銃は實に驚く可き速度を以て發射されるもので、先づ一分間に六百發位は發射されるのであります。従つて其の効果は非常に多大で、一度これを亂射されま

すと、其の目標となつた大部隊は、俗に言ふ將基倒しのやうにバラ／＼と殲されて、如何に勇敢な軍隊でも到底面を向ける事が出来ず、前進は殆んど不能と申しても差支ない位であります。

機關銃は其の組織が砲に似て居りますけれども、彈丸が小さくつて、幾發も／＼續けざまに打つ事が出来るところは、小銃の種類に屬すべきものでありませう。乍併、小銃のやうに手に持つて射撃をするのではなく、砲のやうに臺の上に銃身を乗せておくのですから、砲とも言へます。我國ではこれを最初は機關砲と申て居りましたが、最近では機關銃と申して居ります。機關砲でも海軍のそれとは違つて居ります。——この機關銃を始めて我國で採用したのは、何時かと申しますと、それは日清戦争中の明治二十八年であります。大阪の第四師團に機關砲隊を編成しました。その頃はこれを機關銃とは言はず、機關砲と申して居りました。けれどもこれは實戦に使用しないうちに戦争が濟み

ましたので、今度はこれを近衛師團の附屬と致しまして、臺灣の土匪征討に使つたのであります。これが我國で實用の最初であつたのです。ところが其のころの機關銃はまだ極めて幼稚なものではありましたが、それでも可なり威力を發揮しまして、随分敵を惱ましたものであります。それ以來機關銃を我陸軍が使用されるやうになつたのであります。けれども別に機關銃隊といふやうな特殊な部隊は出来てはゐないのであります。機關銃の種類を申して見ますれば、我國が前に申した日清戦争に初めて使用したものはカトリング機關銃と申しまして、これは五六門の銃身を、圓形に連座式——並べてある事——に装置し、中央の部分を廻轉しますと、一分間に四百發位は發射する事が出来るのであります。けれどもこのカトリング銃は、餘り成績が宜しくないといふので、マキシム機關銃を用ゐる事となつたのであります。が併し、我國ではこれでも尙ほいろいろの故障がある事が判りましたので、更らにホチキス機關銃

を使用しました。このホチキス銃はカトリング銃及びマキシム銃に比して遙かに成績がよく、一度引金を引きますと、弾丸は自動的にバラ／＼と連發します。前にも申した通り、一分間に六百發位は容易に發射する事が出来るのであります。

日露戦争の際露軍が用ゐました機關銃は餘程精巧なものでありましたが、従つて我軍の機關銃よりも優勢であつたのです。これからマキシム銃なども更らに改良された點もあり、我軍も露國の機關銃から學ぶところがあつて、現今ではマキシム、ホチキス其の他の長所ばかりを採つてそれより又た一段と進歩したのを發明しこれを用ゐてゐるのであります。

機關銃を發射します方法は、小銃や大砲とは餘程違つて居ります。小銃は一人が標準を定めて射撃するもの、大砲は五人の砲手と一人の砲車長とがあつて、これが任務を分擔して射撃をするのですが、機關銃は一人の打手と二人の彈藥補

給手が居ればそれで十分なのであります。打手は右左になぎ、上下になぎ等の號令に従ひまして、機關銃の銃尾を肩にあて、敵の彈丸を避ける爲めに目隠しのやうに附いてゐる鋼鐵板——これを防盾と申します——に僅かに前方と透見するだけの穴が明いてゐますので、そこから、標準を取つて、號令通り、上下又は左右に動かしつゝ、引金を引きますと、自動的に彈丸がバラ／＼と出るのであります。何しろ一分間に六百發も出て行くのでありますから、其の速度は實に目にも止らぬと申すより外はありません。それで打手が肩で加減をして左右上下に筒口を向けますと、彈丸が飛んで行くのが、丁度ポンプから水を出すと同じやうな工合に出るのであります。それ故に一度機關銃の掃射——掃除をするやうに片ツ端から撃ち倒す事をいふのであります——に會つたならば、其の彈丸が續けざまに中るのでありますから、蜂の巢のやうに身體一面に穴が明いて一堪りもなく殞れて了ふのであります。而かも甚だしいになりますと、同じ場所

に三發も四發も命中し、それが爲めに痕痕が恰かも洞穴のやうになつて仕舞ふのもあるのであります。話を聞いたばかりでも實に恐ろしい武器ではありませんか。

機關銃はこれほど精巧な武器ではありませんけれども、只ターツの缺點があります。それは何んであるかと申しますと、一度發射し初めると、僅かな時間に續けざまに數千發を打つやうになりますから、自然砲身が熱して來る事でありませぬ。これを避ける爲めには熱を冷す装置がしてあります。マキシム銃でもホチキス銃でも、銃身の上に大きな管があつて、これに冷水を入れて、銃身が熱するのを冷すやうになつてゐます。けれどもこれはまだく改良する餘地が十分にあるのであります。

機關銃に用ゐる火薬は、小銃弾と同じく無烟火薬を用ゆるのであります。小銃弾に就ては項を改めて委しく申上げます。——から銃口からは少しも烟が見

えないのであります。乍併銃身の熱くなるのを冷すところの例の冷却器の水が、お湯のやうになつて蒸氣を發しますから、火薬から烟が出ないでも機關銃の所在はこの蒸氣が白くポツ／＼と立ち騰るので判明します。これ等も今後改良す可き點であらうと思はれます。

一體機關銃は攻勢を取つて進みます時よりも、守勢を取つて防禦する方が効果が多いのであります。攻勢の時には味方が前進しますのに従つて、屢々陣地が異動致しますから、機關銃を持ち運んで照準を定めたりなどする手間がかかりますが、これが防禦となりますれば、敵が前進して來ると思はれる重要な地點に對して一定の陣地を構へ、此處に機關銃の筒口を揃へて待つてゐますれば、敵はイヤでも其處に現はれて來ますから、それを目蒐けて打ち出せば、前に申した通り將棋倒しとなつて全滅して仕舞ふのであります。従つて野戦よりは要塞の守備軍に取つて大切な武器であります。論より證據、今度の青島に於ける

日獨戦争でも、十月五日に陸軍省が公表した左の記事は、機關銃が、攻撃軍よりも、防禦軍に利益多き事を示して居ります。

十月二日青島に於て敵、健氣にも我包圍軍の一部隊に向つて夜襲を試み來れるを一撃の下に追ひ拂つた。開戦以來青島の敵は我包圍線に向ひ海陸兩方面より旺に猛火を注ぎ或時は一日千發以上の砲彈を費やす事もあつたが、日と共に彈藥の窮乏を告げつゝあるものと見え、今日に至つては砲撃も極めて緩慢なるものとなつた有様である、二日我右翼隊の内海近くに在つた部隊の前哨中隊は、前方道路の左右に小哨の位置を定め、塹壕等若干の防禦工事を施し、その前方に歩哨を配置して敵を警戒して居た所が、夜に入つて『敵我軍に向つて夜襲の模様あり一部は躍進しつゝあるものゝ如し』といふ歩哨の急報に依り、小哨長は直にこれを前哨中隊長に報告した、中隊長はスワよき敵御參なれとあつて時を移さず部下の中隊を率ひ、小哨線に進み一小隊の小哨と

合し道路を挟みて左右の塹壕に依る陣地を占めて展開し、機關銃二挺を配置して待構へて居た、通常ならば小哨は前哨中隊の位置まで引下り合して邀へ撃つのが原則であるが、此時は地形上防禦陣地の都合から中隊が小哨線まで出動したのである、九時半と思しき頃敵の歩兵約三百五十、機關銃五挺を以案の如く我前哨線に向ひ進み來つたのである、恰も十三夜の月は晃々と青島の地を照し水疏なる海泊河の河底は白く見ゆるのであつた、凄慘なる月光を浴びて進み來れる小賢しき敵軍の指揮官は嘗て天津駐屯軍司令官であつたクロー中佐で我前哨線を突破せんと試みたのである、待構へたる我軍は道路左右の防禦陣地より道路上を躍進しつゝある敵に向ひ一齊に發射し、敵の慌てて散開するや我機關銃は左右より其射線を交叉して敵の散兵線上に猛烈なる砲火を注ぎ掃射を試みた、交戦約一時間十時三十分に至り流石頑強の敵も遂に堪へ兼ねたと見え將校一卒四十七の死體を戰場に遺棄して引揚げたのであ

る、これ全く我軍前哨中隊長の措置宜しきと、小哨長の沈着と卒の勇敢なる
とに依るのであるが、就中小哨長の任務といふものは重大なるもので、軍の
最前線にあつて敵と絶えず接觸を保つてゐるのであるから、小哨長たるもの
は沈着と剛膽の人物でなければ任務を果し得ない。小哨長に就ては普佛戦争
の時に佳い話がある、千八百七十年十一月十五日巴里に迫れる獨軍の一方
面の小哨長を命せられた一曹長ウヨルツハは、部下二十名を率ゐるマルネ河近く
を警戒しつゝあつたが此の時敵の一個中隊渡河して來襲すとの情報を得敵の
眼界を避けて前進し沿岸の小堤塘まで出で、之を待ち、敵軍全部乗船した
りても時機早しとなし火蓋を切らず、漸次接近して充分に射撃効力を現し得る近
距離内に敵の船が來た時、一時に急射撃をなして之を脅かし、敵をして何事
をなさしめず、渡河の目的を充分に破り得たのである、この時若し小哨長が敵
を見て狼狽へて射撃をしたならば、機を誤り遂に無數の敵に乗せられたので

これ全く小哨長の沈勇剛膽であつた爲め見事に其任務を盡し得たのである、
小哨長なるものは斯くの如く周密なる注意と沈着とが必要なのである、因に
小哨は前哨中隊中の一個小隊を以て成り小哨長は小隊長の中尉或は少尉之を
以てれに任ずるのであるが或場合には下士を用ふることもある。由來籠城軍
の包圍軍に逆襲し來るはその前線の攻撃を妨害する爲めで戦術の原則ではあ
るが所詮陥落と定つた時には打つて出づるといふことはしないものである、
これを彼のクローロ中佐が行つたのは無謀もまた甚だしいものと云はねばな
らぬ、彼の部下四百は津浦鐵道の守備兵であつて青島軍中の精銳である、こ
れ以外には青島の兵にはロクナものは居ない。

以上は陸軍省が公報を發した翌日即ち十月十六日の東京日日新聞紙上に現は
れた記事であります。陸軍當局者も申します如く、獨逸軍の夜襲は無謀で、我
が守備軍が勇敢であつた事は勿論申すまでもない事ではありますけれども、其

の無謀を敢てする位の兵でありますから、獨軍中で一番勇氣あり、元氣あつたものでありませう。其の一番強い兵が而かも我軍より優勢な兵力と、機關銃五門を以て來ながら、僅か二門の機關銃を有する我軍に撃退されたのは、取りも直さず機關銃が攻撃に益少なく、守備に利多き事を語つてゐるのではありませんか。何んにしても、この機關銃一門の力は、歩兵の二個中隊と比敵する事が出来るのでありますから、實に大なる威力と言はなければなりません。

日露戦争後には、日本や露西亞のやうに、實際戦争の苦しみを嘗めた國は申すに及ばず、これに教へられた世界列強も、いろ／＼に武器の改良を企てましたが、就中最も進歩しましたのは陸軍では機關銃、海軍では潜水艇であります。何んでも、將來陸軍の決勝的戦闘は、機關銃の多少に依つて決せらるゝとまで言はれるやうになつてゐるのであります。

十一 砲彈及小銃彈

砲彈とは大砲の彈丸、小銃彈とは小銃即ち鐵砲の彈丸である事は諸君も御存知の通りであります。さうして其の砲彈にはいろ／＼の種類があります。前にも申しました通り、大砲には重砲と輕砲の區別がありましてその砲の大きさに依つて彈丸も異つて來るのであります。重砲兵の配屬地を委しく申しますと横須賀に二個聯隊、大阪に一個聯隊、廣島に一個聯隊、下關に二個聯隊、函館、舞鶴、對馬、忠海に各一個大隊あります。これ等はいづれも要塞のある所であります。輕砲即ち速射砲の野砲兵は近衛師團に三個聯隊第一師團に五個聯隊、其の他の各師團には一個聯隊宛あり、又た山砲は仙臺、岡山、久留米に一個大隊宛ある事は前に述べた通りであります。

そこで以上の重砲に用ゐる砲弾は、大略二つに別れてゐます。即ち弾丸が地上に墜ちてから、破裂するものと、弾丸が砲口を放れて飛んで行く時に一定の距離で破裂し、其の破片が敵の頭の上に落ちるのとであります。始めのは軍艦とか砲臺とかを破壊するもので、後のは人馬を殺傷するのが、目的であります。これ等の弾丸を發射するのに使ふ火薬は、これを装薬と言つて昔は有煙火薬でありましたが近來は殆んど無煙火薬のみであります。さうしてその火薬は眞鍮の圓い筒に入れて置き砲弾とは別々になつてゐます。この火薬の薬莖は弾丸が大きくなればなるだけそれにつれて大きくなるのであります。砲弾の種類を細かく別けますと四種類になります。第一は破甲弾といひまして、これは海軍の装甲板を打貫くのですから、陸軍では用ゐる事は滅多にありませんが、要塞などの壘壁を破壊するには用ゐる事もあります。第二は榴弾でありますが、之には更に尋常榴弾と爆裂榴弾の區別があります。尋常榴弾は工作物の破壊や

人馬を殺傷する爲めに用ゐるのですから、野砲等でも用ゐます。爆裂榴弾は俗に爆弾といふやつで尋常榴弾の更に爆發力の強いのであります。これも重砲の弾丸で、要塞戦などで鐵條網を柱ごと根こぎにするとか、又は掩堡を破壊するにはこれに限るのであります。それから又た飛行機上から投下する爆弾もこれであります。

榴霰弾は野砲、山砲が普通用ゐる砲弾で砲兵の條で申しました曳火弾はこれです。この砲弾の中には丸子と申しまして、お菓子位の鐵砲玉位の銅の玉が百乃至百五十位這入つてゐまして、空中で炸裂して落ちて來るのですからなか／＼恐ろしいものであります。而もこれを入れてある、鑄鐵若しくは鋼鐵の筒が粉々になつて丸子と一緒に落ちるのでから、この砲弾一發は、歩兵の小銃弾二百五十發位に向ふのであります。其の次ぎは霰弾で、これは敵が極く接近した時に打つのです、例へば敵の歩兵とか騎兵が砲兵陣地に突貫して來たや

うな場合に用ゐますもので、彈丸が砲口を放れますと直ぐに破裂するのです。而も一ツの砲彈の中には無数の丸子があつて、何んの事はない、一度に五六百發の小銃彈が飛んで来るやうになるのであります。

以上の砲彈は大抵圓くつて先が尖つてゐる事は御承知の通りです、さうしてその圓い筒は鑄物を用ゐるのもありますが、多くは鋼鐵を用ゐます。それから彈丸の長さは普通丸さの二倍といふ事になつてゐるのです。其の彈丸の中には炸藥と云つて爆裂する火藥が入れてあります。さうしてこの炸藥に火を點する爲めには信管といふものがあつて、これから火を移し爆裂するのであります。又小銃彈は砲彈のやうに多くの種類はありません。さうして砲彈が鋼鐵製なのに比しこれは鉛製です。それから砲彈は藥莢が別々ですが、小銃彈は藥莢が一緒に付いてゐます。勿論小銃彈の目的は砲彈程重大ではありませんから、こうした違ひのあるのは當然であります。

十二 副防禦物

副防禦物とは地雷、鐵條網、鹿柴、狼狽等を總稱するのであります。地雷は即ち地面の中に爆藥を埋めておいて、敵かその上に來た時に、味方の陣地から引いてある電氣の力で爆發させるのであります。鐵條網は如何なるものかと言へば、丸太を二重三重に打ち込んだものに、鐵の條線を蜘蛛手繩手に張り廻したものであります。日露戦争までは、我軍の鐵條網は單純な針金でありましたけれども、露軍はこの針金に金米糖のやうに尖つたものを作つてこれを取付けたのみか、これに電流を通はして工兵が鉄みで切斷しに行くと、電流が鉄を通して身體に感じて死ぬものもあつたのでした。これ以來鐵條網にも大分改良をするやうになりましたが、要するに其の構造には大なる相違はありません。聞

くところに據りますと、青島の獨軍は鐵條網に對しては餘程の苦心を費し、雷に電流を通はせただけでは嫌たらず、更らに恐る可き電鈴装置の報知器を附屬してゐるといふ事でありませぬ。それは何うなつてゐるかは委しく知る事は出来ませんけれども、鐵條網を破壊する目的を以て、夜間暗に乗じて密かに近づき作業にでも着手すれば、直ちに鐵條網に通じてゐるところの電流の作用で、報知器はチリン／＼と鳴り出して、攻撃軍をして何等の作業を施させる事が出来ないやうになると同時に、報知器の鳴つた方面に向つて一齊に猛火を浴せやうといふ仕掛けになつてゐる事と思はれます。鐵條網がそれまで進歩しますれば、何うしても榴彈の力に依つて鐵條網の杭を根こぎにして破壊するより外はないだらうと思はれます。鹿柴と申しますのは、大きな木を伐りまして、枝や葉の繁つたのを幾重にも攻撃軍の方に向けて並べて置くのであります。こんなものは何んの役にも立たないやうでありますけれども、敵が突貫して来るや

うな場合には、往々にしてこれに妨げられて前進が出来ないのであります。氣を落ち付けて悠々と取拂へば、左のみ困難な事ではありませんが、敵前でそんな悠長な事をして居れば、敵は必らず猛烈な砲銃火を浴せかけますから、そんな呑氣な事はして居られません。さうかと言つて、あはて、取除けやうとすれば、これが又た容易な事では出来ないのであります。要するに鹿柴はこれに依つて敵に死傷を與へるといふやうな、積極的の防禦物ではないのであります。これに依つて敵の前進を支へるといふ消極的の效果はあるものです。

狼筈と申しますのは、俗に言ふ落し穴であります。大きさはいろいろありませうけれども、先づ普通は直徑一間の圓い形に穴を掘るのであります。穴の深きは二間乃至三間もあつて、一度これに落ちると、人手を借りて助け上げて貰はなければ、到底出られないやうにしてあるのであります。又た時に依りますと、穴の中に先の尖つた槍のやうなものを入れて置き、これに落込めば、その

槍に刺されて生命を落すやうに仕かけてあるものもあります。

以上の副防禦のうち地雷は單獨に用ゐますが、其の他のものは多くの場合、並用されるものであります。詰り一指の代るく弾かんよりも五指が一時に弾く方が効力があるといふ論法からして一度に用ゐて敵の前進を支へやうといふのであります。それでこれを並べます順序は何うであるかと申しますと、先づ第一線が狼狽であります。前に申したやうな穴を一間か二間置き位に幾つもく掘つて置くのであります。さうして第二番目に鹿柴を並べるのであります。狼狽と鹿柴との距離は殆んど相接してゐて差支へないものであります。鹿柴と鐵條網との距離も成る可く短く短いのがいゝことなつてゐますからこれ等三つの防禦工事は殆んど一寸の隙もなく並べて置いて差支へないのであります。否三段に並んでゐる方が敵の前進を阻止する力が多いのであります。

十三 陸軍の糧食

陸軍に關する最終の記事として糧食の事を少しく述べて見ませう。世界各国中最も安價な糧食で満足し得られるものは日本兵であります。今度の歐羅巴大亂の戦費を調べて見ますと、これを知る事が出來ます。日露戦争の經驗に依りますと、日本は一人の兵士に對して一日の費用が平均二圓位であつたさうであります。これに引き換へて、歐洲戦争では一番金のかゝらない獨逸でも一人一日につき三圓五十錢位を要してゐます。又た歐羅巴中での粗食と言はれてゐる露西亞でも矢張り三圓乃至四圓はかゝります。佛蘭西は五六圓で、英吉利に至つては少なくとも十圓多きは十四五圓かゝるといふ事であります。英吉利に限つて何故斯う多額の金を要するかと申しますと、日本のやうに徴兵制度ではな

く、月給で抱へた傭兵だからであります。

それから各國兵の食べ物を見て見ますと、獨逸ではパンが一斤と八十匁、重焼パン一斤餘、パン粉百五十匁、鶏卵入ビスケット百匁以上三種のうち一種と肉類が一斤か又は罐詰半斤に野菜が四五十匁と馬鈴薯が四十匁乃至二百匁までが一日の分量となつて居ります。それから佛蘭西は何うかと申しますと、パンか重焼パンのいづれかを一斤半ほどと生肉が一斤か罐詰半斤、それに野菜でありますが、野菜の代りに米を用ゐる事もあるさうです。露國は乾パン一斤半かパン二斤と、挽割麥を二十七匁及び牛肉一斤半か罐詰半斤、それに野菜が附くのであります。英國はパン一斤三十匁かパン粉一斤、或はビスケット一斤で間に合はす事もあります。肉類は露西亞よりは五割も多く野菜の代りに乾葡萄又はナッツなどといふ乾果物を用ゐます。埃國は最も手輕でパン一斤半、牛肉一斤、それに野菜であります。これに對して我が國はと申しますと、米が六

合と野菜、それに梅干若しくは福神漬が十匁で、携帶行糧といつて、戰鬪中糧食が後方から届がない時の用意に持てゐますものは、道明寺五合がパン一斤半を一日分の割合として二日分持つてゐるのであります。この外に醤油とか味噌とかが五匁、食鹽、砂糖が三匁、お茶は板のやうに固めたものが一人一匁の割合で給與されるのであります。日本のお茶と同じく歐洲各國ではコーヒーが渡されるさうですが、獨逸は六匁、佛蘭西は五匁、英國は十匁内外で外にバターや胡椒なども呉れるのであります。露國は有名な茶好きでありますから其の數量は明瞭ではありませんが可なり多いやうであります。

又た酒や煙草などの數は何うであるかと言ひますと、日本では六日目に一回づゝ日本酒が二合、ブランデーが四匁、巻煙草が二十本を給與されます。獨逸、英、埃の諸國はこの種の給與はないやうでありますけれども、佛蘭西は餘程贅澤で、鹽スープ、葡萄酒、ビール、ブランデー、煙草が給せられるのであ

ります。以上の比較に依りますと、日本は決して贅澤ではありませんけれども、すべてのものが完全に行き届いて給與される事になつてゐます。この點は歐羅巴の先進國も我國に學ぶところがあつてよろしからうと思ひます。殊に我國では、畏多き次第であります。大元帥陛下を始め奉り皇后宮、東宮其他の皇族から下は一平民に至るまで、軍國の際には舉國一致出征軍隊の勞苦を慰める爲めに、或は慰問袋を贈るとか、恤兵部に献金して然る可き慰安の方法を講じるとか致しますから、實際はこれ以上の給與があるのであります。

兵士の糧食を記した序に馬匹の分も記して見ますれば、馬匹一頭は一日に麥五升、乾草一貫五百貫、藁一貫目となつてゐます。が人間と同じく戦闘間糧秣の到着しませぬ時の用意としては玄米を二升五合持つてゐる事に定められてあります。

第二講 海軍

十四 海軍の現在勢力

我國海軍の現在に於ける實勢力は、何れほどあるかと申しますと、戦艦が十隻この噸数が十八萬二千九百噸、巡洋戦艦が八隻、この噸數十六萬六千七百四十噸、一等巡洋艦が九隻、この噸數八萬千八百七十八噸、二等巡洋艦が十三隻、この噸數五萬六千八百八十四噸、一等海防艦が六隻、この噸數七萬一千八百八噸、二等海防艦が十二隻、一等砲艦が三隻、二等砲艦が五隻、一等驅逐艦二隻、二等驅逐艦二隻、三等驅逐艦四十九隻合計五十三隻、一等水雷艇十六隻、二等水雷艇三十二隻合計四十八隻、潜水艇十三隻であります。このうちで戦闘に従事し得る噸數は戦艦以下巡洋艦以上の噸數を申すのであります。尤もこれ以外

に戦艦に於ては近く竣工する扶桑の三萬六百噸を始めとして、これと同級の山城、伊勢、日向もが加へられまするし、又た駆逐艦は軍國の臨時議會で十隻を建造する事が通過して居りますから、これも來年は出來上りますし、潜水艇も十四、十五の兩號が近く出來る事になつて居りますから、今後我が海軍の勢力は、今日より増大するばかりであります。

それで、我が海軍が巡洋艦以下の艦艇に對しまして、一等とか二等とかいふ區別をいたしましたのは、何ういふ譯であるかと申しますと、それは艦の大小に標準を取つたものであります。戦艦は別と致しまして、日露戦争の時までは一等装甲巡洋艦と申して居りましたのを、巡洋戦艦及び一等巡洋艦と致しました。さうしてこれは七千噸以上あるものとしてあります。昔の三等巡洋艦は今日の二等巡洋艦で、これは七千噸以下のものであります。一等海防艦は七千噸以上、二等海防艦は七千噸以下です。さうして三等海防艦であつたものは全部二等海

防艦に繰上げました。一等砲艦は八百噸以上のもので、通報艦と申して居りましたものも、この一等砲艦のうちに加へられました。二等砲艦は八百噸未満、一等駆逐艦は千噸以上、二等駆逐艦は千噸以下六百噸以上、三等駆逐艦は六百噸以下、一等水雷艇は百二十噸以上、二等水雷艇は百二十噸以下といふのであります。これ等の各艦艇の事は、陸軍の條で、各兵科の性能に就て述べましたやうに一ツ／＼悉しく説明を致しますが、それに先立つて、現在海軍の艦隊組織と、軍艦が初めて世の中に生れ出した時から、今日のやうに發達して來ました歴史を記したいと思ふのであります。

我海軍は第一艦隊、第二艦隊、第三艦隊、練習艦隊、豫備艦隊の五つに別れてゐるのであります。練習艦隊以上はこれを在役艦と申しまして、其の外の豫備艦隊は即ち豫備のものであります。在役艦には第一種軍艦と第二種軍艦とがあります。第一種軍艦と言ひますと、戦闘の役務に堪へられるもので、第二種

軍艦は戦闘に堪へられずとも、常務を帯びて航行し得られるものを言ふのであります。一體軍艦といふものゝ任務を、極くかい摘んで申しますと、平時にあつては、自國の海岸を航海しまして、海賊のやうなものが出沒します時にはこれを退治し、密獵者を監視し、必要に應じては、未開地の探究、航路、錨地の測量、海難の救助等に従ひ、進んでは海外に於ける自國の移民や各國の主要な港に於ける自國の商業權を保護するのであります。又た戦時にあつては自國の海岸や要塞を護り、進んでは敵の艦船を破壊し、戦時禁制品を載せた敵の商船を拿捕したりするのであります。而して我海軍の根據地と所轄區域とを記しますと、第一海軍區は横須賀軍港が根據地となつてゐまして、羽後陸奥の國境から、本土東海岸及び同南海岸に沿つて、紀伊國南牟婁郡界に至るまでの海岸海面、小笠原島及び北海道の海岸海面並びに樺太島の海岸海面を護ることとなつて居ります。第二海軍區は吳軍港が根據地で、第一海軍區が受持つて居ります紀伊

國南牟婁郡の界から、長門國大津豊浦郡界に至り、更らに九州に及んで筑前國遠賀宗像の郡界から九州の東海岸に沿つて日向大隅の國界に至るの海岸海面、それから四國の海岸海面並びに内海を護つてゐます。第三海軍區は佐世保軍港が根據地でありまして、筑前遠賀、宗像郡界即ち第二海軍區の受持つた接續點から、九州西海岸及び同南海岸に沿つて、日向、大隅國界に至るの海岸と海面、それから壹岐沖繩諸島の海岸海面、臺灣澎湖列島の海岸海面が管轄區域であります。第四海軍區は舞鶴軍港が根據地で、長門國大津豊浦郡界から、本土西海岸に沿ひ羽後陸奥國界に至るの海岸及び海面、それから隱岐佐渡の海岸海面を護ります。第五海軍區は朝鮮鎮海灣の軍港に根據地があつて、對馬と朝鮮全體の海岸と海面を防護し、關東州海軍區は旅順に根據地があつて、關東州即ち南滿洲の日本租借地の沿岸と其の海面とを護る事となつてゐるのであります。さうして以上の各根據地は、旅順を除きます外は、残らず鎮守府がありまして――

但し鎮海灣には鎮守府がなく、佐世保の管轄としてあります——其の締め括りを致します。それから以上の外に對馬國の竹敷、青森縣下の大湊、臺灣澎湖島の馬公及び旅順には要港部と言ひまして、鎮守府を海軍の師團としますれば、丁度旅團位のものであるのであります。それですから、横須賀では津輕海峽から太平洋に面したところを和歌山の邊までを護り、吳では紀淡海峽から關門海峽、佐世保は九州一帯、舞鶴は山陰道の裏から日本海に面して北陸道を経て津輕海峽を護るといふ事になつてゐるのであります。

十五 軍艦發達の歴史

軍艦以上の如くに、其の受持が定められて、それ／＼警備の任に當るのであります。今でこそ斯うして立派な軍艦が出来て、海岸も防禦等も安全であり

ますれども、昔は斯うした立派なものではなかつたのであります。

軍艦が初めて世の中に生れましたのは昔も昔も大昔の事であります。希臘時代から羅馬時代と言ひまして、西曆の紀元前から第一世紀の頃であります。その頃は軍艦と言つても商船と大した違ひのない時分でありました。さうしてガレーといふ一種の帆船に櫓や櫂を使用して、音に風の力ばかりでなく、人力を以て船を操り得るやうにしたのであります。又た武器としましては、乗組員即ち武人が携へてゐる刀とか弓のやうなものに限られて、船自身には少しも兵器は備はつてゐなかつたのであります。何んの事はない日本の源平時代頃の軍船のやうなもので、それよりもモット進歩してゐなかつたものなのです。それから下つて十字軍時代になつて船は餘程大きくなりましたが、船を操る事や乃至攻撃、防禦等の軍艦らしい設備は昔の儘であつたのです。さうして十字軍の終る頃になつて軍艦は純然たる帆走船となつたのであります。

話は違ひますけれども、此處で一寸十字軍の事を簡略に申しませう。これがないとこの場合何か物足らぬやうであります。十字軍が第一回の戦争をしましたのは西暦千九十九年即ち十一世紀の終りであります。この戦の起りと申しますのは、セルジック・トルコ人——波斯の北部に起つた土其古人の總稱で一時は非常に盛んでしたが十四世紀の初めて蒙古軍に滅されました——が希臘侵略を企て、攻め寄せ、且つ基督教徒のエルサレムに參詣するものを妨害する爲めにこれを占領しました。そこで希臘の皇帝は其の頃歐羅巴の最大強國でありました羅馬の法王に援を乞ふたのであります。これと同時に西歐羅巴の基督教徒も亦、エルサレムを回復する事を法王に願ひ出しました。依つて法王ウルバノ二世は、歐羅巴の王侯と會して遠征される事となりました。これが十字軍の起つた初まりであります。第一回は前にも申しました通り千九十九年で、この時にはエルサレムを回復して、ゴドフレドといふ人が其の王となりました。この

ゴドフレドは獨逸のロートリンゲン——ローレンの獨逸讀み——の伯爵であつたのです。其の後千百四十九年に、又もやエルサム王國が彼等の爲めに攻撃されましたので、これを救ひに行きましたが、この時は敗れて歸つて來たのであります。第三回は千百九十二年で、この時は獨逸のフレデリッキ一世が出征しましたが、僅かに海岸の一部を得たけででありました。第四回は希臘の内亂に干渉したけでありますが、第五回目にはフレデリッキ二世がエルサレムを回復しました。けれどもホラズム人——土其古族でこれは成吉思汗に滅ぼされました——に滅ぼされました、それから更に佛蘭西のルイス第九世が第六回、第七回の十字軍を企てましたけれども。これはなにも残した事はなく、これで十字軍といふものは終つたのであります。それは丁度千二百九十一年で、十字軍時代といふのは百九十二年間あつたのです。この長い間でもまだ科學の進歩しない時ですから、軍艦の發達等も頗ぶる遅々としてゐたのであります。それ

から下りまして、十五世紀の冒険発見時代からは舷側に大砲を備へるやうになつたのであります。この冒険時代といふのは伊太利ゼネバの人コロンブスが第一回に西印度諸島の一なるグアナハニ島を発見し、第二回にアンチル群島とシヤマイカ島、第三回にアメリカ大陸に達しましたり、又たこれと相前後した千四百九十九年にアメリゴ、ヴェスプチといふ人がヴェネズエラを発見したり、其の翌年葡萄牙人カブラルが南米ブラジルを発見したりした所謂冒険的の陸地発見が流行した時代の事であり、餘事ですが亞米利加といふ名はアメリゴといふ人の名から轉化したのであります。

軍艦が斯く舷側に大砲を備へるやうになりましたが、推進法は依然帆を張つて風のまに／＼走るといふので、今日のやうな蒸汽機關で動かすなどは夢にも思はなかつたのであります。この頃は世界各國とも未開の野蠻國でありましたから、強いもの勝ちで、海上でも商船だから安全だといふやうな事はなかつた

のです。従つて商船でも何日何時何處の海で何んな船に出會つて、掠奪をされるか判らないものですから、多少の武装はしてゐたものであります。早く言へばまだ軍艦とか商船とかいふ區別が明かになつてゐなかつたのであります。それが十六世紀の頃に至りまして、歐羅巴の秩序も正しくなつて國々が其の領地を定め、同時に殖民地なども定まりましたので、其れを保護する必要から、武装を専門とする軍艦を建造しなければならぬ事になつて來たのであります。それでもまだ汽罐などは發明されませんでしたから、舷側に數十門の大砲を備へ、幾重にも甲板を有しては居りましたが、矢張り帆を張つて風の力を利用してより外はなかつたのであります。斯くして十九世紀の初めまではこんな幼稚な木造の船で過して來たのであります。それが有名なトラファルガルの海戦——ネルソン提督が奮戦した時——の結果、いろ／＼の不便や不都合がある事を発見して、軍艦の種類を區別するやうになり、それが源となつて、遂ひに

今日のやうな立派な軍艦が出来上る事となつたのであります。ネルソン時代の戦列艦と申して、一番前に出て活動したものが即ち今日の戦艦で、フリデートと申しましたのが現今の巡洋艦の創まりであつたのです。

續いて蒸氣機關が發明されましたので、これを軍艦——商船にも——應用するやうになりました、けれども最初は艦の外側に車を附けて、これをグル／＼廻して進むのでありましたから、無論大きな軍艦も出来ませんでした。それがいろ／＼に試験しました結果、今日のやうな完全なものに改められたのであります。それは千八百三十七年即ち今から七十七年前の事であつたのであります。この時になつて軍艦が帆走——風力を利用する事——を廢めたのであります。けれども艦は依然として木製でありましたから、防禦の方法は極めて不十分であつたのであります。

一六 初めて出来た装甲軍艦

軍艦が木製から鋼鐵製に進歩したのは千八百五十三年のクリミア戦争の時からであります。それより以前、千七百七十七年頃から、ボツ／＼船舶に鐵材を用ゐる事が行はれました。千八百五十年にはすべての商船は全部鐵材を使ふやうになつたのですけれども、軍艦だけは依然鐵材を用ゐませんでした。堅固でなければならぬ軍艦が、商船よりも劣つた木造艦で満足してゐたのは何ういふ譯であるかと申しますと、其の頃はまた砲彈などは無論進んで居りません。中りましても破裂する力は極めて微弱であつたのです。従つて鐵材を使つて、これが砲彈で飛散する危険の方が恐ろしく、木製なれば破片が飛んでも危くないといふ考へからでした。今から考へると實に滑稽であります。それがクリミ

ヤ戦争の時に、露西亞が獨り持つてゐて、其の他の諸國では知らなかつた破裂彈があつたのです。それが土其古の軍艦に命中して、火災を起し土其古軍艦はシノベといふ港で全滅して仕舞ひました。そこで英國と佛蘭西の聯合艦隊は土其古を助ける爲めに、コンスタンチンの砲臺攻撃をやつたのです。それでも露西亞には例の破裂彈がある爲めに、ビクともしませんで却つて。英佛聯合艦隊が滅茶／＼にされました。此處に於て木製艦は全く駄目だといふ事が知れたのです。そこで佛蘭西皇帝ナポレオン三世は、破裂彈が中つても差支ないものをつといたので、直ちに鋼鐵の鎧を着せた浮砲臺五艘を造りまして、露西亞に攻め寄せ、漸くの事でキンブルンの砲臺を落す事が出来たのであります。軍艦が鐵材を用ゐるやうになつたのは、實にこの戦争に教へられたのであります。

話は再び岐路に入りますが、クリミア戦争の事を記したいと思ひます。これは世界の海軍史上に於て重大であるばかりでなく、要塞攻撃の方でも、セバス

トポールを一年も持ち堪へたといふ、要塞戰のレコトも作られてありますし、其の當時の敵が今日の歐洲戦争では味方となり、味方同志が敵となつて、ゐるといふ面白い事もあるからであります。

クリミア戦争と言ひますのは、露西亞が土其古、英吉利、佛蘭西及びサルヂニア——同國王カコロ、アルベルトは後に伊太利を統一して伊太利王となつた人ですから、先づ今日の伊太利の事と思へばよろしいのです——の四國聯合軍と戦つたのです。露西亞は土其古を屬國にしたいと思つてゐたのです。佛蘭西や伊太利や其の他の國々では革命騒ぎが續き、土其古は長年の弊害が積り積つて来て、國が衰へて來ましたので、露西亞皇帝ニコラス一世は、豫ねての望を達する時が來たと思ひまして、英吉利に向つて、土其古を分割して其の主權の下にあるエジプトとクレテとを英國に與へるから、其の他の土其古の領土は全部露西亞に呉れろといふやうな事をば、それとなく相談したのであります。け

れども英吉利はウンと言はなかつたのです。けれどもニコラス一世は其の頃の普魯西と塊地利が露西亞に對して非常に親しかつたのでありますから、露西亞が何をしても苦情を言ふ事はないことを知つてゐました。否親しいよりも露西亞に對してお禮をいふやうな事があつたのでした。又た英吉利と佛蘭西とはお互ひに嫉み合つて居ますから、これが一緒になる事は何うしてもない、と言つて何れかの一個國だけがヤキモキしたとて露西亞には勝てる氣遣はないといふので、事を構へて遂ひに土其古と戦争を始め、ドーナ河畔にある土其古の屬地を侵略させたのであります。土其古が忿激して宣戰布告すると、ナヒモフ將軍を指揮官とする露西亞の海軍は直ちに前に申しましたシノベ灣にあつた土其古艦隊を襲つてこれを全滅させたのであります。土其古は英吉利と佛蘭西に救を乞ひましたので、佛蘭西の新帝ナポレオン三世は、國民が渴望してゐる戦勝を得て、帝政の功徳を知らしめるのはこの時であるといふので、ニコラス一世

の考へとは違つて英國と同盟して、土其古を救ひ、露西亞の領地で、黒海に面し海を距て、土其古と相對してゐるクリミアを取つて仕舞はうといふので、其處の要塞セバストホルを攻撃したのです。けれども守將トードレーベンがよく防禦して、要塞戦史上に特筆すべき一年間これを支へたのであります。その後千八百五十六年三月三十日に巴里で媾和會議を開いてこの戦争は終つたのであります。尤もこの時にはニコラス一世は歿して、露西亞はアレキサンドル二世が皇帝の位に即き、この媾和をしたのであります。僅かに五六十年前まで敵となつて露西亞を攻めた英佛兩國は、今や露西亞と共に、當時露西亞に好意を持つてゐたところの獨逸及び塊地利と戦争をしてゐるのであります。世の中の變遷は實に不思議なものであります。この中で只一人其頃から露西亞を敵としてゐる土其古のみは今日でも依然敵對を續けてゐるのであります。

斯ういふやうな工合でクリミア戦争は終りました。そこで軍艦は鋼鐵で築造

しなければならぬといふ事が知れましたので、海軍國と誇つてゐるところの英吉利は、直ちにウオーリオル號といふ装甲艦の建造を初めました。このウオーリオル號が出来上つたのは、クリミア戦争から數年後の千八百六十一年でありました。それからは續々この鋼鐵艦が建造されるやうになつて来て、十二年後の千八百七十三年以後には、木造の軍艦は全く廢れて仕舞つて、軍艦と名のついたものは、悉く鋼鐵で建造する事になりました。サア斯うなつて來ると、それからそれへと段々に進歩して行きました。鋼鐵板の防禦甲板とか、いろいろに武装を堅固にするやうになつて來ました。斯様に軍艦が進歩しますに従つて、これを攻撃する武器も進歩しました。即ち大砲とか水雷艇とかいふものは、著しく發達しました。又た日清戦争の時には、軍艦の内部に木製の部分があつては、砲彈の爲めに火災を起し易いといふ事が發見されて、これも全部鐵材を使用することに改良されました。更らに日露戦争に至つては、大口徑の威

力の大なることが認められましたので、今度は軍艦の型を變へなければならぬといふやうになつて來たのであります。

弩級艦とか超弩級艦とか申す言葉は、海軍に關する新聞雜誌の記事に多く用ゐられて居ります。弩級艦とは日露戦争の濟んだ翌年の千九百六年、英吉利に於て建造された戦艦ドレッドノートと同じ程度のもつといふ事で、超弩級艦とはそれ以上のものといふ事でありませう。このドレッドノートは、日露戦争に於て大口徑砲——砲口の大きな大砲——が優に軍艦を撃ち沈めるだけの威力を有してゐるといふ事が知れましたので、巨きな大砲を据へ付け、あとの副砲は水雷艇や驅逐艦に對する防禦のみとしたものであります。この戦艦の成績は非常によかつたものでありますから、各國は争つて所謂弩級艦を建造する事となり、世界の製艦史上に一新紀元を劃する事となつたのであります。このドレッドノートは艦の全體の長さが四百九十呎、幅が八十二呎、吃水——水に

沈む深さ——二十六呎半、排水量——水を押し分けて行く力——一萬七千九百噸で機關はダービン式二萬七千五百馬力で二十一湮八十五——一時間に約十里——の速力があり十一吋——一尺二三寸——の厚さの帯甲を有し、十門の十二吋砲を備へてあります。日本では弩級艦としては戦艦の攝津、河内で十二吋砲を十二門備へてあります。又た淮弩級艦としては十二吋砲四門、十吋砲十二門を備へた安藝。薩摩があります。超弩級艦としては巡洋戦艦の金剛、比叡これは十四吋砲八門を備へてあります。近く竣工します戦艦扶桑は矢張り超弩級艦で十四吋砲十二門を備へる事になつて居ります。而して歐米列強がこの弩級艦及び超弩級艦を建造しました數を申しますと、本家の英吉利が三十一隻、獨逸が二十一隻、米國が十隻、佛蘭西が八隻、伊太利が四隻、埃地利が三隻であります。今度の歐羅巴の大戦争が終了しますれば、更らに又た軍艦の建造法も變つて來ませうから世界の海軍に非常な變化が起るに相違ありません。

十七 海軍の戦闘勤務

海軍がすべての行動を起しますことを艦隊運動と申します。海軍がこの艦隊運動を起します時には、司令官は先づ第一に麾下の各艦艇長を自分の座乗して居りまする旗艦に集めまして、一般方略を立て、戦闘の區域を定めるのであります。さうして戦闘中に於ける司令官の命令や訓令は、なる可く簡短な言葉を用ひ、無線電信とか信號旗とかに依りまして、これを傳へる事とするのであります。さうしていよく戦闘を始めます前には、それだけの準備を致します。それは何ういふ事をするかと申しますと、先づ艦内にありますところの諸器具で、戦闘上に必要のないものは、悉く取片附けるのであります。例令は、艦載ポートであるとか、上甲板にあります周圍の手摺などは、敵の攻撃材料となる

ばかりで、味方に取つてはこれあるが爲めに、却つて砲銃發射の妨害となるのでありますから、これ等は便宜に處分されるのであります。従つて惜氣もなく海中に棄てられて了ふものもあります。それから又た、上甲板に突き上つてゐる通風筒——煙管のガン首のやうな形をした風通し——なども、平時にあつては是非なければならぬものでありますけれども、戦時となれば、却つて兵員の運動とか、大砲を廻轉する妨げとなるばかりでなく、これに敵の彈丸が命中すれば、其の破片が四方に飛び散つて、乗組將士に受けなくてもいゝ怪我をさせるやうな事になりますから、これ等も取拂れるのであります、其の外火事を起す媒介となるものや、大小の木具とか索とかいふものも矢張り處分されるのであります。詰り甲板上をは綺麗に取片附けて兵士が走り廻つても何一つ邪魔になるものがないやうにするのであります。さうして其の上に、甲板一面に砂礫を散布して、滑つたり轉んだりする事がないやうにするのであります。

甲板上を斯くの如く片附けますると同時に、艦内に於てもいろいろの準備がされます。先づ士官室にあります種々の裝飾品とか、器具とかいふものは取除かれて、其の跡に醫療器械や藥品等を備へ付けて負傷者の治療所に充てるのであります。それから又た、火事が起つた時の用意としては、ホース——ズツク製の水管——が甲板の上に幾條となく縦横無盡に引据へられるのです。装甲した砲塔にあります主砲——これ等は後に軍艦の構造任務等を記す時に説明します——は別として副砲杯には許多の鎖を垂れて大砲とこれを操縦する兵員を擁護し、その他防禦のない兵器には帆木綿を張詰め、所々の防水扉は堅く閉ざれて兵士が監視する、衝突防禦のマットは用意されて、何時でも使へるやうになつて居りますし、飲料水も所々に置かれて、兵員の渴を醫するやうに仕度がしてあります。さうしてこれと同時に火災及び衝突の豫防に従ふものや、主砲其の他の武器を取扱ふ人々は皆其の配置に就き、小出しの彈藥は安全な場所に積

まれ、大小軽重すべての大砲には悉く弾丸を装めて、「打て！」の號令のかゝるのを待つてゐます。又た下甲板の前後左右にある水雷發射管にも魚形水雷が込められてあるのであります。更らに又た、機關室に到りますと、茲には堅く防水扉が閉されてあつて、上甲板との間に嚴重な仕切りをして置きます。この中では機關長が自から蒸汽の通路を開閉する手働機に手をかけて、艦長の命令次第に速力の遲速を計り、其の他の機關兵は、汽罐に石炭を投ずるものもあれば、機關の要部／＼に油を注すものもあるといふやうに、盛んに活動してゐるのであります。何んにせよ、機關部に居りますものは、水線下——水の中に沈んでゐる事——に在つて、全く外間の様子が判らず、甲板上で何んな激戦が行はれてゐるのか、味方が勝つたのか、敵が敗れたか、そんな事は少しも判らないのです。其の癖この弾丸とか水雷とかが、一發でもこの機關部に命中すれば、最ッ先に名譽ある犠牲とならなければならぬので、申せば暗から暗に葬られる

のでありますから、一入同情に堪へないのであります。

斯様にすべての戦闘準備が整ひますと、その事を艦長に報告するのであります。戦闘中艦長は司令塔にあつて、これ等の報告を聞き、又た旗艦其の他からの信號も受ければ、敵艦の状況も視察して相當の戦備をするのであります。そこでいよく敵艦を發見すると、艦長は機關部に對して速力の程度を命令し、航海長には其の進む可き方向を示し、砲術長、水雷長にはそれ／＼打方の準備を命じ、イザと言へば、直ぐに火蓋を切るやうに仕度をさせ、部下の將士をして手ぐすね引いて待ち構へさせるのであります。さうしてゐるうちに、敵も亦同様の戦闘準備を整へて進航して來ますから、間もなく双方の弾丸が届く距離は近きますので、艦長はその距離を測つて、「打方始め！」の號令を下します。先刻から血を湧かしてゐた勇將猛卒は、サア來いとばかり、先づ主砲を一發打ち放します。この一發は試験的のもので、戦闘樓に在つて、其の弾丸の命中如

何を見て居ります士官が、彈丸が中つたとか、外れたとか、或はモウ少し上に向けるとか下に打てとかいふ知らせをします。さうして照準が定まれば、續いてドカン／＼と巨彈は天に轟き、海に震ふて打ち出されるのであります。この一番最初に打ちます彈丸は多く敵艦の精神たる前橋の下。水際から稍々上のごころを目蒐けて打つものであります。この一發が首尾よく命中しますれば、敵はこの只一發で心膽を挫いて仕舞ひ、同時に味方の士氣を振ひ興す事が出来るのであります。否最初の一彈は、假りに命中しなかつたとしても、この殷々たる砲聲を聞けば、士氣は自から振興するものであります。

主砲の巨彈が斯く打ち出されますと、續いて副砲を始め幾多の小速射砲も、一齊に火蓋を切つて敵艦目蒐けて飛ぶのであります。主砲の目的は直接敵の艦を破壊するとか沈没せるとかいふのでありますけれども、速射砲はこれと違つて、甲板で働いてゐる將士を、片つ端から打ち殺し、如何に精巧な大砲があつ

ても、これを操縦する人がなくなるやうにして仕舞はうといふのであります。

——主砲、副砲、速射砲等の大きさや、砲數などは軍艦の大小等に依つてそれぞれ相違して居ますから、後に項を改めて説明を致します——従つて其の物凄さは實に言葉では盡されないであります。

斯うなつて來ますと、何んな大きな軍艦でも全く一人の人間と同じやうになるのであります。即ち司令塔にあります艦長が頭腦で、機關部は心臓、砲銃水雷は手足となつて、艦長の命令通りに活動し、艦長倒れれば副艦長以下漸次これに代つて全艦の指揮を取り、信號、機關、掌砲等の擔當者が死若しくは負傷すれば、それ／＼手の明いてゐる兵員をこの方に補充して戦闘を繼續致します。それでもモウ砲を扱ふ事が出来ないまでに、兵員が減じて仕舞ふとか、又は砲彈の戦ひでは、距離が近か過ぎる位にまで、敵と味方の軍艦が相接近して來た様な場合には、即ち水雷發射を行つて、大いに奮戦をしなければなりません。

せん。魚形水雷の射距離は砲弾よりも近かいのですから、敵艦が接近した時には十分の効力があります。水雷發射を行ふ時には、いづれかと申せば、攻勢を取るよりも、先づ守勢を取るやうになつた時であります。斯くまでにして奮戦苦闘を續け、それでも尙ほ味方の勝利とならない時には、いよいよ最後の手段に訴へるより外はないのであります。劔折れ彈丸盡きたその最後は矢張り陸軍と同様に突貫と行ふのであります。突貫と言ひましても海軍の突貫は、陸軍のやうに兵員が敵艦に乗込む事は到底出来ません。それなら何うして突貫をするかと申しますれば、それは衝角攻撃といひまして艦首の三角に光つた角を以つて、敵の艦の横つ腹に打ち附けて、大きな穴を開けて仕舞ひ、敵艦と諸共に自艦も沈むか、運よくば敵だけを沈めて、海底の藻屑としやうといふのであります。けれどもまだこの衝角攻撃といふ事は一度も實戦で行つた事はありません。尤も演習では兩艦が沈んだ例があります。これも後に海軍の攻撃力と題して

説明をします。要するに海上の戦闘は、第一期は砲銃の戦ひ。第二期は水雷の戦ひ、第三期は衝角の戦ひとなるのですが、日露戦争には第一期の戦ひで、多く敵艦を撃沈しました。さうしてその時間は三時間以上五六時間位のものであります。

十八 戦艦の構造と任務

海軍に關する一般的の説明は濟んだやうですから、今度は軍艦の構造、任務等について、詳しく説明します。これまでに記しましたところと重複するところがあるかも知れませんが、それは豫めお断りして置きます。

海軍の戦闘力中一番重要な位置を占め、艦隊勢力の中心となつてゐるのは、戦艦であります。それですから、戦艦はすべての點に於て完全に造られなければ

ばならないのであります。即ち速力も疾く、石炭を積む場所も多く、攻撃、防禦の力も十分に備へてゐなければならぬのであります。先づ最近の経験によりますと、戦艦一隻の建造費は約三千万圓ださうです。而して我國に現在ある戦艦は攝津、河内、安藝、薩摩、鹿島、香取、三笠、肥前、朝日、敷島の十隻と目下建造中の扶桑外三隻であります。

戦艦が戦時、平時に於ける任務は頗ぶる多く、海上の實権は、常に其の手に握つて制せられるのであります。平時は別としまして、戦時には、敵の艦船を破壊若しくは沈没し、又はこれを捕獲して我物としたり、或は又た敵國商船の運輸交通を遮断し、敵の艦船を港灣に追ひ込んでこれを封鎖し、其の自由を抑へて我が交通運輸を安全ならしめるなど、凡そ海上に於ての最上の権力は、一つに戦艦の左右するところとなるのであります。従つて反對に敵の爲めに海上の最大権力を奪はれ、ば、我は勢ひ閉息して仕舞はなければなりません。そ

れ故戦艦の強いと弱いとは、直ちに其の國の海軍が強いか弱いかを知る標準となるのであります。

けれども、戦艦は陸軍で言へば歩兵のやうなものですから、外に特種の働きをして呉れる軍艦がなければなりません。詰り味方の海軍が敵の爲めに蹴散らされるやうな事がないやうに、又た戦艦が安心して敵を攻撃してゐられるやうにしなければなりません。巡洋艦とか砲艦とか其の他の艦艇は即ち其の爲めに建造されたものであります。従つて戦艦に對するこれ等の諸艦艇は主人と家來といつたやうな間柄であります。

戦艦は斯様に海上に於て貴ばれるだけ、其の責任は重大なのであります。さうして其の目的は前にも一寸記しましたが、敵艦を破壊し又は敵の砲臺を陥れるのが第一でありますと共に、敵から攻撃されても、平氣でこれを堪へてゐなければなりません。泰然自若久しき戦闘に堪へ、敵を屈服させるだけの實力が

なければなりません。これが戦艦の任務であると同時に誇りとするところなのであります。

凡そ戦艦には三つの重大な条件があります。先づ第一には前に記した攻撃の力、第二には防禦の力、第三には航海の力、即ち石炭を十分に積んで、數週間の戦闘にも不足を感じないやうにするのであります。けれども排水量——俗に言ふと艦體が水を押除ける量——の関係から、この三つの調子が好く整はないのであります。例へば、防禦に重きを置いて、装甲——後に詳述——を堅固にすれば、大砲其の他の兵器とか石炭とかを十分に積む事が出来なくなるのであります。さうかと言つて兵器とか石炭とかを十分に積むやうにしますれば、今度は防禦の方が完全に行かない事になるのであります。この點は造船家が一番苦心するところで、今尙ほ盛んに研究されてゐるのであります。然らば、戦艦を建造するには何に一番重きを置くかと申しますと、それは國に依つてそれぞ

れ相違があります。佛蘭西では防禦よりも攻撃が主となつて居りますし、英吉利では石炭や彈藥の搭載に重きをおいてあります。佛蘭西の製艦法は、長い間の戦闘には勝算が少ないのでありますが、短い時間、而かも成る可く急激に敵艦を破壊沈没させるには適當して居ります。又た英吉利のは長時間の戦闘と長途の航海に堪へられますから、此方が落付いて悠々と戦闘をする氣ならば、最終の勝利は得られるのであります。英吉利が斯ういふ製艦術を取つたのは、世界到るところに殖民地や屬地がありますから、これを守る爲めに本國から航海して行つても、尙ほ戦闘し得られるやうにしたのであります。而して我國の製艦は何うかと言へば、此の兩者の長短を出來得る限り按排し、所謂理想に近いものとなつてゐるのであります。

戦艦は右の如く壯嚴雄大で、軍艦中最も權勢を持つてゐますが、タツター不自由な事があります。大は小を兼ねるが、お玉杓子は耳搔きの代りにならな

いといふ通り、大きい爲めに困るのは、吃水が深く浅い海や川などには這入つて行かれない事です。吃水といふのは艦が水の中に這入つてゐる深さの事で、今の戦艦は最も小さいのでも二十六呎ありますから、浅い海では手も足も出ないのであります。斯うなると戦艦が海上の王様でも、水雷艇や驅逐艦に及ばぬこと甚だしく所謂無用の長物で、幾ら大きな大砲があつても、そんなものは役に立たず、間近く寄つた水雷艇、驅逐艦から水雷でも發射されればそれで往生して仕舞はなければなりません。其の代り、廣々として水の深さも十分な大海に出ますれば、それこそ獅子王が荒れたやうに、縦横無盡に航路し、何が來てもビクともする事ではありません。けれども艦を操縦する事が上手でない、何んな事にならぬとも限りません。

三ツの大切な条件のうちで、第一の攻撃力は何れ位持つてゐるかと申しますと、目下建造中の扶桑には十四吋砲が据へ付けられる筈であります、其の他

は十二吋砲が主砲となつてゐて、八門乃至十二門を有つて居ります。これ等は艦首と艦尾にある露砲塔に据え付けられるのであります。十二吋砲と言ひますと、砲口が十二吋ありますので、一門の重量は大約一萬四千貫目あります。砲身の長さは七間、其の一發に用ふる火薬が二十四貫目、彈丸の重さが百貫目もありまして、半里ほど離れたところにある三尺位の厚さの鋼鐵板を打ち貫く力を持つてゐるのであります。それから彈丸や火薬を入れるとか、打殻を取除けるとか、尾栓の開閉をするとか、砲身を上下するとかいふ事は、すべて機械で扱ふやうになつてゐますから、これほど大きな大砲でも、僅かに一人で以て數秒間に容易く發砲する事が出来るのであります。さうして發射の割合は先づ二分間に三發といふ割合であります。それから次ぎは副砲で、これは六吋の速射砲であります。砲の長さは四間位ありまして、重きは二千貫目あります。發射度數は十二吋砲の二倍で、一分間に三發であります。其の彈丸の裝填方も、十二

吋砲のやうに、彈丸と火藥とを別々に裝填しないで、同時に裝填することが出来ます。この大砲は兩舷側の備へとなつてゐるのであります。副砲の次ぎは四吋か又は三吋砲で、二十門位載せて居ります。防禦力即ち装甲は何んな工合であるかと言ひますと、ナポレオン時代、即ちクリミア戦争から其の以後數年間は、短くつて厚い、鋼鐵を帶のやうに巻いておいたのでありますが、今日では學術上からいろいろ研究されまして、敵の攻撃を受けましても、左程危険を感じません部分には、成る可く費用を減して薄くする代りに、大切な部分には十分に金をかけて、堅固の上にも堅固に鎧を着せるやうにしてゐるのであります。即ち舷側の兩端に近い部分は装甲を薄くして、汽機、汽罐のある中央部や露砲塔のところは非常に嚴重な装甲をする事になるのであります。又た防禦甲板といふものがあつて、これも重要な兵器の一つであります。

そこでこの装甲の抵抗力は、年々其の力を増すやうになりました、ハーバー

ド式の鋼鐵板は一枚で普通の鐵板三板と同様の抵抗力を持つて居ります。その代りこの鋼鐵板を造るのは非常なもので、先づ空氣壓搾の力で鐵を壓し、これを其の目的の厚さ——六吋とか七吋とかいふやうに使ひ途に應じた厚さ——とし、それから其の一面を煉炭及粘土と共に熔爐の中に入れ、其の表面を炭素化した上、これを取り出して代る／＼熱したり、冷したりして鍛鍊すると、其の炭素化した面は非常に堅くなるのであります。これがハーバード式鋼鐵なのであります。がその後獨逸のクルップ會社で發明したクルップ式鋼鐵が出来て、ハーバード式は類れかゝりました。然るに日露戦争の頃に米國では更らに進んだ装甲鐵材が發明されました。その發明者は同國海軍省の經理局にゐるクレイランド・ダビスといふ人で、この鋼鐵板は砲彈が當つてもボン／＼跳ね飛して仕舞ふだけの力を有つてゐるといふ事でありませぬ。この鐵材の製造は、先づ強い電氣の力で、白熱に熱した炭素を、鐵の板に混ぜて造るものださうです。けれども、

現今では矢張りクルップ式鋼鐵板を使つてゐる艦が一番多いやうであります。それから第三は石炭の積載量で、現今の戦艦は二三千噸内外の石炭を蓄へ、一時間に十節の速力でもつて、八千節を休まずに航海するだけの力がなければならぬのであります。一體石炭を澤山に積んでありますことは、航海が安心して出来るばかりでなく、この石炭を二尺の厚さに積んで置きますと、丁度一寸の厚さをもつてゐる鋼鐵板と同じだけの防禦力があるのですから、どうしても石炭は餘計に積まねばなりません。

戦艦の機関は何うなつてゐるかと言ふと、これは専門的の知識がなければ、説明しても委しい事は判りませんが、先づ主機関と副機関とになつてゐるのであります。主機関は艦底内部の兩側に据え付けられて、其の間は防水壁といつて、若し艦の一部が破れても、水が侵入して來ない爲めの仕切りを以て隔てられ、少しも空間がありません、さうして其の上部は鋼鐵の防禦甲板で蔽ひ、

其の兩端は一呎の鋼鐵防水壁で圍まれ、其の兩面に當るところ即ち舷側は厚いハーバード式製鋼板若しくはクルップ式硬鋼板を以て防がれてゐるのであります。この機関の防禦といふ事は、造船術の上では最も研究されて居ります點であります。而してこの主機関は三回膨脹式の機械が二ツあつて、これに蒸氣を給する汽罐は、二十五基の水管罐から成り立つて居て、其の力は一萬二千馬力を出すのであります。一馬力といひますのは、一秒時間に五百五十磅——七十貫ばかり——の重さのものを、一呎の高さに持上げる力をいひますので、一萬二千馬力と言へば、一秒時間に六百六十萬磅——約一千一百八十貫——の重さのものを一呎の高さに持上げる力を持つてゐる譯なのであります。又た副機関は、主機関を助けるのは勿論、火事でも起れば、直ぐにこの機関で海水を汲み上げてポンプに送るとか、海の水を蒸餾して淡水にするとか、又は艦載小蒸汽船乃至ボート——戦艦には四十呎から六十呎位までの小蒸汽船四隻とボート

二三隻は必らず載せてあるものです——錨を揚卸しする捲揚機械、水雷發射用の空氣壓搾機、探海燈の原動機を始め艦内のいろ／＼の機械を動かす動力に使はれますので、其の働きは實に重大なものなのであります。さうしてこれ等の機關を動かしますところの汽鐘を焚きます方法は、航海中でありませれば、自然通風と言ひまして、天然の風に任せるのと、機械の力、マア大きな旋風器のやうなもので風を起させ、其の風を汽鐘の焚口の方に向はせ、火勢を強くさせるのとであります。けれどもこの自然通風でない機械で風を起す強壓通風といふ方は、非常な場合に出來るだけの速度を出す場合でなければ使ひません、マア戰時に限ると言ひましても差支へないのであります。

それから今度は機關部に續いて、装甲を厚くするところの要部を少しく説明いたしませう。この要部は即ち司令塔、露砲塔、戦闘樓等であります。司令塔は艦長が居りますところで、戦闘樓の下、露砲塔の前と、それから艦尾の二ヶ

所にあるのであります。艦長はこの中に居りまして各部に命令を傳へるのであります。其の通信機關は、口信、機信、電信の三通りありまして、口信は口で命令を傳へるので、重に火藥庫、彈藥室に向つて用ひられます。機信は機械に依り、電信は電氣の作用による事は文字の通りであります。この司令塔は何ういふ風に出來てゐるかと申しますと、十六吋の厚さあるハーバート式鋼鐵板で圍まれてゐる大きな圓い筒のやうな形をした塔なのであります。さうして其の上部の方から少し下つたところに帯のやうな隙がありまして、其處からは四方八方が見られるやうになつて居ります。それから又たこの塔内に居りまして艦の進退、操縦其の他一切の指揮を傳へる事も出れば舵取器や羅針盤等があつて、艦長自からが艦を止めたり進めたりする事も出るのであります。詰り司令塔は軍艦の頭腦で、艦長は自から甲板に立つて、叱咤號令をしませんでも、此處から完備した通信機關に依つて、自由に艦をも人をも動かす事が出來るの

であります。

戦闘樓は今申した、司令塔の上にあるのであります。甲板の上に高く聳へて居りますマストの中程に、獨樂のやうな形をしたものがあるでせう。それが即ち戦闘樓なのであります。この中には數門の速射砲と機關砲が乗つて居ります。無論この砲を取扱ふ人もゐるのであります。けれどもこの戦闘樓は餘り大なる効力はないのであります。この戦闘樓にあります大砲では、遠くまで届きません。それより砲塔にある主砲の方が遙かに遠方まで達しますし、敵が近くなければ水雷發射も出来るのでありますから、攻撃するにしても、防禦するにしても、不十分であります上に、これがあると、敵の目標になり易く、若し敵の砲彈がこの戦闘樓に命中しまして、直ぐ下にある露砲塔の上にも落ちて來やうものならば、戦闘樓ばかりではなく、同時に露砲塔にある主砲までも役に立たないやうになりますから、これは全く不用だと申す説もあるのであります。

併しながら、この樓上に在つて遠くの方にゐる敵を發見するとか、又は距離を測るとか、我艦から打ち出した砲彈が、敵艦に命中したか否かを確めるなどには是非なくてはならないものとなつて居ります。

露砲塔は主砲の置いてある軍艦の砲臺ですから、十分に防禦をして置かねばならぬのであります。この主砲の効力如何が、直ちに戦艦の勢力如何を證據立てるのであります。昔はこれを砲圍塔と申しまして、圓い形の十五吋ある鋼鐵の壁で、其の下の方は十七吋の鋼鐵板を以てこれを二重に圍み、其の底には十八吋の鋼鐵の帯があつたのであります。さうしてこの中に大砲を据えて、大砲の首部だけ出し、大砲は自由に回轉が出來、砲と一緒にこの鋼鐵の壁もグル／＼と廻つたのであります。それが改良されて今の露砲塔となつたのであります。改良されました點は、大砲が壁の上に露はれてグル／＼廻る時分には砲身だけが廻つて壁までも一緒に廻るやうなおつ／＼がなくなつたのです。それと

同時に、壁は大砲ばかりでなく、この大砲を取扱ふ砲員までも其の影に隠れて作業が出来るやうになつたのであります。

以上が戦艦の要部で、装甲を厚くするところであり、而して、これ等の砲と密接の関係があつて、離れる事が出来ないのは火薬庫であります。火薬庫は何れの戦艦にも七ツあるものです。其の中の二ツは艦首と艦尾の露砲塔の下にありまして、主砲の用に使ひ、他の二ツは六吋副砲の用とし、あとの三ツは其の他の速射砲、機關砲又は小銃等の分としてあるものであります。そうして水に濕らないやうにするとともに、火に熱しないやうにしてあり、一萬五千個の彈丸が貯へられてあります。其のうちの千五百個は主砲の分であります。

砲に續いて戦艦の武器は水雷發射管と衝角であります。衝角は戦闘勤務のところで一寸申した通り、最後の突貫をするものであります。水雷發射管は魚形水雷を發射する大砲の筒のやうなものであります。が、まだ實戰でこれを使つ

た例はないのであります。この外軍艦には艦橋といふものがあります。これは戦闘樓と司令塔の中間にあつて、海上を見張り、又は水路の嚮導をなし、平時にあつては艦長が艦の操縦を司るところであります。其の兩端には各一臺の探海燈を備へてあります。其の光は一哩の遠きを照す事が出来るのであります。

序ですから、戦艦ばかりでなく一般、軍艦の信號と艦員の配置とを此處で説明しておきませう。信號は軍艦と軍艦との通信をする大切なもので、口ともなれば耳ともなるのであります。信號には普通旗を以てするのでありますが、遠距離になつて、旗などでは判らない時には、閃光信號といふのを用ゐます。これは小さい鏡に太陽の光線を受けて、それを反射させ、更らにこれを相手の軍艦に備へてある閃光信號器に映射させ、其の映射する時間の長い短いに依つて通信をするのであります。好天氣の時には百海里以上の遠距離でも、よく通信が

出来るのであります。夜中の信號はマストの一番頂上に燈火を置き、其の燈火が見へたり隠れたりする時間の長い短いに依つて通信をするので、一分間に七言葉位の割合であります。その外濃霧の時には音響信號といふのをを用ひますが、今では無線電信が発達してゐますから、最も多くこれを用ひて居ります。それから艦員の配置ですが、艦員は先づ艦の右側と左側の受持を定め、それを更らに四組にして、前甲板手、後甲板手、前橋樓手、大橋樓手としてあります。

軍艦で一番偉い人はいふまでもなく艦長で、艦一切の指揮官であります。艦長の次ぎは副長で、艦内すべての出来事に對しては裁判をしたり、石炭の積卸し、小蒸汽の揚おろし、艦内の風紀等は悉く副長が扱ひます。其の外の幹部としましては大砲の事を指揮する砲術長、機關を取締る機關長、水雷を司る水雷長、航海上の責任者たる航海長を始め金錢を擔當する主計長、軍醫長、分隊長等であります。

十九 巡洋戰艦及び巡洋艦

巡洋戰艦といふ名稱は最近の事で、日露戰爭頃には斯ういふ名稱はなかつたのであります。現在我國にあります巡洋戰艦は、例の海軍收賄問題で一入有名になつた金剛を初とし、比叻、霧島、榛名、鞍馬、伊吹、生駒、筑波の八隻です。此うちで日露戰爭中の三十八年に進水式を行つた筑波が一番古い部で、大正二年に進水した霧島、榛名の兩艦は我國の軍艦中で最も新しいのであります。さうして此巡洋戰艦中金剛は英國で建造されたのですが、他のは悉く日本で建造されたものであります。

巡洋戰艦は、戰艦の武力と巡洋艦の速力とを持つたものであります。戰艦では今度出来る扶桑級のものが一番疾く二十二節で他は二十節乃至十八節です

が、巡洋艦では金剛、比叡、霧島、榛名が二十八節、伊吹が二十二節、鞍馬が二十一節、最も古い生駒、筑波でも戦艦中の新しい攝津、河内、安藝などと同様二十節の速力があるのです。主砲も戦艦が十二吋砲なのに不拘、金剛、比叡、霧島、榛名には夫よりモット威力のある十四吋砲が八門宛あります。十四吋砲は現在の海軍の大砲中で最も優れたものでこれ以上の大砲はなく砲身の長さも十二吋砲よりはザット一間半だけ長く八間半であります。従つてこの弾丸の重さや、火薬の重さも十二吋砲に優つてゐる事は申すまでもありません。巡洋艦にはこの巨砲がある上に六吋砲が十六門、機關砲が五門あつて、四吋砲、三吋砲、水雷發射管等まで備はつて、攻撃力は戦艦同様であります。

現在の巡洋艦はまだ我國では實戦には用ゐられてゐませんが、要するに日清日露兩戦役に於て偉勳を奏した装甲巡洋艦の進歩したもので戦艦の武力と巡洋艦の速力とを同時に備へてゐるのが長所でありますから、戦闘の場合となれば

ば戦艦と巡洋艦と兩方の任務を行へるのであります。速力の節といひますのは、海里と同じで日本の距離にしますと一節は約十七町になります、二十八節といひますと四百七十六町即ち陸の里數に直して十三里半足らずになります。詰り一時間にこれだけ駛る力があるので、これを陸に譬へて見れば二十八節はザット新橋から大船位まで、駛る割合は特別急行列車と似たものであります。巡洋艦は斯の如く優良な武器と快速力を持つてゐるものであります。さうして司令塔とか露砲塔とか乃至戦闘樓のやうなものはすべて戦艦と同じ様に出來てゐるのであります。巡洋艦の定められた任務は次に委しく申述べますが、前にも申す通り、巡洋艦は戦艦と巡洋艦との長所を取たもので巡洋艦と同様、商船の保護や敵偵察もすれば、戦艦に代つて艦隊の主力となり戦闘をする事もあるのです。又戦艦が破壊又は沈没したやうな場合にこれに代つて其の位置につくのは申すまでもありません。

一寸餘談のやうですが、進水といひますのは、軍艦の形が出来て、初めて海面に浮んだ時を言ひますので、進水後に機關を据付けたり、檣や砲塔や、戦闘樓や司令塔などは拵へられるのであります。これは艤装と申すので、この艤装を終へてから私試運轉、公試運轉を経なければ軍艦として所謂一人前になつたのではないのであります。さうして、龍骨——軍艦の肋骨——を据付けてから進水するまでに一ケ年乃至一ケ年半位を要し、進水してから艤装を完成するには更に一ケ年位を要するのであります。尤も英吉利が、ドレッドノートを建造しました時には、起工から進水までが八ヶ月で、これが一番短期のレコードとなつて居ります。

巡洋艦には一等、二等の區別ある事は前項に述べた通りであります。巡洋艦の任務は戦艦に比してなかく複雑なのであります。戦艦は海戦に於ける主力として、敵の艦船を破壊若しくは沈没させるのでありますが、巡洋艦は戦時に

於ては戦艦を助けて戦闘に参加し、其の特有の快速力を以て、偵察其の他の任務に服しますと同時に、我が商船の保護をなす爲めに、航路の安全を圖り、進んでは敵の商船を拿捕するなど、一通りや二通りではないのであります。戦艦が如何に強くつても、味方の軍艦を護つて呉れるものがなければ、安心して敵と戦へない事は、戦艦の條で述べた如くであります。而してこの内助をなすものが巡洋艦であります。

戦時に於ける偵察は實に重要なものであります。陸軍では俘虜とか、戦線附近にゐる住民の口からこれを聞くといふ便宜もありますけれども、海軍ではさういふ事は出来ないのであります。と言つて、敵の様子が知れませんか時には、味方は作戦計畫を樹てる事が出来ません。其處で速力の疾い巡洋艦はこの偵察もしなければなりません。何んの事はない、巡洋艦は海軍の騎兵といふ様なものであります。それ故に、巡洋艦が偵察に出掛けます時には、敵の姿を見たと言つ

て、直ぐに戦闘を開くやうな事はありません。先づ敵の様子を篤と見定めて、例令不十分な報告でも、これを本隊に齎らすのがよろしいのであります。けれども敵に火蓋を切られれば戦はない譯には行きませんから、それ等の懸引は一つに艦長の心持次第で決せられるのであります。従つて巡洋艦の艦長は精細なる観察力と、明快なる判断力とを以つて、即座に事を決するだけの頭腦を持つた人でなければならぬといふ事になるのであります。つまり、巡洋艦の艦長は智勇兼備の人でなければならぬのであります。斯くして愈々戦闘が始まりました時には、戦艦は中央にあつて、巡洋艦は其の兩側に並ぶのが普通となつて居ります。これは兩側面を警戒して、敵に突き破られないやうにするのと同じ時に、敵から味方の作戦計畫を見破られないやうにするのであります。さうして、味方の主力戦艦に續いて巡洋戦艦等が、沈没又は破壊して物の役に立たなくなつた時には、戦艦の位置に就いて戦を引受け、味方の艦隊が散々になるの

を防ぎ、而して敵と猛烈に戦はねばならぬのであります。こういう場合は巡洋艦の速力は實に非常な効力をなすものであります。

それから又た、商船を保護して航海の安全を圖るといふ方から申せば、近來我國は益々世界的になつて参りました、海外諸國との通商貿易も盛んになりました。従つて商船は常に世界各國の有名な港々と我國との間を絶えず往來して居ります。それが平時であれば何等の危険もありませんけれども、一度戦争が始まれば、これ等海外にあります商船は、何時敵艦の手に奪はれるか或は撃沈させられるか判らないのでありますから、これを保護し、反對に敵の商船を拿捕しなければなりません。それにも矢張速力が疾くなければなりません。今度我海軍の一部隊が南洋マーシャル群島中のヤルト島を我手に收め續いて東西カロリナ群島、マリアナ群島等を占領したのも、要するにこの附近に出没して、我國や同盟國の商船を脅かす、獨逸の軍艦があるからで、これも詰りは我

海軍が、商船保護をやつてゐる譯であります。尤もこの方面に向ひました我海軍の勢力は、戦艦か巡洋戦艦か、それとも巡洋艦であるかは知る事が出来ませんけれども、斯うした任務は、先づ巡洋艦がする事となつてゐます。

勿論、これが巡洋艦の任務と言ひましたところで、必らず巡洋艦ばかりがやると決つたものではなく、先頃、神戸附近で、驅逐艦が獨逸の商船ズキモー號を拿捕した例もありますが、先づ巡洋艦が重にやる事になつてゐるのであります。

巡洋艦は斯様に種々さまざまの務をしますから、戦闘力も相當に備へておれば、速力も十分に欲しいといふ事になります。其の爲めに從來のものより進んだ巡洋戦艦も出来たのではありますけれども、其の他の巡洋艦も戦闘力を輕んずる事は出来ません。現在一等巡洋艦たる磐手、出雲には十吋砲四門が主砲となつてゐて、外に六吋の副砲十四門があります。又た淺間、常磐、八雲、吾妻、

日進の五艦には各々四門宛の八吋主砲があり、春日には十吋砲一門、八吋砲二門又た阿蘇には八吋砲二門を備へ、六吋副砲は多きは十二門、少きも六門宛を有つて居ります。其の上ならず、露砲塔其他の防禦も戦艦及び巡洋戦艦と比較して甚しい劣り方は致して居りません。又た二等巡洋艦のうちでも、笠置、千歳には八吋砲が各二門あり、津輕、宗谷、薩摩、平戸、矢矧、須摩、明石、新高、對馬、音羽の各艦には多きは十二門、少きも六門乃至二門の六吋砲が備へてあります。尤もこのうちには、露砲塔の代りに、砲塔廓と申しまして、それより稍劣つた砲臺しか有つてゐないものもあります。

巡洋艦は其の任務が、以上述べた如く戦艦と多少の相違がありますに連れ、艦の構造も亦相違する事を免れません。即ち兵器よりも速力を貴ぶ爲めに機關を主としてありますから、艦の胴中が戦艦ほど膨れず長さは戦艦よりも却つて長いのです。戦艦が稍圓味を持つてゐれば、巡洋艦はズット細長いのです。

うして敵に對する防禦も、砲塔などよりも、寧ろ機關部に重きを置いてあります。巡洋艦の價値は大砲の大小や多寡ではなく、機關が優れてゐるか否かで、丁度戰艦が主砲の大小多寡に依つて、強弱の度を知る事が出來ると同様、巡洋艦は機關の優劣が、直ちに其の艦の優劣を計る標準となるのであります。これ等も戰艦と巡洋艦との相違してゐる點であります。

二十 海防艦と砲艦

海防艦と言ひますのは其名の如く戰時に於きまして、其の國の海岸を防禦するが其の任務であります。例せば日露戰爭の際に浦鹽艦隊に屬する装甲巡洋艦のグロムボイ、ロシヤ、リユーリツク及びボガチール等が津輕海峽を通過して太平洋上に現はれ、我國の港灣を脅かすとか、或は商船を砲撃した事がありま

した、斯ういふやうな場合、横濱横須賀は申すに及びません、日本全國の港々を始めあらゆる商港軍港等を護つて敵を近寄せぬやうにするのであります。早く申せば、海防艦は陸軍の留守師團のやうなもので、外に出て戰爭をしない代りに内地の海岸を安全に防護するのが其の任務なのであります。

海防艦を理想的に建造しますれば、吃水が淺く陸岸に近づき易くするのであります。即ち艦が水中にある部分の長さを成る可く少くして遠淺でも心配なく陸に近づけるやうにするのであります。けれども世界各國殊に海軍國として誇つてゐる英國でもこの理想通りの海防艦は一隻も有つて居りません、多くは戰艦若しくは装甲巡洋艦の古くなつて、モウ廢艦の時が近づいたものを以つて、これに充てゝ居ります。進んで戰ふのでなく、退いて護るのでありますから、それでも差支なく間に合ふからであります。

英國ですらこの通りでありますから、我國などは無論海防艦には概ね老齡の

戦艦若しくは装甲巡洋艦を以てこれに充てゝあります。日露戦争当時、敵の戦艦として旅順にあり我艦隊を苦しめたニコライ一世の壹岐、アリオールの石見、ペレスウイトの相模、ボルタワの丹後なども今我國の一等海防艦となつてゐます。同時にこれ等の諸艦と戦つて勇名を轟かした富士艦も同じく一等海防艦に編入され共々海防に従事して居ります。これがもの言はぬ軍艦だから何ともありませんが、若し武人でありましたら、今頃は年老ひた身體の皺を擦りながら互ひに古い昔の戦物語りに、追懐の情を催してゐるでありませう。これ等を思ひますと、現在の一等海防艦に對して面白い感じが致します。

又二等海防艦は日清當時奮戦した日本三景艦として有名な装甲巡洋艦の嚴島橋立乃至高千穂、秋津洲、千代田の諸艦を初め露國から捕獲した装甲海防艦アブラキシンの沖島、センヤージュインの見島、エカチノスラブの韓崎、マンヂェリアの滿洲、スンガリーの松江もあり、この外武藏大和の二艦を合せて十二隻

高千穂は
千早もや
正みる
つてあ
つた。し
ました。

あります。海防艦に斯く一等二等の區別のありますのは艦の大小に據つた事は巡洋艦などと同様で其の區別の噸數は前に述べておいた通りであります。此外に三等海防艦といふのもありますが、我國では現在はありません。海防艦はこうした任務に服するのでありますけれども、絶対に戦局に参加しない譯ではありません。戦艦、巡洋戦艦、巡洋艦等の勢力を集中しても敵に及ばぬやうな場合には、無論海防艦中の優れたものは戦闘に加はります。又た作戦の都合でこれ等の老艦を第一戦列に出す事もあります。それは丁度、陸軍が常備軍で不足する場合、後備旅團を編成して戦地に送るやうなものであります。況んや現在の海防艦は戦艦や装甲巡洋艦として戦場往來をした古武者、艦齡こそ老つたれ昔取つた杵柄、夫はまだ働く餘地はあります。又砲艦は海防艦より更に小さく一等砲艦としては最上、千早、淀、龍田の四隻、二等砲艦には宇治、隅田、伏見、鳥羽、嵯峨の五隻があります。

百噸以上が一等、以下が二等となつて居ります。

砲艦の任務は申すまでもありません。戦闘に参加して敵に近づき、之を砲撃するのであります。最も砲艦は艦も小さく戦艦のやうな重砲は搭載する事が出来ません。軽砲の部に屬する速射砲のみであります。而して最も大きいものでも僅に六吋砲に過ぎず他は四吋か一時砲、さもなければ機關砲であります。其の代り、吃水も浅い艦ですから、ヅン／＼陸岸に近いて、海岸を砲撃し、敵の陸軍を攻撃する事なども自由であります。これがこの艦の特徴とでも申しませうか。それでこの砲艦の有つてゐる大砲は戦艦の主砲を陸軍の要塞砲に比較してマア野砲兵が有つてゐる速射砲のやうなものです。

二十一 水雷驅逐艦

水雷驅逐艦といふものは、千八百九十三年——明治二十六年——英國に於て初めて建造されたものであります。さうしてこれが實戦に初めて用ゐられ其の効果を實驗し得たのは日露戦争の時でありました。何ういふ譯で英國がこの驅逐艦を發明したかと申しますればそれは佛國に對する自衛の爲めであります。

英國と佛國とは所謂英佛海峡を距てて國境を接してゐますから、一朝戦争が始まればそれこそ砲彈が直ぐに敵の國々に届くのであります。従つて陸岸の防備も必要ですけれども、海軍の戦争は猶それ以上であります。そこで佛蘭西は水雷艇を發明して、海峡に出沒するやうになりました。茲に於て英國でも之に對する防禦の方法を講じなければならぬといふので、研究の結果水雷艇より更に優れたところの水雷驅逐艦が出来たのであります。驅逐艦は初めは水雷捕獲艦といつてゐたのであります。さうして速力の如きも僅かに二十ノット位であつたのですが、段々に改良されて只今では大抵三十ノット以上になつてゐま

す。現に我が一等驅逐艦山風、海風などは三十五ノット、二等驅逐艦の櫻、橘でも三十三ノットを有し三等驅逐艦たる雷以下のものでも最大三十一、最少二十七ノットであります。

驅逐艦の任務は、専ら敵の水雷艇を破壊するのにあるのです。けれども、時には封鎖に任じ又は封鎖を破つて脱出するやうな任務にも従ひます。之は全く快速力を有してゐる爲めであります。それから時としては自ら水雷艇となつて敵の大艦を襲撃したり巡洋艦に代て敵偵察の斥候をやる事もあります。この艦は通例二百五十呎から三百呎位の長さで幅は二十八呎内外です、吃水は五六呎で艦の外部は四吋位の薄い鋼鐵板で張られ二百六七十噸位の排水量であります。艦に搭載してゐる一番大きな大砲がやつと十二吋速射砲で艦首の甲板上に備へられ、主として水雷艇を撃沈する爲に用ゐられるのであります。其外には兩側と艦尾に六吋砲が三門あり水雷發射管は十八吋位の大きなものが二門あり

ます。尙甲板には大なる探海燈が一基と一二のポートがあるのです。

艦内は成る可く簡單にするのが目的で軍艦のやうに大きな部屋は持たないのであります。それから水雷發射管は名稱は同じでも戰艦巡洋艦などにあるものとは大變に相違して、驅逐艦ではこれが生命でありますから、汽罐に續いての大切なものとしてあります。水雷は大抵四個を備へて置きました、其のうち二個は二門の發射管に入れて直ちに發射されるやうに準備し、他は豫備としておくのです。この艦は速力が疾く頗る機敏ですから、敵の大艦に向つて奇襲をするとか要塞等のある敵前に於て掃海作業を助けたり、陸軍の上陸を援助する等にはこの上もない効があるのです。其の代り艦の構造が脆弱ですから大きな砲彈を一發喰つたり又は坐礁でもすると直に沈没するといふ危険があります。けれどもこれは已むを得ないのであります。現在日本にある驅逐艦は前記の如く一等山風、海風二等櫻、橘の外に建造中の一等及び二等のものが十隻あります。

三等は雷以下五十隻のうち白妙は御承知の通り膠洲灣で敵前作業中に坐礁しましたから四十九隻で之に一等の二隻、二等二隻を加へますと現在数が五十三隻になるのであります。

二十二 水雷艇

水雷艇を創造したのは佛國であります。一體水雷をして、十分に其の効果を發揮させやうとしますには、これを思ひの儘に何處にでも持運べるやうにしなければなりません。さうして敵の不意に乗じてこれを發射する事が尤も必要なのであります。其の必要を充たす爲めに水雷艇と水雷發射管が發明された譯なのであります。それ故に水雷艇は現在海軍戰術上に於て是非なければならぬものとなつてゐるのであります。戰艦をはじめ巡洋戰艦、巡洋艦等はいづれも水

雷發射管を有つてゐますけれども、これはイザ戰鬪となつて、敵味方が互に巨砲を轟かし始めるとモウこんなものを發射するには及ばぬ事は前に述べた通りで、いづれかと言へば敵を攻めるのではなく身を守る爲めで、即ち萬々に備へておくといふだけで、先づ實際に使用する機會はないと申しても差支ない位であります。況んや、敵の混亂してゐる際とか備へなき不意に乗じてこれを放つ事は到底出來ないのであります。此處に於て身輕で速力が疾く、何んな處にも行けるといふこの水雷艇が發明され之等の缺陷を補ふやうになつたのであります。水雷艇に鎧を着せた——装甲を施すこと——のは我國が最初であります。これは明治十八年の事で、小鷹號といふのがそれでありませう。けれどもこの装甲一等水雷艇小鷹號を建造しましたのは我國ではなく英國のヤロー會社でありました。其の當時は速力は僅に二十一節で装甲といつても汽機汽罐の要部を一時の鋼鐵板で防禦したのに過ぎなかつたのであります。この小鷹は日清戰

争當時に威海衛攻撃に非常な手柄を現はしました。

水雷艇の武器は一等艇たる隼、鵠、真鶴、千鳥、雁、蒼鷹、鴿、燕、鷺、鶉、鷓、鴒、雀、雉、鷗、鴻の十五隻はいづれも六听砲一門、二听半砲二門、發射管三門を有つてゐます。同じ一等艇中でも白鷹だけは六听砲がなく二听半砲三門、發射管三門であります。二等水雷艇たる三十九號乃至四十一號及四十三號、六十二號乃至六十六號の九隻は二听半砲一門、發射管三門、六十七號は六听半砲二門、發射管三門、六十八號及七十一號乃至七十五號の七隻は六听半砲二門發射管三門、三十二、三十三及三十六、三十七、三十八、四十四、四十五、四十六、四十九、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一號の十五隻は三听砲二門、發射管三門であります。要するに水雷艇の任務は、寸鐵人の肺腑を刺すといふ意味のもので、莊嚴にして且つ雄大なる戦艦でも又幾多の缺點はあるものですから、其の缺點に向つて只一打に仕留るといふのであります。其

の代り危険は多いのであります。虎穴に入らざれば虎子を得ずといふ諺がありますが、水雷艇は即ちその虎穴に飛び込んで虎子を得やうとする爲めの艇であります。

大男總身に智恵が廻りかね、山椒は小粒でもビリと辛いといひますが、戦艦巡洋艦は即ち總身に智恵が廻り兼ねる大男で、水雷艇と驅逐艦は小粒の山椒であります。それですから乗組員は常に決死の意氣がなければならぬのであります。さうして驅逐艦と水雷艇と比較すれば驅逐艦の方が後に發明されただけ幾分か優つてゐます。

水雷艇は大要斯くの如きもので、現在に於ては實際なくてならないものであります。今に驅逐艦とか潜水艇とかがますます、進歩發達して來れば、或は水雷艇は不用になるかも知れないのであります。

二十三 潜水艇

潜水艇が我海軍に用ゐられるやうになつたのは日露戦争の終了した明治三十八年の末であります。それから次第に建造されて、目下のところ一號から十五號まで十五隻を有するに至つたのであります。尤もこのうち十四、十五兩號は目下建造中であります。さうして是等の潜水艇が有する攻撃用の武器は、一號から七號までが水雷發射管一門、八號から十五號までが二門であります。潜水艇が水中に沈むで航行し得る時間は速力に依つて一定してゐませんが、全速力を出せば三時間、さなければ八時間位は航行されるのであります。

潜水艇が軍事に用ゐられたのは、日本に於いてこそ僅々十年前の事でありませんが、西洋では千六百二十年——今から二百九十四年前、後水尾天皇の元和六

年——の昔から潜水艇の發明に就いて苦心してゐたのであります。さうして第一番にこの發明をしたのは和蘭のドレッベルといふ人で、英國のテームス河で試験をしたのであります。其の時は勿論極めて幼稚なもので、重錘の附いた木造の船に皮の蔽ひをして水中に沈ませ、これを櫂で漕いだのであります。其の後千六百五十二年に佛國のドンといふ人が、時計の仕掛から思ひ付いて船の外に附けた車を運轉して水中航行をする事を考案しましたけれども、これは兩方共水の流れに従つて航行するといふのに過ぎなかつたのです。それから引續き二三の人が考案しましたが、いづれも好成績を擧げる事が出来なかつたのです、それが千七百七十三年になつて亞米利加のブッシェネルといふ人が稍々進んだ發明をしました。これは龜の子から思ひ付いたもので、其の形もよく似てゐたのでした。丁度これが發明された時は合衆國が獨立戦争の最中でしたから、これを利用して合衆國の港灣を封鎖してゐる英國の艦隊を爆沈しやうと企て、

三度まで水中に潜つて英艦に近附いたのですけれども、爆沈は出来ませんでした。併しこれに依つて水中でも火薬を爆發されると云ふ事が實驗されました。千八百五十年には獨逸のパウエルといふ人がブツシユネルのより更に一層進んでものを發明し、折柄獨逸の港灣を封鎖して居た和蘭艦隊の艦底を航過して封鎖を破る事に成功したのであります。これが我が嘉永三年で、ベルリ提督が浦賀に來た時であります。乍併、これとても未だ決して成功といふ事は出来ませんでした。それから下つて千八百八十三年に、瑞典のストックホルムに於てノルデンフェルトといふ人が建造した潜水艇は、餘程成功に近きものであります。この潜水艇は艇の長さが六十四呎、艇艦は全部銅製で動力には蒸氣を用ひてゐました。これは乗組員が僅かに四人で、壓搾空氣の作用によりまして、六時間水中に沈んでゐる事が出来て、何時でも水上に現はれるやうになつてゐました。その上水雷發射管まで装置してあつたのであります。これこそ實に現在

各國が用ひてゐる潜水艇の基本といつても宜いのであります。それから漸次改良に改良を重ねて千八百九十三年——明治二十六年——には米國が懸賞で潜水艇の設計を募集しました。さうしてホランド型、レーク型、ベーカー型の三種を得たので有ります。英國が千九百一年に採用したのもこのホランド型であります。其の後H、A、B、C、D、E等の各種を採用してゐます。斯んな状態で次第に發達した來た潜水艇は、現在英國に於てはD型で八百餘噸の大きなものを造り、而かも無線電信まで装置するやうになつたのであります。

けれども、潜水艇では佛蘭西が一番優つて居りまして、いろいろの型を採用して居ります。其の小さいのは六十八噸、大きいのは五百噸から八百噸位のものもあります。さうして數に於ても世界第一で、實に七十八隻の多數を持つて居ります。これに續いては英國で、佛國より一隻少なく七十七隻であります。米國は前にも申しました通り、其の設計を懸賞で募集したやうな關係も